

譚奇俗風



昭和
白虎隊
壯烈ノ十八少年の切腹

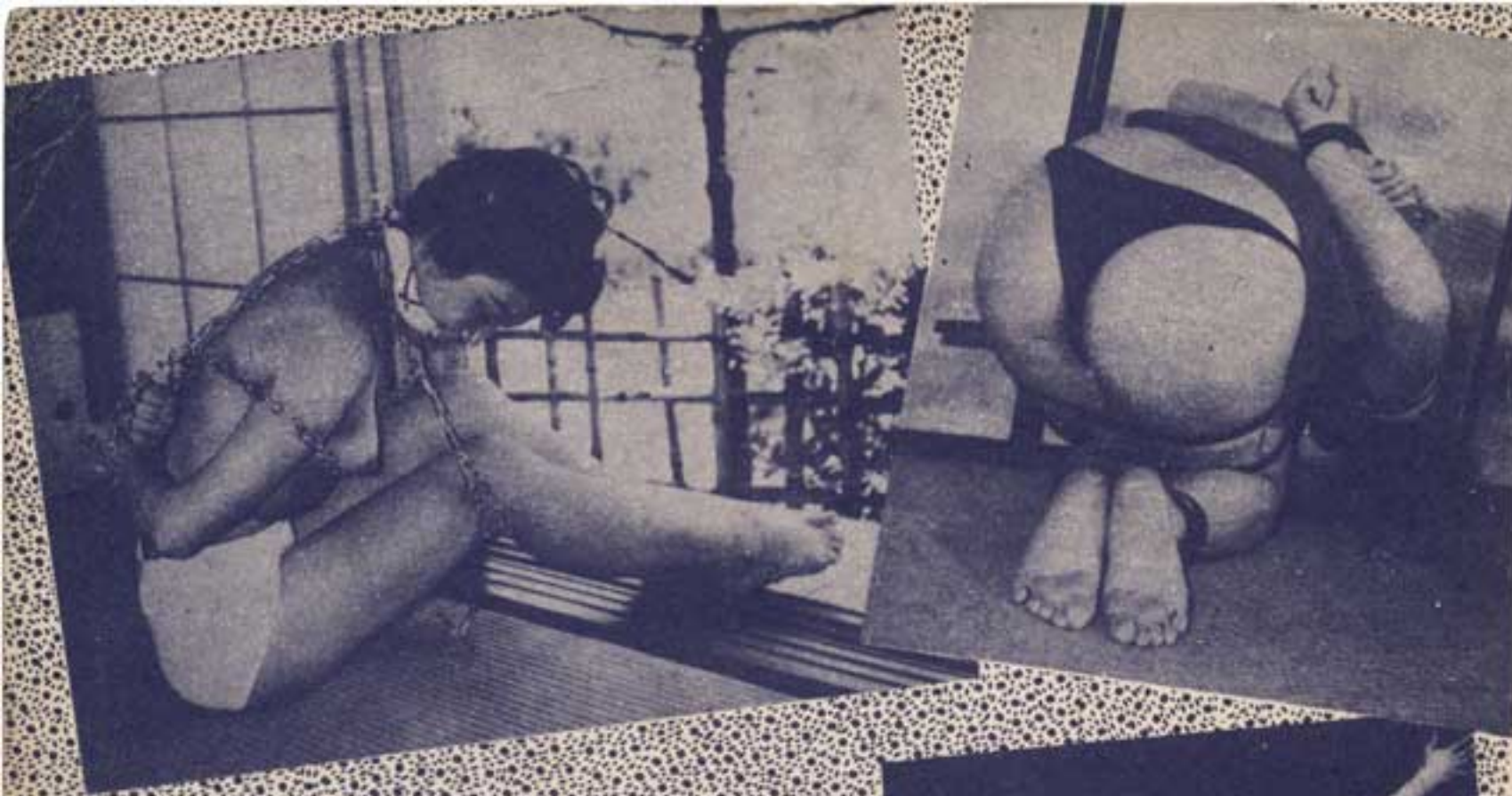
特集
鞭と縄
この魅惑あるもの

11月特別号

譚奇俗風

昭和36年11月号

定価200円



緊縛写真の
傑作がいろいろ
当社代理部に
そろってあります

良縁を一覧のうす
り申し込みください



あるソドミアの描いた“少年像”

悦悶の姿態

苦悶の表情
床は練瓦敷き
女身バベキュー
髪をかむひと
乳ぶさを焼く
床上の緊縛
穴の中で
緊縛透かし絵
大の字型縛り

カーテンの襴
縛られた主婦
艶縛4態
奇妙な宙吊り
縛悶のひと
とらわれのBG
縛愁のひと
椅子に縛られて

＜モデル＞

加納美也
青山桂子
浜ゆかり
島崎ユカ
須原圭子
望月まり子
西牧えり子
山名杏子
さつき・みち

★表紙……………土居啓子
★ソドミアの描いた少年像……………(表紙裏)
★ソドミアの描いた青年像……………(目次裏)

特集 鞭と縄…この魅惑あるもの

鞭とロープの蜜月

……………獅々村 裕(八)

鞭打ちたい女縛りたい女

……………栗橋 慎吾(五九)

ムチとロープに結ばれた、男女の織りなす妖しい悦悶の世界の赤裸々な人生！
女の心の奥には、男をムチで打ち縛りあげてさいなみたい願望がひそむという

ヒップ花火

……………北 潤(六三)

女のまっ白な尻に炸裂するムチとベルトは、妖美の夜に花ひらく花火の美しさ

聖なる虐待者バルバラ

……………谷 貫太(八二)

ヨーロッパで変態娼家として名高いイリスの家の、最も魅力ある鞭打の美女！
昼も夜も肉にしびれる……………根本 吟三(三三)

続・バステイーユ大公妃

……………スタン トン(三〇)

これ以上残酷な女性はいないだろうと思われる彼女も遂に命運尽きる時がきた
悪魔のような女……………真崎 伸一(七一)

火の鞭狂うとき

……………真野 麗(六六)

赤いムチ——それは火事の中の鞭打の思い出を秘めて、宿命のようにまつわる

白い二つの半球の魅力

……………高沢 英治(三三)

狂人のように、女の白い臀部につかれた、あるフンチシストの、偽りなき告白

ジュスチーヌ・淑徳の不幸

……………マルキ・ド・サド(元)
……………土居啓子・え

「悪徳の栄え」にも見られる傑作を華麗なさし絵で見せる絵物語





昭和 白虎隊 壮烈！十八少年の切腹……北小路 敦（二八）

黒 い 夜……葦田 奈貴（二三）

女形旅役者Hさん……桂 礼子（二七）

同性三角関係……滝川 茂一（二四）

ひとりの美少年をめぐって、ふたりの男が肉欲に狂い、踏みはずした傷害事件

S・Mロータリー……（二六）

ホモの窓……（二八）

女装愛好の部屋……（二九）

連載時代小説 多門 砦 風の巻……小田利美・え 吉（九）

生涯不犯の美男僧に迫る。苛酷な責めと、織手による女のしつようなさいなみ

連載小説 アブ 被害にぬれる夜 悦虐の青山三枝吉 彷徨⑦ 田上恵子・え（二七）

その夜、それぞれパートナーを伴って出席した三人の紳士たちが演ずるサド劇

☆読者サロン……（二八）

▼代理部分譲写真のご案内……（二七）

▼旧号在庫のお知らせ……（二八）

悦悶の姿態





苦悶の表情

黒髪が乱れ 乳ぶさがあえ
ぎ 疼痛が全身をかけ回る
すそが割れた恥ずかしさも
気にかからないほど 女は
苦痛にもだえ その中に女
の生き甲斐を汲みとろうと
する〈モデル・加納美也〉



床は練瓦敷き

練瓦の床に肌がこすれて 身動きすれば皮膚
が破れ 血がにじむ この不自由な姿態で
苦痛が全身をつらぬくへモデル・青山桂子へ

女身バーベキュー

庭につくられた炉の上に 縛られた身を横たえて これは生きながらのバーベ
キューだ 火の焼熱と 縄の苦痛が 女の裸身にたぎる(モデル・青山桂子)



髪をかむひと

苦痛のあまり髪をかむ その黒髪は女の命
女が女を感じるとき 縄の苦痛が肌をかみ
女の宿命が昇華するへモデル・加納美也へ



椅子に腰かけた姿勢で 縄が乳ぶさの上下
をくくり 髪をかむへモデル・加納美也





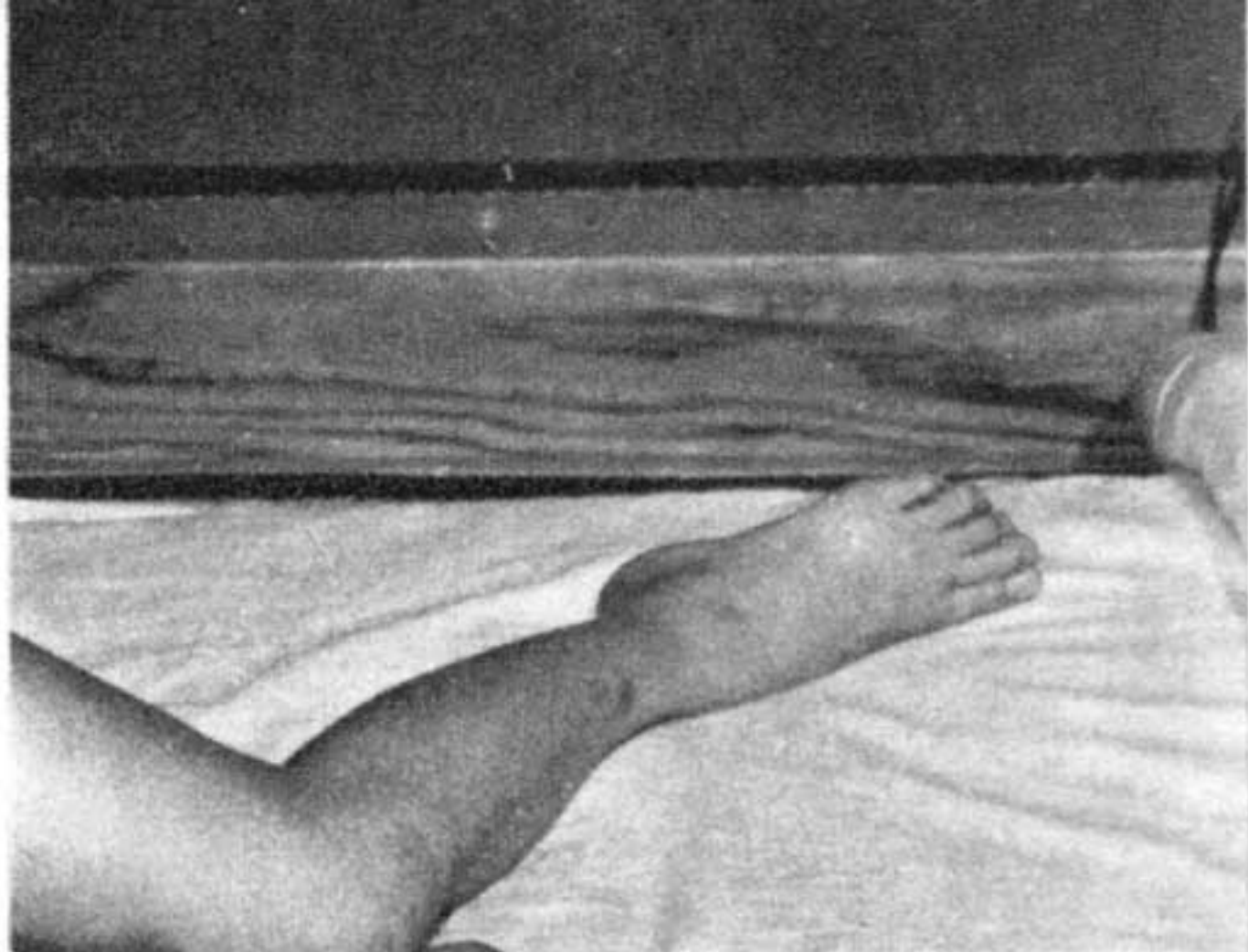


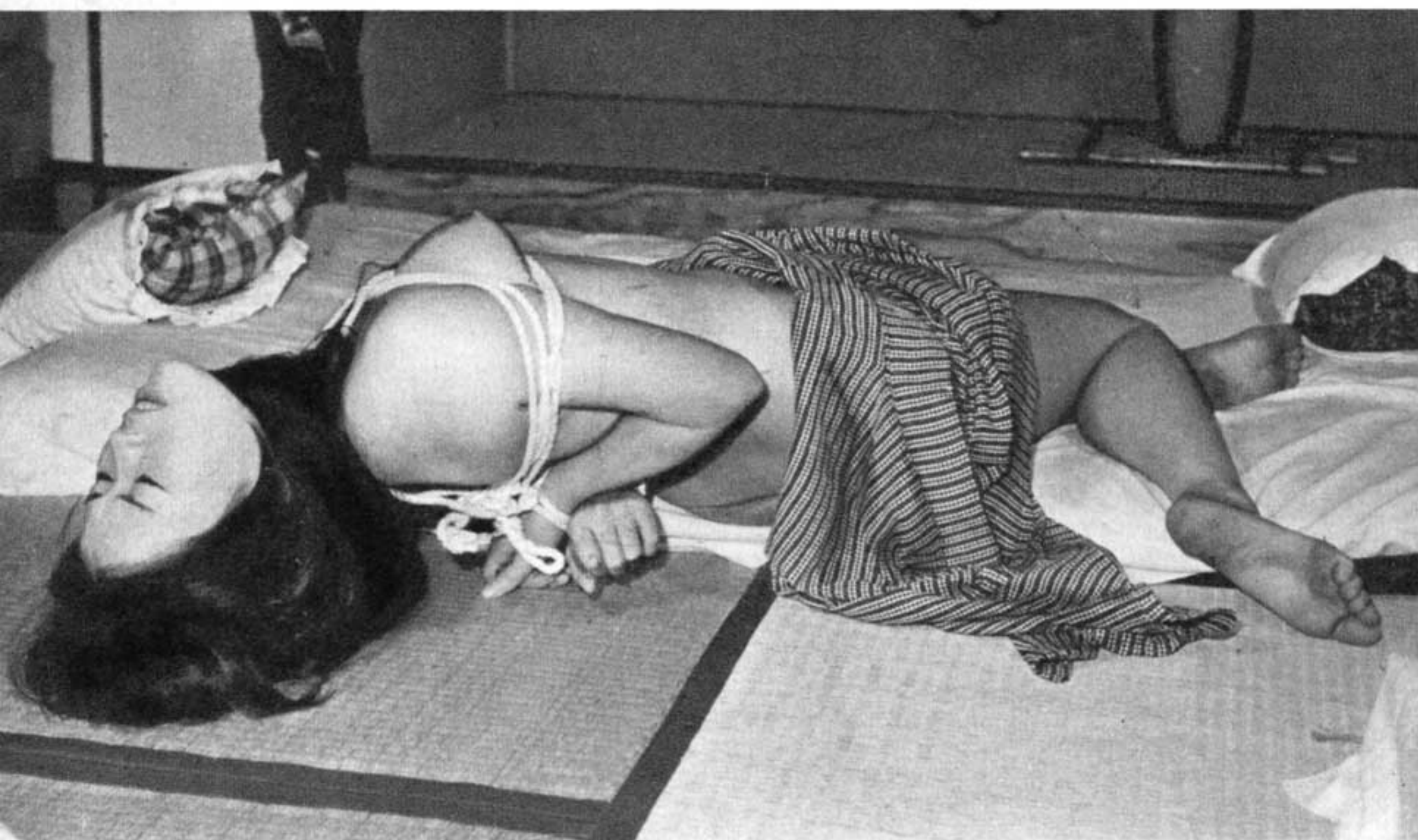
乳ぶさを焼く

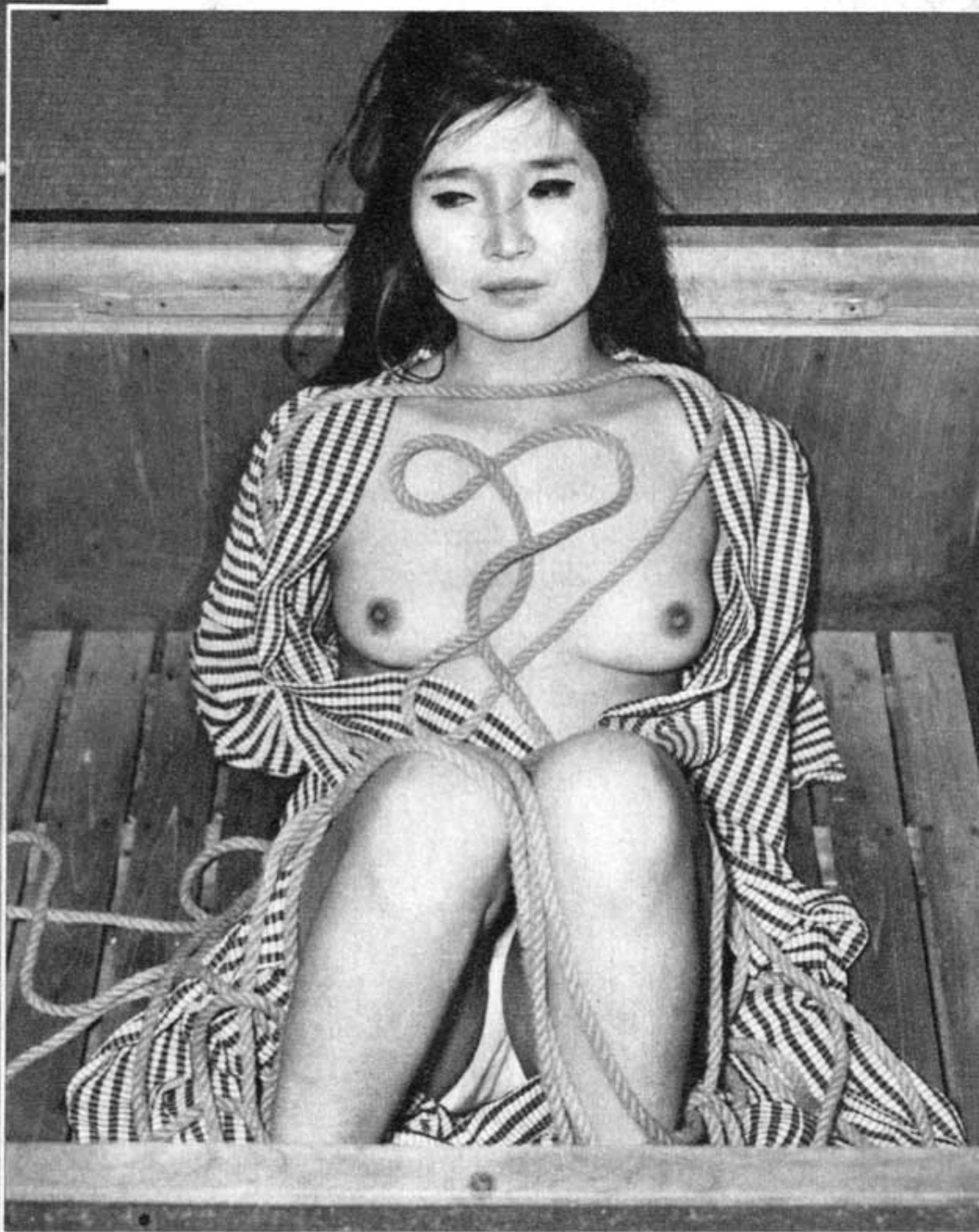
ローソクの火で焼いたコテを乳ぶさにあてれば
肉を焼くにおいが生臭いへモデル・浜ゆかりへ

床上の緊縛

うしろ手に縛られた身をころがされ どんな仕置きを受けたの
だろうか 女は 身をのけぞら
せてもがく ふとんをのりだし
右に左に身をよじって 苦痛に
耐えている女は まゆをしかめ
てあえぐ〈モデル・青山桂子〉









穴の中で

コタツをつくるにはまだ早いから
女を縛って入れておこうと　これ
は風流な緊縛のポーズ　頭からふ
たをかぶせてしまっておいても楽
しい責めだへモデル・島崎ユカ

緊縛透かし絵

網戸をすかして見る緊縛の女体は 奇妙な
魅力を発散している (モデル・須原圭子)



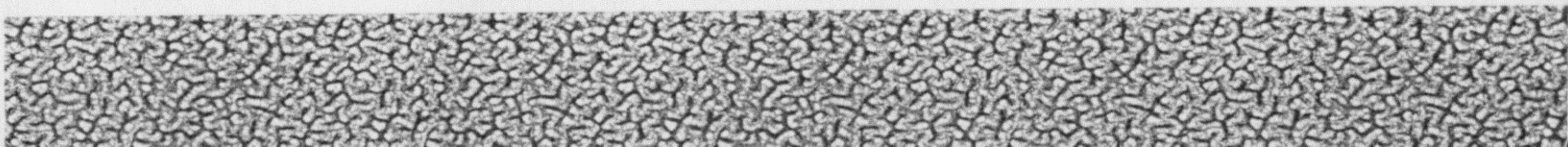


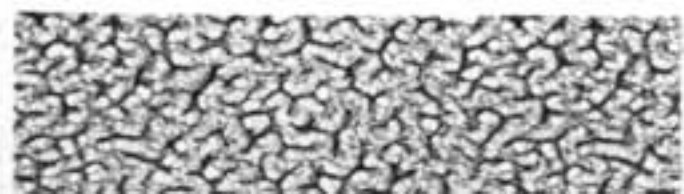
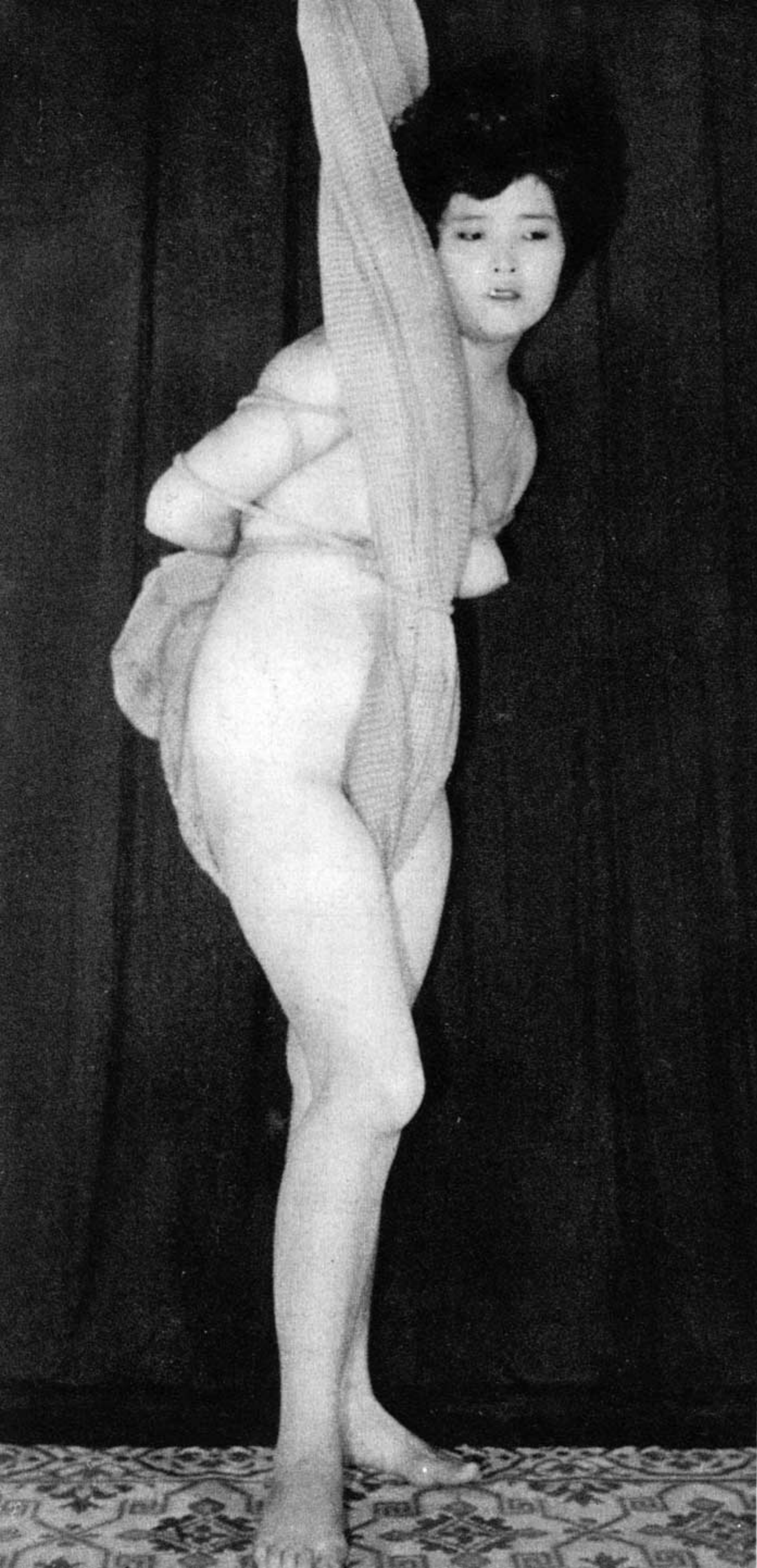
大の字型縛り

廊下の柱に 手足をひろげて縛られた女は
大の字型で 髪を乱し 昆虫のように じ
っと止められている〈モデル・須原圭子〉

カーテンの禪

カーテンをふんどしの代わりに　またを通して
グルツと締めあげたポーズ　羞恥と苦痛の
なかで　女はうめく（モデル・望月まり子）

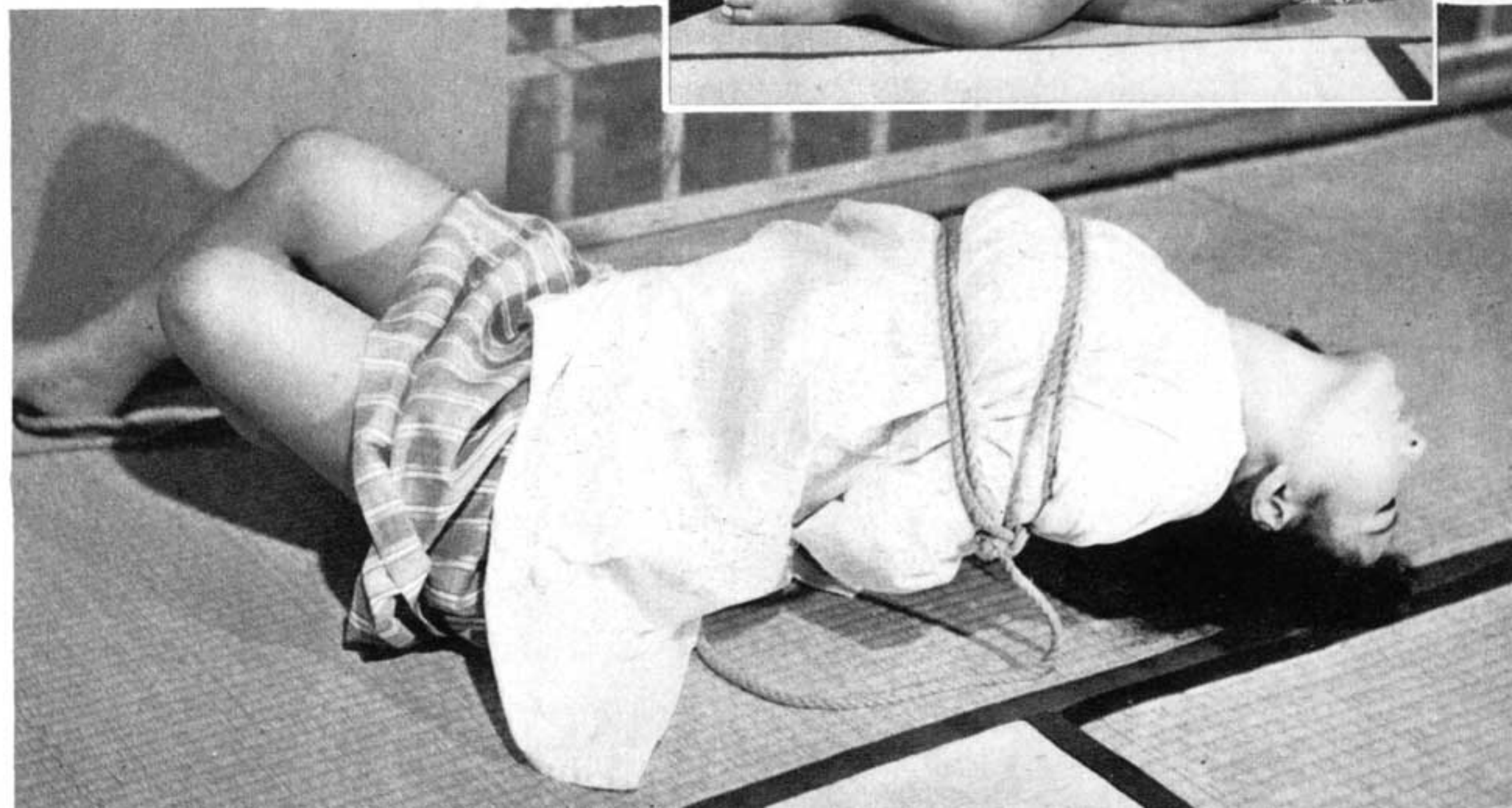






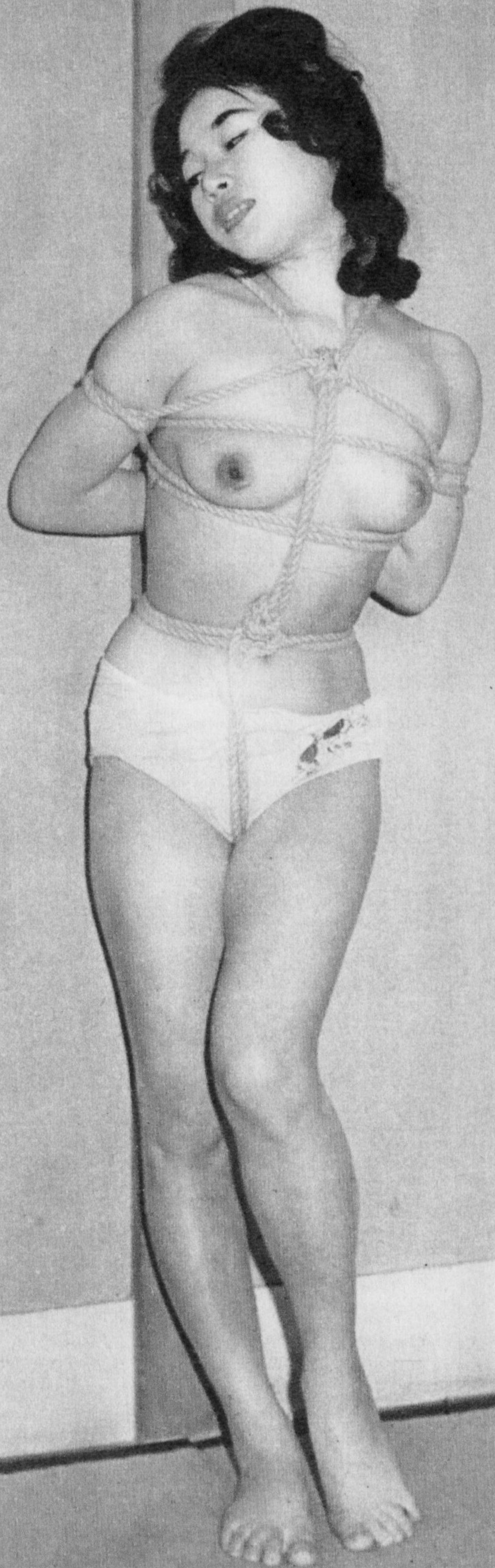
縛られた 主婦

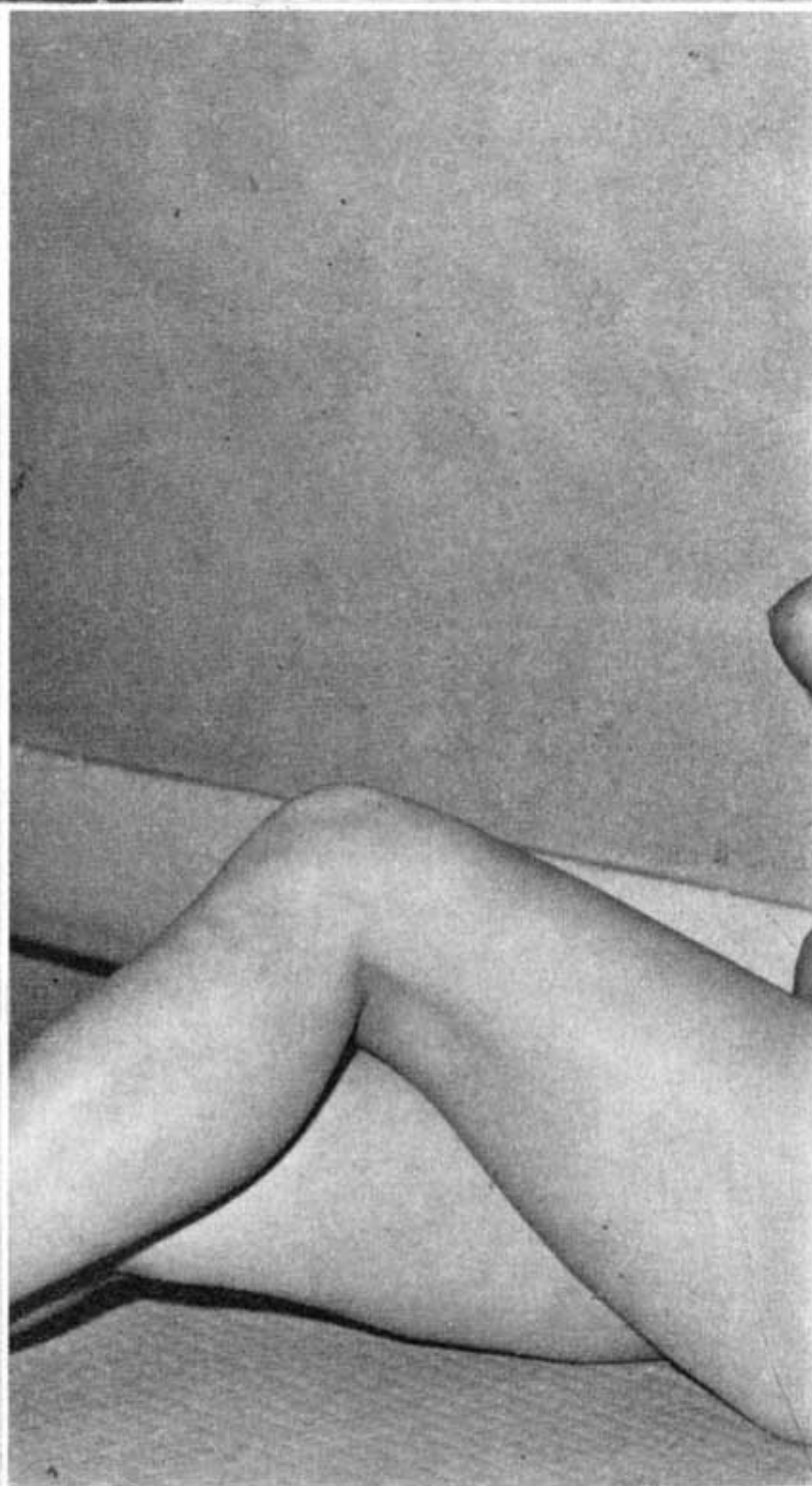
かっぱう着をかけたままの
姿勢で 縛られた奥さんは
よろめきなげ 緊縛のな
かで陶醉している 昼間の
時間〈モデル・浜ゆかり〉

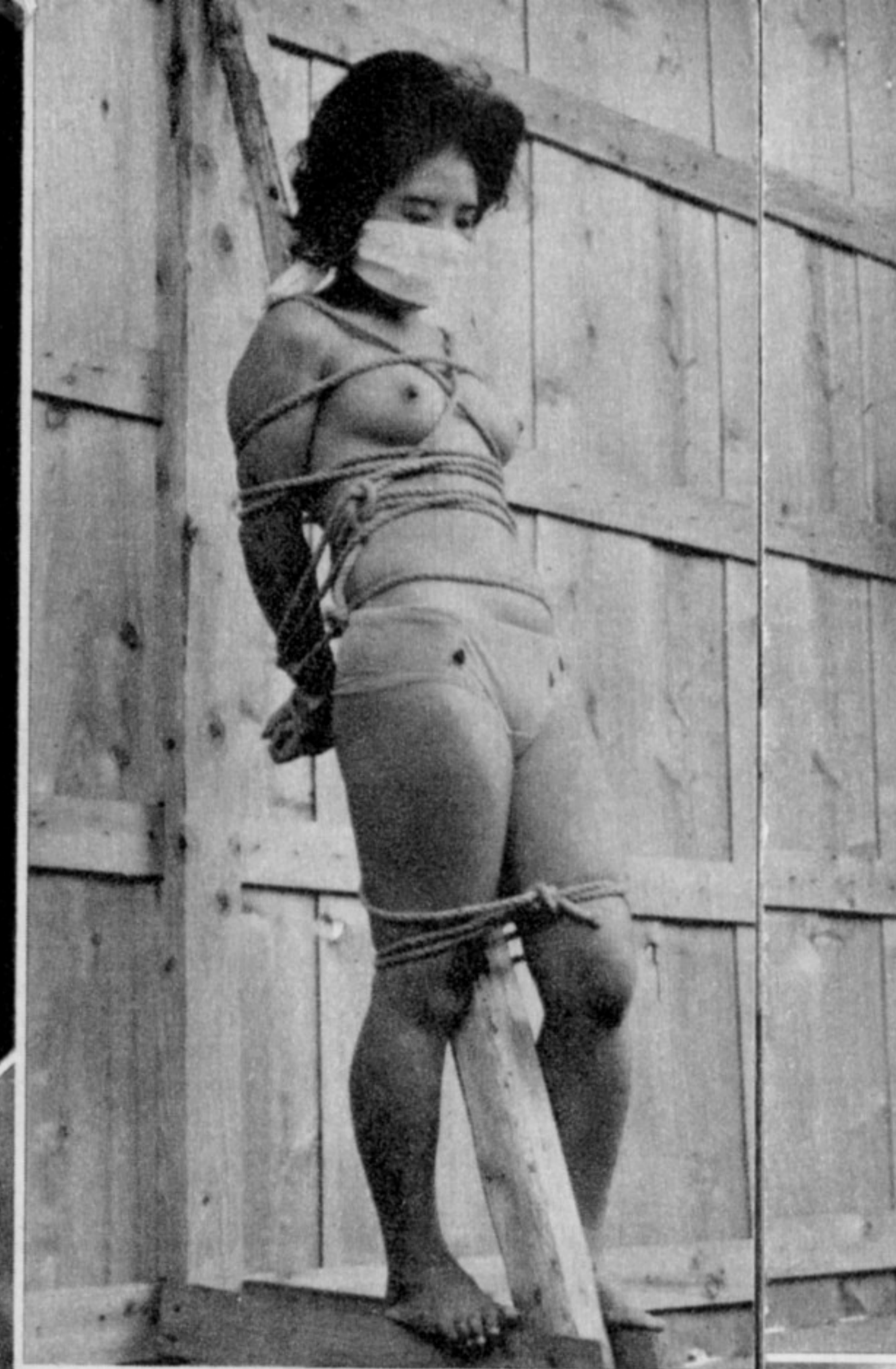
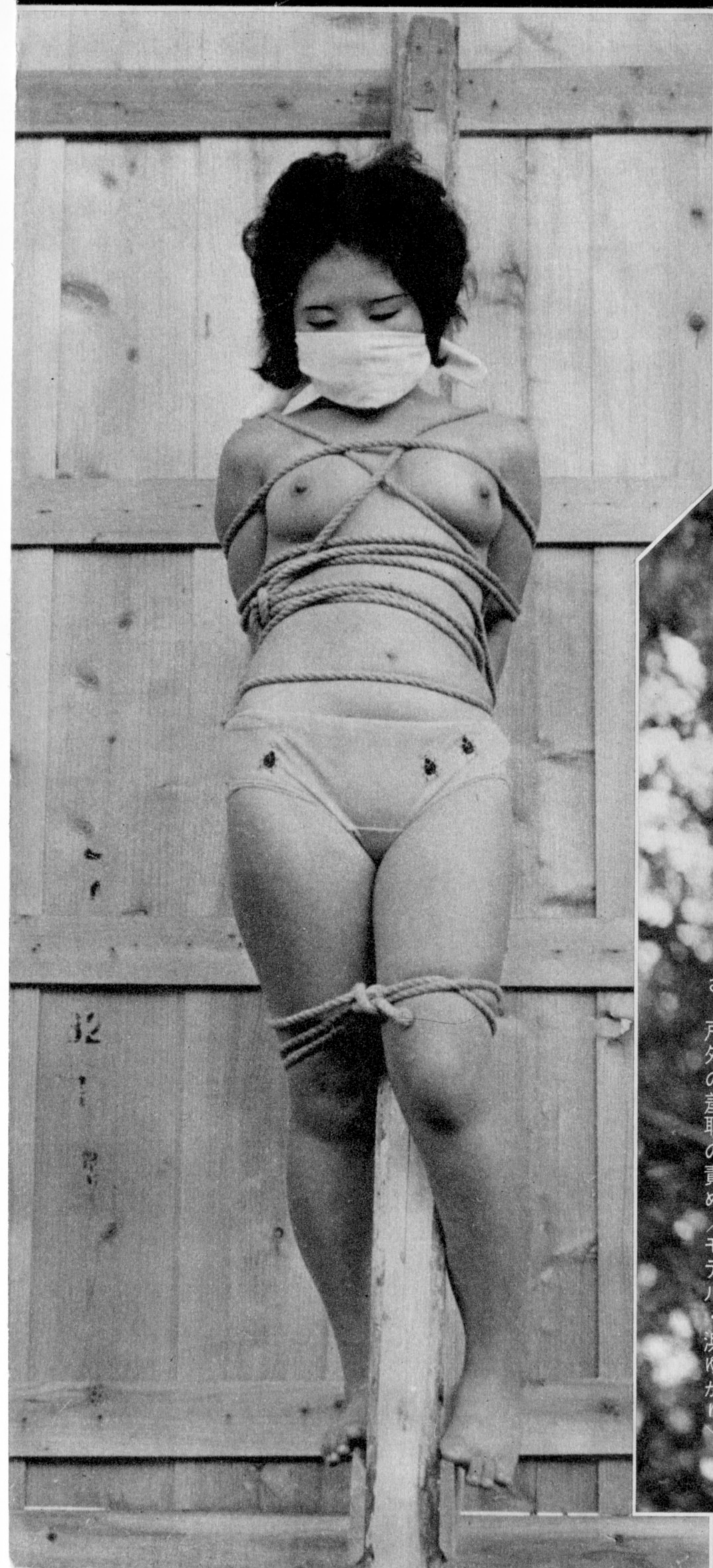


艶縛 4 態

ひとりの女が、パンティー一枚のあら
れもない姿態で、縛られた身を、いろ
いろにくねらせて、なまめかしいポー
ズをとっている。その奇妙な色気の
なまめかしさへモデル・西牧えり子

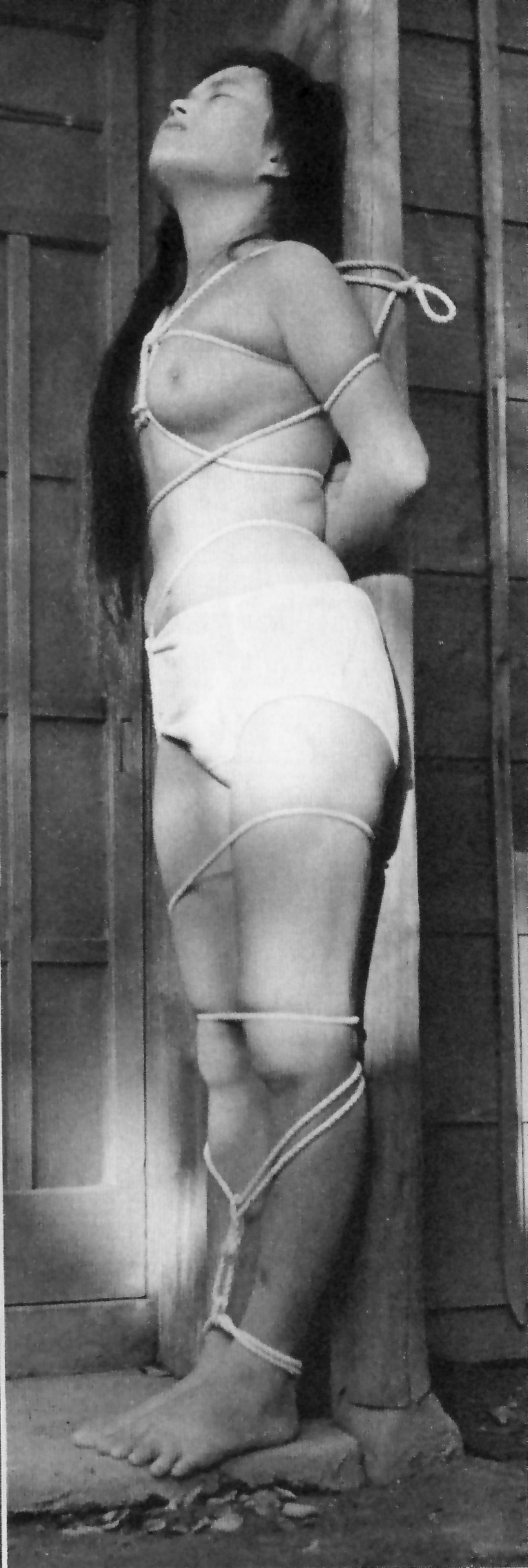






奇妙な宙縛り

へいをささえる支柱に うしろ手に縛られて
さるぐつわをされて 裸身をさらす恥すかし
さ 戸外の羞恥の責めへモデル・浜ゆかり



縛悶のひと

縄は女に苦痛を与える　だが女は　その苦痛のなかから愉悅を汲みとる　それが女の生理であり　女体の奇妙な宿命だ　そこから女の魅惑が生まれ　溢れる〈モデル・青山桂子〉



とらわれのBG

夏を終わったバンガローには 人け
がない この無人の場所で 汚れを
知らないBGが 立ち木に縛られて
とらわれの身を嘆き 次にくる残忍
な手を恐れる 〈モデル・山名杏子〉

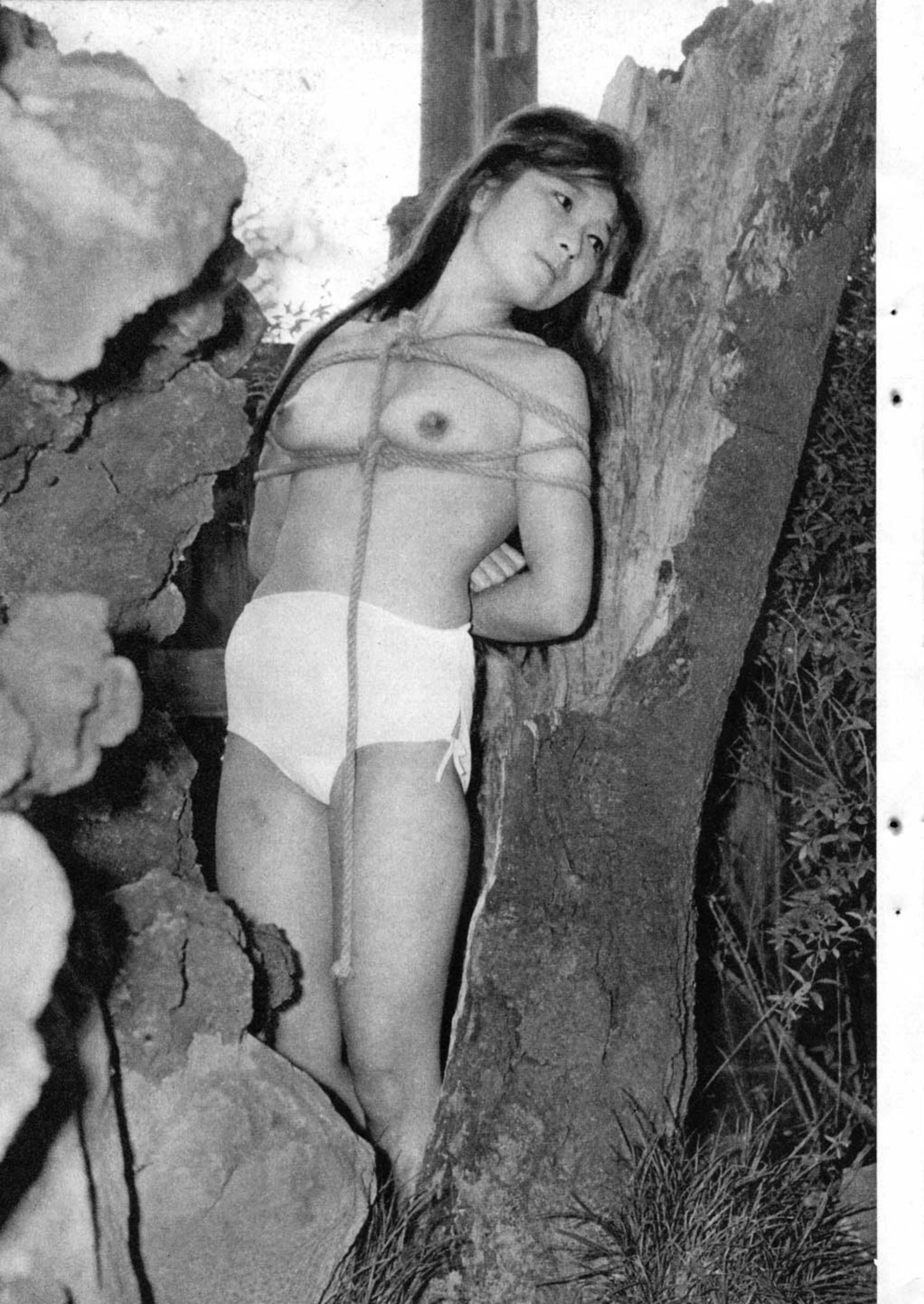






縛 愁 の と き

縛られることは、女にとって悲しみだ。その悲しみから生まれる、不思議な官能の炎。(モデル・島崎ユカ)





椅子に縛られて

胸十字に 首にかけた縄 そのうしろ手に縛られた縄じりを 椅子にくくりつけられて これは 事務所の一隅に展開されている無残絵巻の一コマだへモデル・さつきみち

ジュスチヌ

淑徳の
不幸

マルキ・ド・サド

土井啓子・え



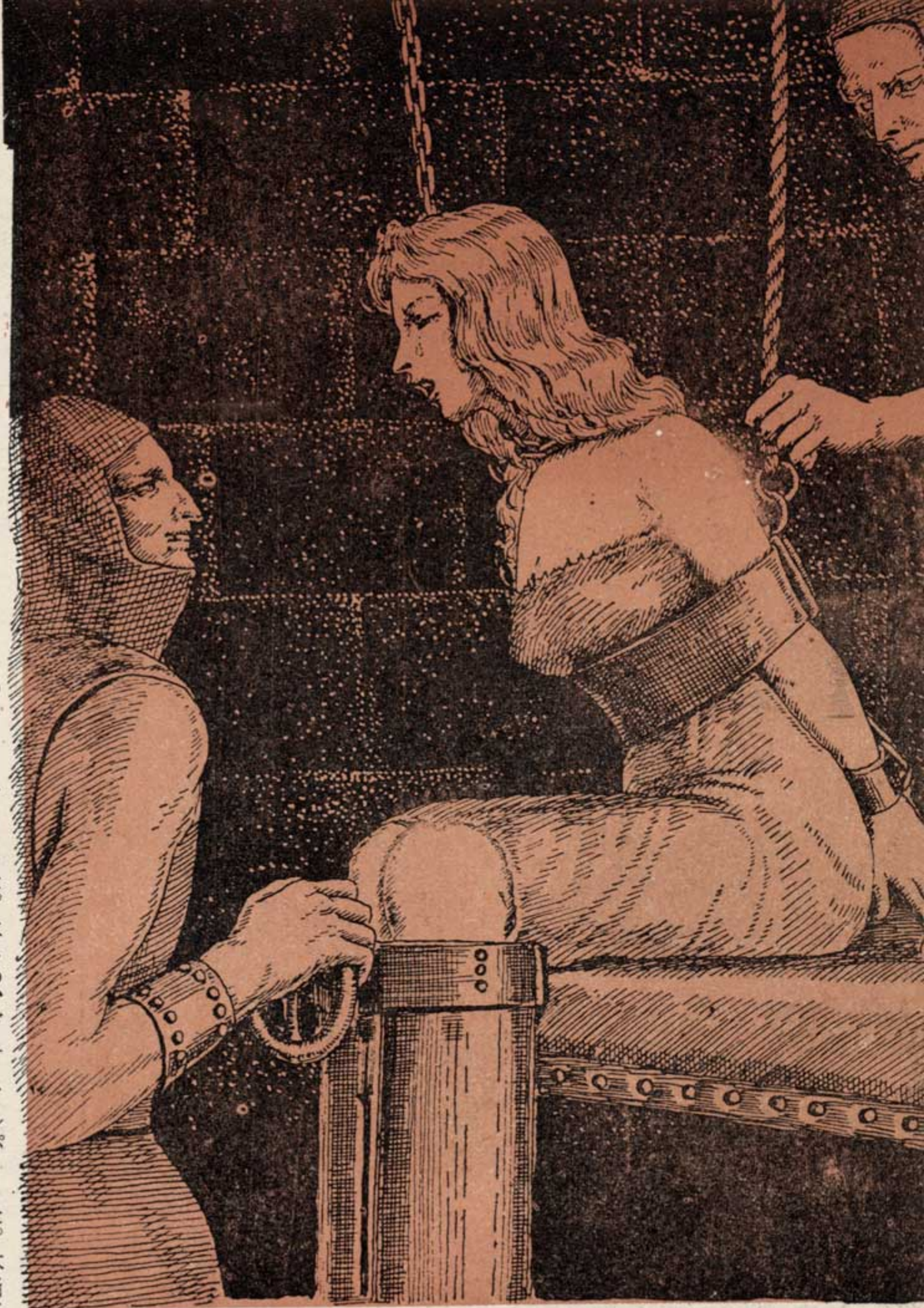
一、ジュリエット

ロルサンジュ夫人ジュリエットには、ジュスチヌというひとりの妹がいました。ジュリエットが十五の時、父親が破産しました。天性放縦な彼女は、娼婦になる決心をし、まじめなジュスチヌと別れ別れになりました。

ジュリエットは、二十の時、その手管で、ロルサンジュ伯爵と結婚しましたが、伯爵を謀殺し、今ではフランス随一の実力者ド・コルヴィル氏を籠絡し、最近買ってもらったモントルジの土地に遊びに来ていました。

ある日、近くの旅籠でふたりが休んでいると、馬車が止まり、馬車の中から、囚人のようにきびしく縄目を受け、足カセをかけられた二十六、七の美しい娘を憲兵が抱きおろしました。よく見ると、娘は本当に品のよい顔立ちで、悪事を働く人のように見えません。

憲兵に尋ねると、その女は、窃盗、殺人、放火という重罪犯人なのです。興味を持ったジュリエットは、その話を女自身の口から聞きたいと言い出し、ド・コルヴィル氏はすぐに実力を発揮し、一晩だけその女囚をあずかることにしました。その彼女の物語は次のようなものでした。――



二、高利貸しデュ・アルパン

破産した父の名を明かすことはお許しくださいませ。わたしは途方に暮れて幾晩も泣きましたが、生活しなければならぬので、勤

めることにしました。はじめ、デュ・アルパンという高利貸しの家の女中になりました。常識はずれの客齋家で、食べ物といったら、パン三オンスに、川の水をビンに半分だけなのです。それだけならがまんでできるので

た。本当にあたしは潔白なので、自白することとは神様を裏切ることになるのですから。けれど、明白な証拠があるのに自白しないというカドで、とうとうあたしは死刑ということになってしまいました。

すが、アルパン氏というのは、うまく法網をくぐっている泥棒で、あたしにその手伝いをさせようとしたのです。あたしはどうしても承知しませんでした。すると、秘密を知られたと思って、逆にあたしが盗みを働いた、と知り合いの警視に訴えたのです。あたしのベツドから、ダイヤモンドが発見され、あたしはすぐさま、縄を打たれたのです。

デュ・アルパン氏は裁判所にも手を打って、あたしの言うことは皆捏造だとされてしまいました。

あたしは、あくまでも罪を否認したので、とうとう拷問にかけられました。鞭で打たれたり、脚を鉄ではさまれたりしました。あたしは幾度も気絶しましたが、どうしても盗んだとは言いませんでした。

三、女賊デュボワと

ブルサック男爵

ところが、牢屋で、やはり死刑囚のラ・デュボワという女賊が、ある晩、あたしに、寝ないで入り口の近くにすわっているように言いました。

はたしてその晩、獄舎に火事がおき、あたしとデュボワはうまく逃げて、ボンディの森の密猟者の家にたどりつきました。

恐ろしい所でした。三人の密猟者は飢えきっていて、たちまちあたしのからだを求めてとびかかって来ました。けれど、だれが先かでケンカになり、あたしはその間に、夢中になって逃げ出しました。

あたしが道に迷い、森の中をさまよっていると、奇妙な場面に行き合いました。非常に美しい二十四、五歳の男と十七、八の少年とが、口で言うのも恥ずかしいことをしているのです。

年長の男はブルサックという男爵で、その行為を見たというので、あたしのお腹を木の幹に押しつけ、少年とふたりで、ギリギリと縛りつけ、スカートをたくし上げ、シユミーズを裂きました。あたしは目がくらみまし

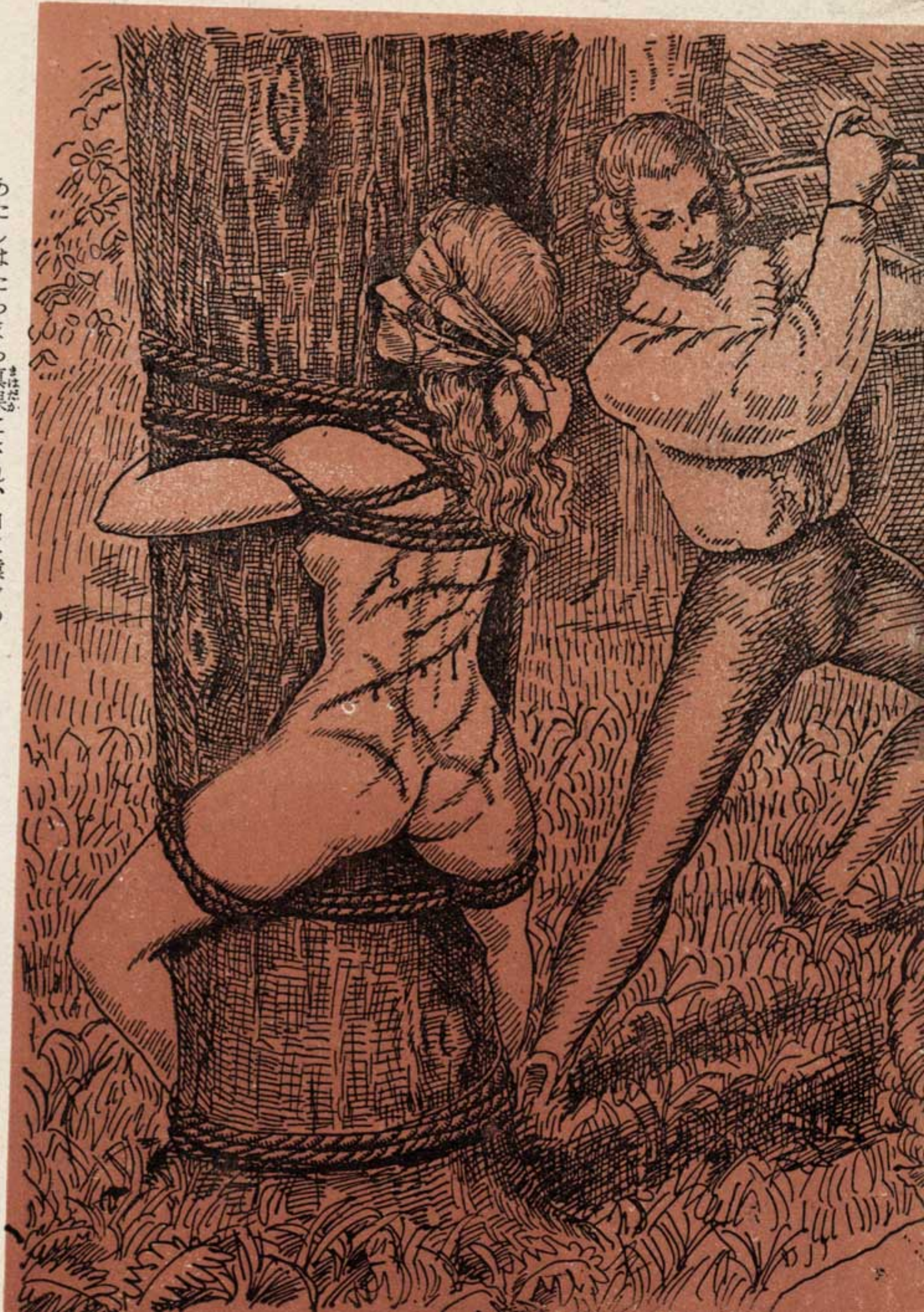
た。男爵は山刀を抜いておどしただけで、縛ったまま、あたしに身の上話をさせました。そして、聞き終わると、ほどいてくれ、あたしをかれの母の部屋女中にしてくれると言いました。



四、毒殺

母親のブルサック夫人はいい人でした。それに反して、男爵は、本当の不頼漢でした。けれどあたしは、なんとなくかれが好きでした。それを見抜いたかれは、ある日、とんでもないことを言い出しました。夫人の朝のココアに毒を入れるということです。それでかれは、六万リイブルの年金と自由を手に入れ、あたしに二千エキスの年金をくれるというのです。あたしは承知したふりをし、思いきって夫人に告げました。

夫人は驚いて、自分の一族のソンスヴァル公に手紙を書きました。けれど、不運なことに、使いの者が森で男爵につかかってしまったのです。かれは、あたしを森へつれて行きました。森には手下が待っていました。かれは言いました。「こいつは、おれのおふくろを毒殺しようとしたんだ」



あたしはたちまち真裸にされ、口に猿ぐつわをされ、木を抱くようにしっかりと肩と脚を縛られました。からだのほかの部分は鞭打にいいよう縄目はかけられませんでした。かれらはそのうえ、目かくしをし、打ち出

したのですが、一つ打つごとに、できた傷口に手をあて、しらべては手下と何ごとか話し合い、打ってはまた相談したり批評したりするのです。そして縄目を切られた時、あたりの芝草は血だらけになっていました。

五、外科医ロダン

あたしは着物を着て、泣く泣く森を出、パリから約六里離れたクレエの村にさしかかり、外科医に頼んで包帯をしてもらいました。

うわさによると、ブルサック夫人は死に、あたしが犯人にされているというのです。

外科医はロダン氏といって、気むずかしくて乱暴そうな人ですが、腕は非常にいいそうです。そして、あたしの話を聞くと、同情し

てかくまってくれました。

二年ほどは割合に苦労がなく過ぎました。

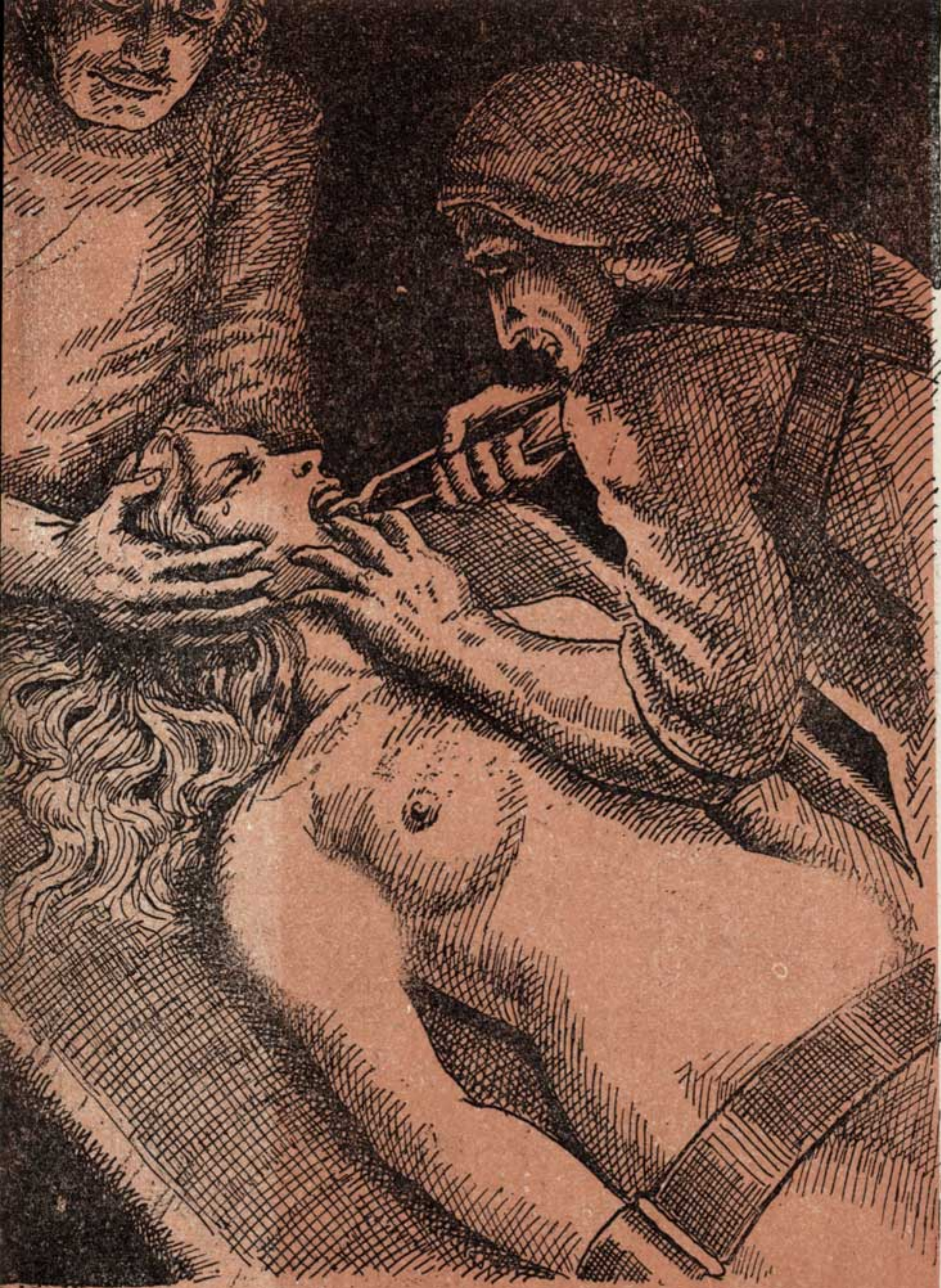
ところが、ある晩、地下倉でうめき声が聞こえるので行ってみると、若い娘が閉じ込められています。あたしは、そこで、ふと昼間、

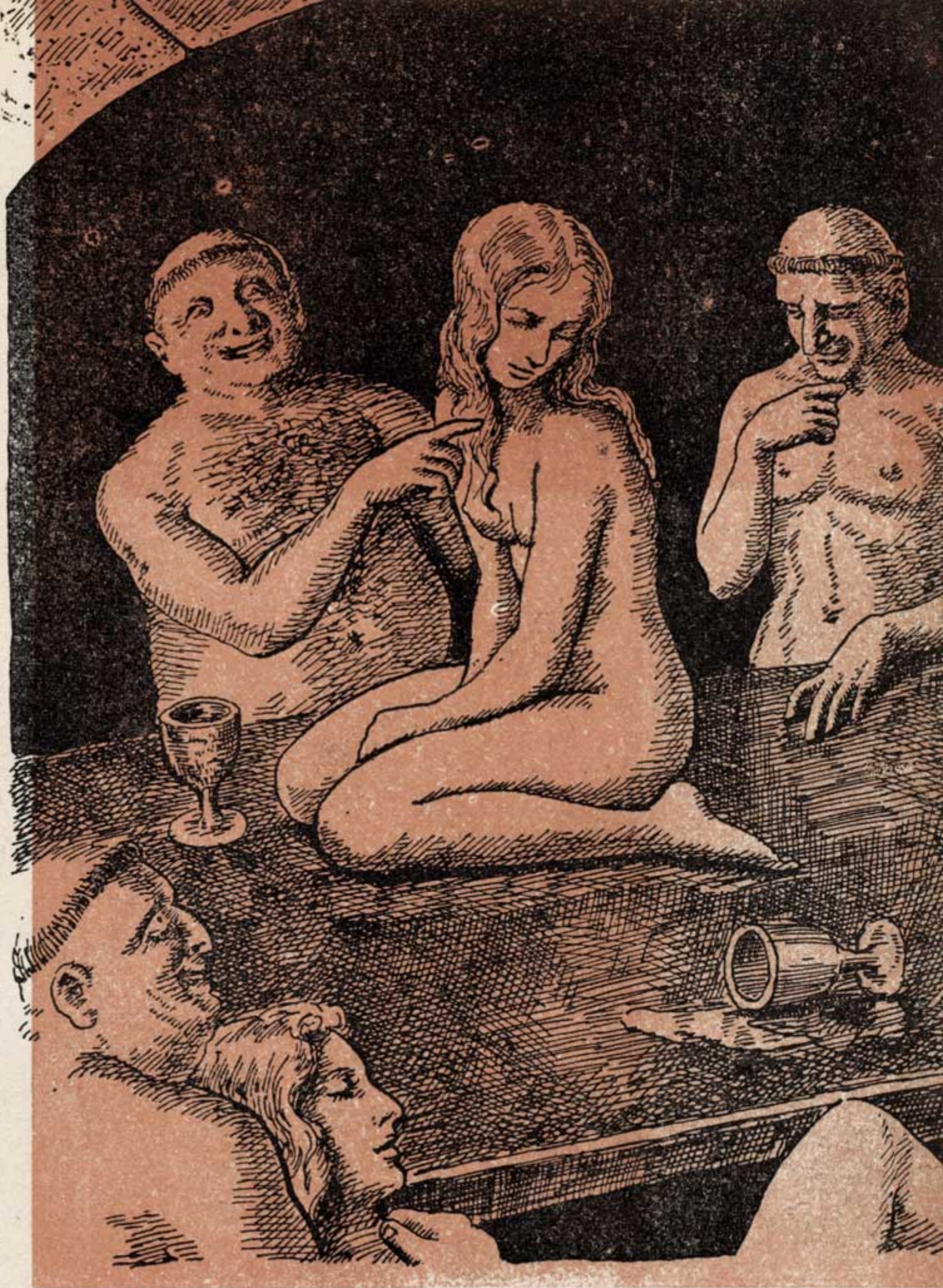
泊まりがけで来ている客とロダン氏が話していたことを思い出しました。その話の内容と結びつけて考えますと、この娘は、何か医学上の問題を解決するために、生体解剖の実験にさらわれて来たらしいのです。

あたしは思い切って逃がしてやりました。鍵を内側からこわして娘が自分で逃げたように見せかけたのですが、ダメでした。

ロダン氏は、気違いのように怒り、あたしをめっちゃめっちゃになぐり、裸にすると、客とふたりで、手術台に縛りつけました。

あたしは、メスで、両足の指を一本ずつ切られ、奥歯を一本ずつ抜かれました。そのうえ、うつ伏せにされると、焼いたコテで、肩の後ろに烙印くわいんをつけられました。





六、サント・メリイ修道院

悪人でも、さすがに医者だけあって、傷には丁寧に包帯をしてくれました。

あたしは瘦せてはいましたが、丈夫だった

ので、それでも自分を勇気づけて、サンスからドオフィネへ行こうと思いました。

その途中、遠い森の中に、鐘楼が見えました。それは、本当に静かな美しい姿でした。あたしは不運でしたが、あたし自身の心は、

神かけて汚れていませんでした。あたしはその僧院を尋ねてお祈りをしようと思ったのです。

けれど、その見かけの美しい僧院は、実は本当に恐ろしい所でした。一晚泊まって行きなさいという院長のラファエル師のことばに従ってはいったのは、なんと、真裸になった三人の法師と三人の娘がみだらな様子ですわっている奇妙な部屋でした。

ちょうどひとり足りなかったのだというので、たちまちあたしは裸にされ、テーブルの上に置かれ、四人の破戒僧たちに、からだのあらゆる部分を、ためつ、すためつ見られ、批評されました。そしてあたしは、その僧院で、とうとう今まで守り抜いていた純潔を失ってしまいました。

そのあけく、三年の間檻禁され、ほかの、あたしと似た境遇の不幸な娘たちといっしょに飼われました。そのうえ、少しでもかれらの寵を失った娘は、ある方法で消され、別の娘がどこからかどわかされて来るのです。

七、ニセ金作りのタルヴィル

ある時、突然、修道院長が変わり、あたしたちは二ルイのお金をもらって、そこを出ることができました。

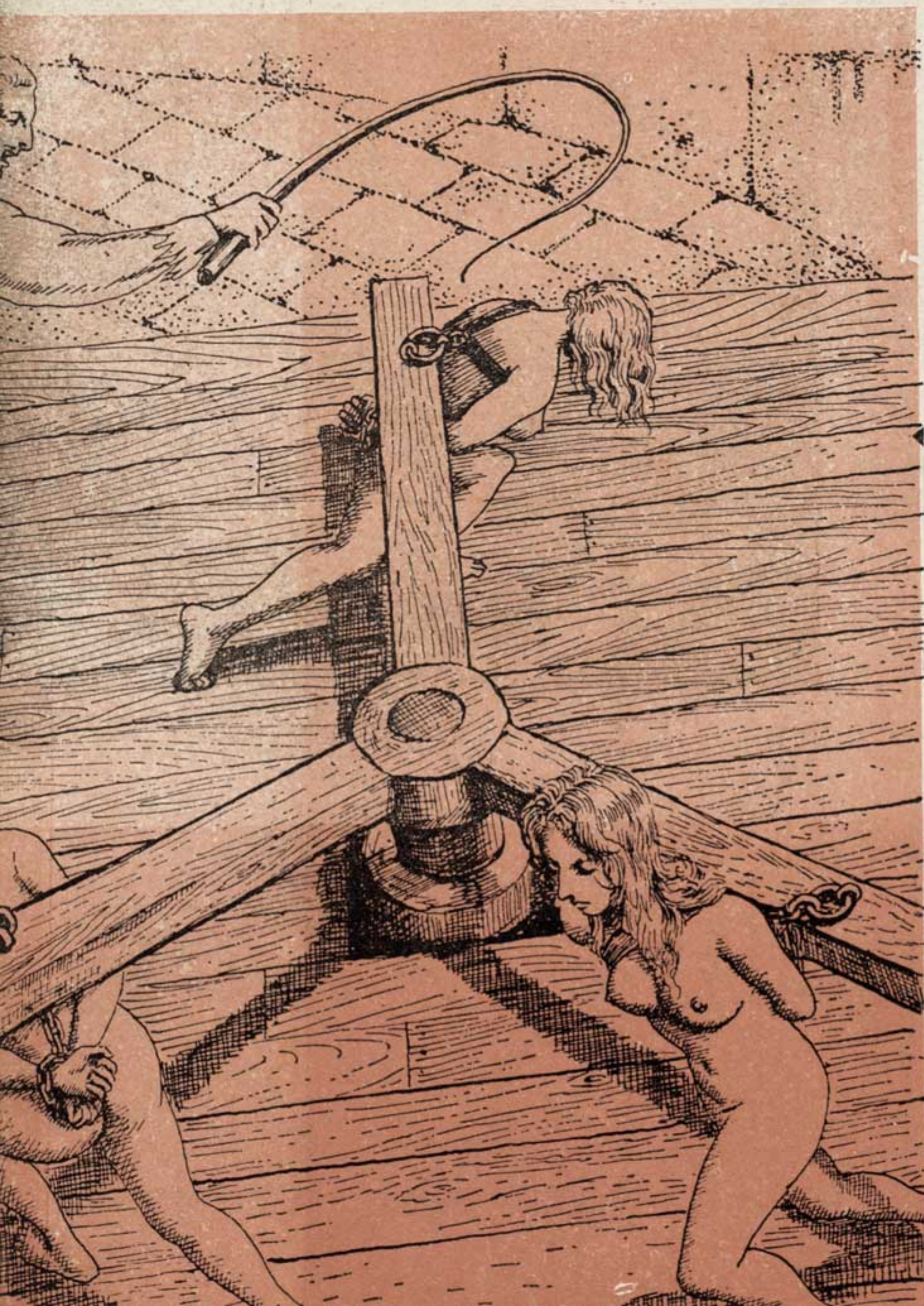
あたしは、ヴィエンヌからグルノオブルへ行く途中、野原で強盗に襲われて大ケガをしたひとりの男の手当をしてやりました。その男はタルヴィルという名で、あたしの身の上話を聞くと同情して、お礼に、自分の妻の女中として優遇したいと言いました。

けれど、それはまっかなウソで、かれは心の底からの悪人でした。人里離れた国境に近い山城につくと、急に態度を変えました。そこは、ニセ金づくりの巣窟でした。

かれが、命の恩人であるあたしに与えた仕事は、雨水溜めにある車で水を汲み入れる仕事でした。あたしは、ほかのふたりの女と同じように裸にされ、鎖

でつながれました。すると、ニセ金づくりの一味が、新入りのあたしを見るために集まって来ました。そして白日の下に隠し切れないあたしの肉体のあらゆる部分を批評し、肩の烙印をあざけるのです。

あたしたちは、昼は鞭打たれながら馬のうにぐるぐると車をまわし、夜も牢につながれてタルヴィルの慰みものになるのです。そうして一年ほど過ぎると、タルヴィルは取り引きに成功して、ヴェニスに旅立ちました。





八、淑徳の不幸

後任のロオランは、あたしたちにもっと楽な仕事をくれましたが、善良な人にはかえって不幸が来るのです。城は間もなく憲兵に襲われ、あたしたちは獣のように縄を打たれ、馬のしりにくくりつけられて、グルノオブル

に連れて来られました。けれどあたしは、誘拐された者として無罪放免になりましたが、そこでもまた悪人が栄えるという悲しい実例に出会いました。それは、女賊デュボアで、男爵夫人と称していました。彼女は、昔なじみとして、仲間にはいり、裕福な商人デルブルイユという人を誘惑し、そのすきに六万フ

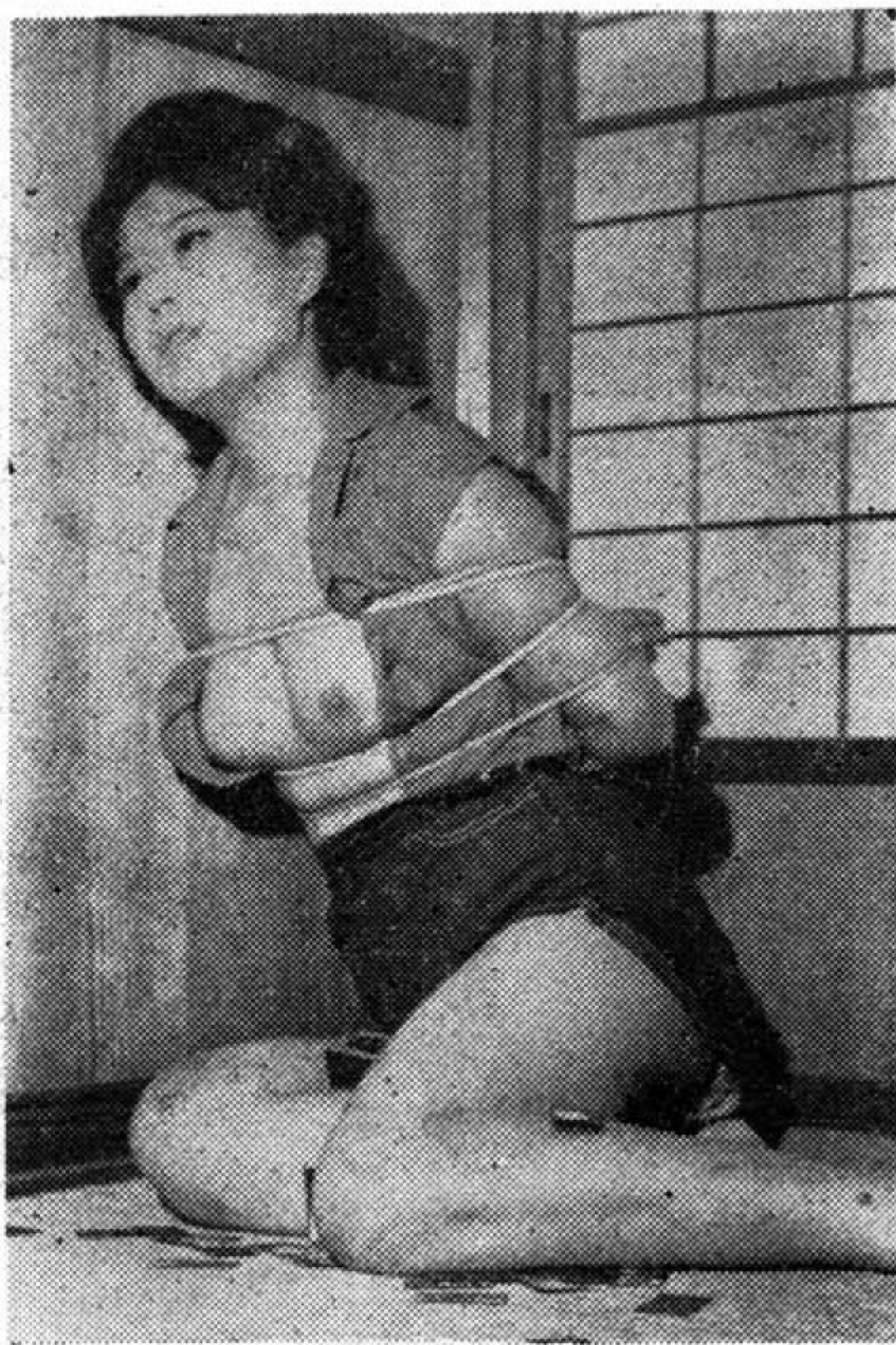
ランはいつている証券を盗むというのです。けれど、いくら悪が栄えても、あたしは悪には染まれないのです。そしてあたしは、また不幸に会いました。あたしに結婚しようと言われてくれたデルブルイユ氏は毒殺され、またまたあたしは容疑者にされました。よいことをすればきつと逆に悪い報いが来るのです。その件では無罪になったと思うと、今度はベルトラン夫人という人の子供を火事から救おうとしてとうとう、殺人、放火、窃盗の犯人にされてしまったのです。――

聞き終わったド・コルヴィル氏とジュリエットは感動しました。そしてジュリエットはこの娘がジュスチヌだということを知りました。ここで、さしも続いたジュスチヌの不幸も終わりを告げたように見えました。

ド・コルヴィル氏の力で、彼女は無罪となり、ふたりの暖かい保護の下で、何一つ自由のない生活にはいりました。

そんなある日、雷が鳴り、雷ざらいなジュリエットののために窓を閉めに行った彼女は、雷に撃たれ、口から右の乳房にかけて黒焦げになって死にました。悪にかけて一流のジュリエットは言いました。「やはり神様なんてないんだわ。淑徳は不幸にほかならないわ」

風俗奇譚



★ 1961 年 11 月 特 別 号 ★

特集Ⅱ 鞭と縄・この魅惑あるもの

(創作) 鞭とロープの蜜月

(随想) 鞭打ちたい女・縛りたい女

(創作) ヒップ花火

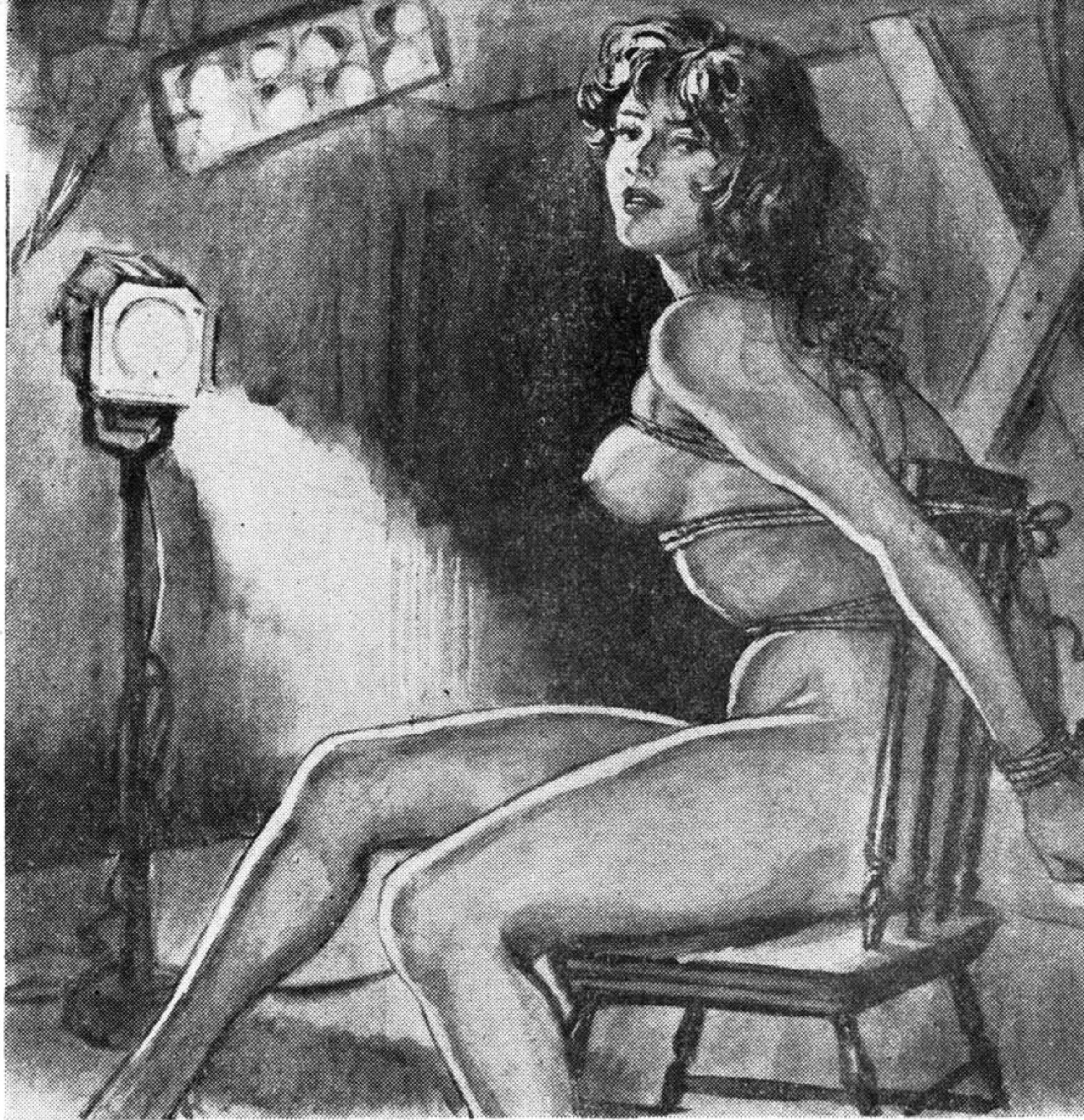
(創作) 悪魔のような女

(海外実話) "聖なる虐待者" バルバラ

(創作) 火の鞭狂うとき

(写真物語) 昼も夜も肉にしびれる

(絵物語) バスティーユ大公妃



白光の中で

床も壁も天井も白だった。

なんという材質かしらない。

スベスベとつめたい感触——。

そのあらゆる平面に、ドギついまで明るい光線が反射している。

まるで夜間撮影用の強烈なライトで目を射られている感じだった。

それに射すくめられたように、坂戸俊子は、部屋のまんなかじと突っ立った。

だんだんと羞恥心がマヒしてゆくのがわかる。しかしその腰には、彼女の羞恥心の最後の砦でもあるように、一枚のちいさな布がへばりついていて。

「さあ、それをとって——なにをタメらっているのかね」

声はゆっくりと彼女に命令した。

部屋の中には彼女のほかに人間の姿はない。しかし、どこかでだれかが彼女を見ていて、その行動にこまかい指示をあたえているのだった。

部屋のどこかに仕かけてある音響装置を通して、きこえてくるその声は、なんの感情もない

鞭とロープの蜜月

妻子のある男との不倫な関係を贖罪しようと彼女が訪れた密室。そこに待っていたものは、鞭と羞恥の洗礼だった。

獅々村 裕

沖 渉 司・え

た。

と、坂戸俊子の手が動いた。

羞恥に対する最後の挑戦だった。

両ももにそってたれさがったその手は、すこしずつ動いて、胸のあたりまではいあがった。

うつくしくマニキュアした指先が、センサイにおののいていた。

それは自分の乳首をちょっとつまむようにすると、ふたたび腹部にそってはい下がりはじめ、腰をおおっているちいさなうすいピンクの布のはしでとまった。

姿のない声がセキをした。

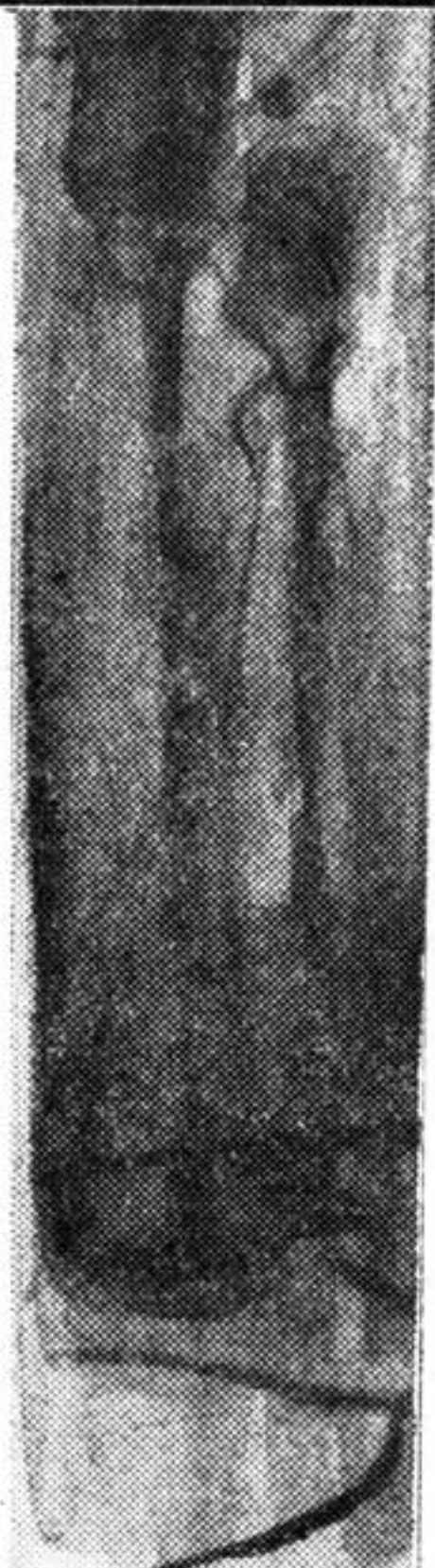
俊子はちょっとビクッとした。

しかし、見つめられている自分を感じ、ちょっとタメらったのち、思いきって布のはしをつまむと、それをすこしずつ下へズリさげはじめた。

俊子はその作業をやっているあいだ、声は沈黙していた。

しばらくのち、ピンクのちいさな布は、ヌケガラのように、彼女の足もとにうずくまっていた。

すると、さっきスーツやスリッパやストッキングを脱いだときもそうだったように、ふしぎな吸引装置がはたらいて、そのピンクの布



SHOJI-OKI

つめたいものだった。

だが、その音響装置そのものは、すばらしいハイファイ的な性能をもっていて、ノドにタンのからまるかすかな気配や、口の中で唾液が粘着するピチャピチャという音までわかった。

それはふしぎに肉感をくすぐってくる声だった。

は、スルスルとひとりでに床の上をすべり、壁のすみにあるはきだし口のような四角い穴に消えてしまった。

「よろしい」

と、声があった。

しずかな声だったが、不意に鼓膜をうたれたように感じて、俊子はからだじゅうでドキン、とした。

それはからだの中でいちばん敏感な部分にひびいた。そこに羞恥が結集しているせいかもしれない。と、

すると、それをもみほぐそうとでもするかのように、声はゆっくりしゃべりはじめた。

「ナンバー・シックス。きみはよくやりました。以後のプログラムにすすむ資格があることを認定します。さあ、それでは――」

そこでスイッチが切りかえられたようだった。

一瞬、男や女の声の入りまじったガヤガヤというさざめきが聞こえたかと思うと、それも消えてしまい、あとはピー、ピー、ピーと尾をひく電波音が残った。

まもなくそれも消えてしまった。

あとはまったく無音の世界だった。

俊子は両わきやものの内側にジトジトとアブラ汗がにじんでくるのを感じた。

すると不意に部屋の中が真っ暗になった。

恥の姿勢

部屋の中にざわめきが起った。

それはいままで外部からきこえていた電波の声とちがって、なま身の人間が部屋の内部にはいつてきて、なにかをしている気配だった。息づかいや、衣服のスレ合う音や、床を踏む音や、何かの道具を持ちこむ音のまざりあった雑然とした気配だった。

ちょうど舞台の暗転のあいだにすばやく装置がととのえられるような、そんなキビキビと訓練された動作が感じられた。

だれも口をききはしないが、人間はふたりか三人いるらしかった。と、その中のひとりが、いきなり俊子の耳もとに口をよせるようにして、

「さあ、すわって」

といった。

それと同時に、木のイスらしい堅い感触が、俊子のうしろからコツンとあたった。

いわれるままに、腰を折ってその上からだを沈めた。

それから、緊縛の作業がはじまった。

男たちは、まったく光から隔絶された暗やみの中だというのに、見えるもののようにてきぱきと手を動かした。

荷づくりでもするような、感情をともしない作業だった。

男たちの鼻からもれる呼吸の音だけが、暗やみの中できこえた。

そして、坂戸俊子のからだは、みるみる堅い木のイスに固定され、自由を失っていった。

不意に彼女の身のまわりから、あらゆる気配が消失した。

作業が終わったのだった。

部屋の中には、もうだれもいなかった。

素裸でイスに縛りつけられた彼女自身がいるだけだった。



暗やみの中だけに、自分のそうしたあさましい姿は、鏡をみるより
いっそうハッキリとわかるのだった。

すると、また羞恥と不安の入りまじった複雑な衝動がつきあげ、ナ
ワの下でくびれている胸が大きく波うった。首をたれると、やみの中
で、自分の下半身がおうのがよくわかった。

「女って、どうしてこうにおうのかしら」

女であるあさましさからのがれようとするように、彼女は首をふ
り、大きくあえいだ。そして、いっそのこと、いつときもはやく自分
のからだにムチがあてられればいいと思うのだった。

突然、目がくらんだ。

暗やみが強烈な光の世界に変わったのだった。

その光源は彼女の正面にあり、まともに彼女の目を射っていた。

。そのため、彼女の視力はほとんどはたらかなかった。

ただ、熱をとまったその強烈な光線で、肌をジリジリと焼かれて
いる感じだけがあった。

おそらく、顔の毛穴の一つ一つ、そしてそこからにじみだす汗の一
粒一粒まで、照らしたされているにちがいがなかった。

俊子は全身から焙りだされるような羞恥に耐えながら、光線にむか
って顔をつきだしていた。

すると、あの声がきこえてきた。

目に見えないところにいて、命令しておる絶対者の声だった。

目もくらむ光の中からきこえてくるその声は、ふしぎな威圧にみち
ていた。

「ナンバー・シックス。なんじ女よ!!」

と声はいった。

「おまえは、妻子のある男と悪い恋をしたな。そのため、罪もない人
妻を不幸な谷間に突きおとしたな。それで、身をもって贖罪したいと
いうのだな」

声はそこできれた。

それは、坂戸俊子に答えをうながしているかのようにだった。

俊子は、

「は、ハイ」

と答えたが、それはノドにひっかかって、かすかなタンの音をさせ
ただけだった。

俊子は返事のかわりに、深く首をたれた。

声はなおもつづいた。

「おまえは、おまえの職場で模範的な女子社員だといわれている。ま

た世間でも、気だてのやさしい、まじめな娘として通っている。それ
だのに人の知らないところで、女のあさましさのかぎりをつくしたと
いうのだな。そのために懲らしめのムチを自分の肌にうけたいとい
うのだな。その心がけはりっぱだ。望みはじゅうぶんかなえてやるぞ」
「お願いします!!」

と俊子がいった。

そして縛られたまま、肩をつきだすようにした。

だが声はひややかにいった。

「さてさて。そんなかんたんなものじゃあない。まだやることがある
のだ」

するとそれを合い図のように、いつのまにはいつてきたのか、彼女
の左右につきそうようにして、ふたりの男が立った。

視力がくらんでいるのでよくわからないけれど、白い手術着のよう
なものを付け、白い帽子をかぶり、大きなマスクをかけた男だった。

そのふたりの男は、俊子の肩に手をかけると、

「さあ」

というようにうながした。

それがおまえだ

下半身は縛られていなかったもので、それまで自由だった。

しかしふたりの男は、思いついたように彼女の足もとにしゃがみこ
むと、彼女の両足をおしひらき、その足首を尾錠^{びじょう}つきの皮具でしっか
りイスの両脚に固定した。

それはひどい羞恥を強要するポーズだった。

しかし、すでにマヒしたようになってる俊子は、まるで失神したもののようになり、男たちのするなりになった。

ふしぎに羞恥心はおこらなかった。

例の声も、そしていま彼女を介添えしているふたりの白衣の男も、おそろしくきまじめな、シカツメらしい態度をとっていたので、俊子はまるで神の裁きをうけるような、従順な気持ちになっていたのだった。

しかし、それから加えられた仕置きは、かなり残酷なものだった。声の主のいうところによると、それは女自身のあさましさを、あらためて思い知らせるために、どうしても必要な儀式だということだった。

そして、それを経験することによって、はじめてムチも生きてくるというのだった。

「さあ」

男たちが、もういちどいった。

それは俊子に声をかけたというより、かれらどうしの合い図のようなものだった。

それから、片手でイスの背の部分やささえ、片手を脚の部分にかけて、しずかに床の上にあおむけに倒した。

そのため、俊子はイスごと背中を床につけ、イスなりに足をハネあげたかたちになった。

「何をするのだろう？」

と思った。

だか、男たちが両足首のバンドをはずし、その両足首をしっかりとひきあげたとき、それから始まろうとするこの意味がわかった。

て、

「アーッ」

と悲鳴をあげた。

それは今夜、はじめて彼女の口からもれた悲鳴だった。

またを裂かれるにちがいない——と俊子は思った。

だが、その予想はずれていた。

男たちは彼女の足首を片手でもち、片手は太もものうしろ側にあてて、からだをエビのように、ぐうっと二つに折り曲げはじめたのだった。

そして、両足のつま先が完全に床につくまで、しっかりと折り曲げられた。

「それがおまえだ」

と声があった。

ちょうど自分のまたぐらに首をつっこむ姿勢で、俊子はその声をきいた。

なるほど、女のあさましさの儀式はこれだったのか、と思った。

それは内臓まではずかしめられるような極刑だった。

俊子はウンウンうなりながら、その姿勢に耐えたが、苦しくなってくると、自分のまたのあいだから、みじめな声をだした。

「く、くるしい。息がつまりそうです。ゆ、ゆるしてください」

しかし声の主も、ふたりの介添えの男も、平然とそれをきき流した。

そして、まるでタマゴガラであがるのを待ちでもするように、ゆっくりと構えこんでいるのだった。

「くるしい」

もういちど、またぐらのあいだで俊子がうめいた。
足をバタつかせようとしたが、ふたりの大の男が押えこんでいるの
で、ビクもしなかった。

俊子はあきらめたようにおとなしくなったが、しばらくすると、こ
んどは、

「くるしい、くるしい、くるしい」

くるしいを連発しながら、からだを小さきみにふるわせた。

筋肉や内臓でもかいているような、せつないものがきかただった。

そのくるしみの底の底まで見通したような調子で、声がいった。

「いいか。わかったか。女のあさましさ、女の悪のみなものは、そこ
にあるのだということを、しっかりおぼえておくのだぞ。自分のみに
くさにむせるがいい。そして寝てもさめても、女はそのみにくさと、
離れられないものだということを、知るがいい。その心根さえ忘れな

ければ、千百のムチも、キッスのように

甘いのだ。ひとムチひとムチで、みにく

さが洗われるよろこびが、心から味わえ

るのだ。だから、あしたの朝までもそう

やっているといい」

「ア——ア」

と俊子が絶望的にウメいた。

ながいながい声の託宣^{たくせん}がおゆるしの合

い図だと思っていたのに、あしたの朝ま

でそうやっているとわかれて、もう耐え

る氣力がなくなったのだった。

折り曲げた全身に、ブルブルッとけい

れんが来たかと思うと、下のほうでグスッと音がして、動かなくなっ
た。

「よし、らくにしてやれ」

と声がいった。

ふたりの助手は、俊子のからだを、もとに戻してやった。

あらわれた俊子の顔は、あかろく怒張して形相が変わっていた。

白い半透明な鼻汁がとびだして、ななめにほおにへばりついていてた。

そのままイスを起こしてやったが、俊子はぐったり頭をもたれたま
まだった。

飛沫にぬれて

「よし、水をブツかけろ」



と声がいった。

助手のひとりは、心得えて部屋を出てゆくと、こんどはホースをひっぱってはいつてきた。

ホースはそれほど太くないけれど、まるで消防のホースのようにすごい水圧をもったやつだった。

「よおし」

と部屋のそとに声をかけると、それを合図にそれまで床にくねっていたホースが、いきもののようにハネあがった。

それから一直線になってふくれあがると、その先端から水をふきはじめた。

水は俊子の顔や裸の全身に、しぶきをあげてふりそそいだ。

ひっぱたくような、すごい水圧だった。

すると、それまでぐったりしていた俊子が、ブルブルッ身ぶるいして首をもたげた。

すぐには目をひらかなかったが、気がついたことはたしかだった。

それから、舌を出してくちびるのあたりにつつたってくる水滴を、ペロペロなめまわしはじめた。

ノドがかわいているらしかった。本人はノドがかわいているというのに、その全身からは、まるで夕立ちのあとの樹木のように、ポタポタと惜しげもなくしずくがたれていた。



むろん、もうホースの水はとまっていた。

しばらくすると俊子は、しっかりと正気づき、それから自分にくわえられている凌辱の記憶をよびさまして、あらためて深ぶかと首をたれた。それは、期せずして、次の裁きのコースを待ちうける形になっていた。

そのとき不意に、室内のガラガラする白色の照明が消えて、そのかわりプリズムを通してみるような、虹色にじいろの光があたりにひろがった。

それと同時に、なんともいえないものういふんいきをもったムーデ
イな音楽が、はうように室内に流れはじめた。

それには、あまいうたごえがともなっていた。

そのうたごえは、甘ったれるような、くすぐるような調子で、くり
返していた。

ムチは好き？

ムチは好き？

縛られたまま？

縛られたまま？

それともフリーで……

アンリ・サルバドールがねそべって歌っているような、あまいセク
シーなうたごえだった。

俊子はこの環境の変化に、しばらくポカンとしていた。

白色の恐怖がおわって、あたらしい蜜月がはじまろうとしているの
だった。

しかし、その甘ったるい道具だてのうしろに、なにかのたくらみが
隠されているのはあきらかだった。

彼女は、なにがはじまろうとしているかを探るように、ゆっくりと
首を左右に動かした。

歓喜の贖罪

「これをのみなさい」

と男がいった。

いつのまにあらわれ

たのか、さっきの白衣

の男のひとりが、コー

ヒー茶わんをのせた皿

を目の前につきだして

いた。

中では、黒褐色の液

体がゆれていて、コー

ヒーの強いにおいがプ

ーンと鼻をうった。

からだも心も、萎え

たようになっていた俊子は、一気にそれをのみほした。

すると、からだの中にふしぎな活力がみなぎり、意識は白々と冴え

てきた。それと同時に、なにかもの狂おしい気分が、彼女を内側から

満たした。

さっきからまだつづいている、ふしぎにもものうげな旋律とうた声に

あわせ、腰をクネクネと動かして踊り出したような気分だった。

それはなんとも名状しがたい、銘酩酊の心理のようなものだった。

すると、彼女のそんな心理を見すかしでもしたように、ムチをもっ

たメフィストがいつのまにかその背後に立っていた。

それは上半身は裸体で、下半身に黒のタイツをつけた、たくましい

若者だった。

若者は示威のように、手にもっているムチをさッと空間におどらせ

た。空気を裂くするどい音がした。

現代科学のスパラシキ驚異!!

★写真の中にすましてある全裸の美女が突然あなたの眼前
に現れる！一瞬のうちに飛び出す！科学の特殊写真に
息づく乳房のくねる腰のふれるようにふるえるモモ思わず
手を出してさわるとぬるぬるの液体が飛び出し感！
★一条の髪をわねる美女の群が限界を超えたらあられもない
殺意で新作目録！この種の写真では絶対ハガキ注文
別冊写真新作目録！完成！秘密確保のためハガキ注文
★本館は単なる目録の作成や錯覚によるものではなく科
学に立脚する画期的製品で現実の世界を手にとるよう
に再現します。一口に言えば生きたヌード美人をそのま
ま写真の中にカンヅメにしたものです。お気に召さぬ場合は返
品交換ご自由！

飛び出すリムーブ集

定価6組入五百円 15組入千円 40組入二千円
★各種共携帯用特許眼鏡一合付 ★郵封送料各組共30円
見本写真 及び説明書送料共50円 ☆個人名にて誰れにも
分かれぬように郵封発送！

浦和市元町一の二二〇K 振替(東京)三九八九三番
日本ステレオ科学研究所

それからかれは、俊子のそばにからだをかがめてナワをほどくと、「立て」というように手で合い図した。

若者はまったく口をきかなかった。

パントマイムか、バレエの中の登場人物のように、だまっただま、身ぶりでいろんなことを示すだけだった。

だが、女のように赤いそのくちびるは、たえず悪魔的な微笑をたたえており、彼がちっとやそっとのことでは動揺しない、つめたい血をもった人間であることを物語っていた。

その態度はまるで、

「おれはムチだ」

とでもいつているようだった。

ムチさばきのあざやかな、そしてムチのよく似合う若者だった。ポティ・ビルダーのように、よく発達した肩や腕の筋肉。細くくびれた胴。スラリとのびた、たくましいタイトの足。

そこから発散する動物的なエネルギーが、ほそいっぽんのムチの先端までピリピリとふるえていた。

それを見ていると、ふしぎに恍惚とした気分におそわれて、かれのムチをやわらかい肌にしたたかにうけてみたい、と思うのだった。

だが、若者は礼儀ただしかった。

いきなり俊子にたいして、ムチをふるうようなことはしなかった。かれはしばらく俊子のまわりをグルグルまわっていたが、やがて、ピタリと静止すると、俊子に背を向けたまま天をあおいだ。

それは何かの祈りをささげているようだった。

「神さま、この女をムチうつことをおゆるしくください」というように。それから、ムチの柄を弓のようになわせると、いきなりクルッと

俊子のほうをむきなおって、白い歯をみせてニッコリした。

残忍さと人なつっこさ、礼儀と不遜の入りまじったふしぎな態度だった。

それから、左足を一步ひくと、俊子の目をじっと見つめたまま、さ々と最初のムチをふりおろした。

「オウ」

と思わず声をもらし、トウダンスでもやるように、俊子はつま先だちになった。

そんな俊子をめがけて、第二のムチがくわえられた。

はじめのは右からのスイングだったが、こんどは左からのスイングだった。

つづいて右、左、右、左——ぴしっ、ぴしっ音をたててムチがおどった。

それにつれて、俊子も、右、左、右、左と、つまさき立ちのまま旋回した。まるでゆきもとりのするコマのようだった。

そのたびに、

「オウ、オウ、オウ」

とみじかいウメキ声が、彼女のくちびるからもれた。

おどろいたのは、ムチをふるっている若者の表情だった。

肉の焦げるにおいがするほど、したたかにムチをふるっているのに、かれの目はやさしい光をたたえたまま細められており、そのくちびるは微笑をたたえたままだった。そのために呼吸ひとつ乱れた様子もなかった。その動きがとてもしミカルなので、まるで踊りを踊っているようだった。

三十分後、俊子はナメシ皮のようになって、そこにぶっ倒れてい

た。そのほおに、痴れたような陶醉の微笑をうかべて――。

俊子はそのまましばらくじっとしていた。

ムチ使いはもういなくなつて、部屋の中は彼女ひとりだった。

起き上がろうとして、はじめて全身にやけつくような痛みをおぼえてウメいた。すえたような皮革のにおいが、まだそここにしみついていた。

そんな彼女の背後に、ひとりの男のズボンをはいた足があゆみよつた。その足は、俊子のかたわらにしゃがみこむと、

「どう、苦しかった？」

といって俊子を抱きおこした。

その顔を見て、俊子はあつとおどろいた。

それは愛人の木島だった。

いったい、木島がどうしてこんなところにいるのか？

その疑問にこたえるように、木島はいった。

「きみはボクとの問題で、良心の痛みを感じ、贖罪を求めてここへやってきた。ボクがきみにこの秘密のクラブのことを話したときから、きみは、一度はここに来てみようと思っていたのだね。きみはムチとロープの贖罪に心の中でひかれていたのだ。そしてじゅうぶんにむくいられたのだ。きみの演ずるスバラしいショウを、ぼくは初めから終わりまで、ノゾキ装置からみていたのだ」

俊子はもう一度卒倒しそうになった。その頭を手でささえ、熱っぽくくちびるをかさねながら、木島はいった。

「それでいいのだ。それでいいのだ。ムチとロープが、きみとボクを離れがたくする――」

世界からMSの夢をあなたに運ぶ泰西出版資料

本社は海外 35 社の作品 12,500 点を独占輸入しています



10月特別輸入 (GPシリーズII)

①鞭打たれる男 (WHIPPED) エネグ画・文

名匠エネグが描いた最新作。ヘルガは捕虜をもてあそび、いたぶるのが楽しみだった。これはヘルガの日常を描くマゾヒスト向きの傑作です。解説とも全10章 6500円

②屈従の道 (WAY TO DISCIPLINE)

ドンナ・ブレース作画

美女メアリのたどった、こらしめとムチと責めとの半生を生き生きと描くすばらしい画集。第1巻24章6000円、第2巻24章6000円 (全48章11000円)

募集

①MS男女モデル各2名急募
②らぶらた勤務員男女を問わず2名。いずれもリレキ書、写真同封して本社国内係へお申し出ください。

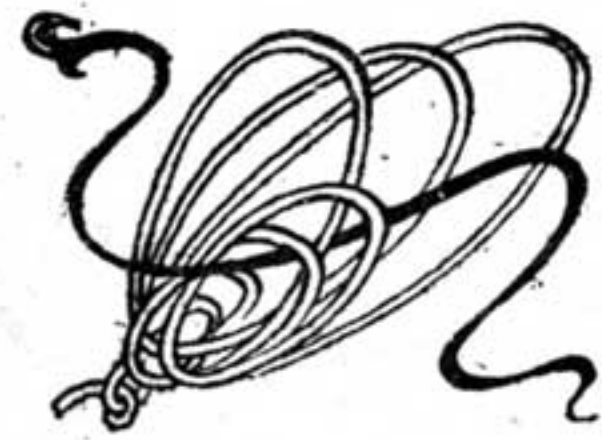
このほか、あらゆる傾向の資料が輸入されます。詳しくは送料50円同封してお申し越しください。

泰西出版資料会社

横浜本社——横浜市中区北方町1の67電話 (20) 9313

東京出張所 (コーヒー部) ——ら・ぶらた

渋谷区上通り3の28 (スカラ座すじ向かいのタバコ屋のヨコ入って右側)



鞭打ちたい女・縛りたい女

栗 橋 慎 吾

スリルと興味

駅の階段を上ってゆく。

そのボクの前を、女のひとの足が上ってゆきます。

そんなとき、ボクはどうしようもない一つの衝動にとりつかれます。

それは、目の前を上ってゆく、彼女の足首を、いきなりムズとつかんで、うしろざまにひっぱりこんでみたいという衝動です。

もう一つあります。

それは、細く高い靴のかかとを、いきなり折って、それによってささえられている女のからだをひっくり返してみたい、という衝動です。

ことにすごくきれいな人が、ハイヒールの靴をはいてややおぼつかない、気取った足どりで歩いていたりするのを見ると、よくいそんな衝動にかられるのです。

あやうくそれをほんとにやってしまいうになったこともあります。見ていると、ぐうっとひきこまれてしまうのです。

一種の欲求不満のあらわれにはちがいませんが、こんなことをやりかねない男がいるということは、女性にとっては危険千万なことです。

女のひとを縛ったりムチうったりしたいという気持ちもそれと似通ったようなものですが、よく考えてみると、だいぶちがったところもあります。

ハイヒールを折ったり、足首をつかんでひっくり返したりというのは、美しいものの、魅力あるものに対する反発として起こる、突発的なハカイ衝動で、どんな男性の中にも多少はこんな気持ちがあるのかもしれない。

たとえば、おすましの女の子の裾すそをいきなりまくって、相手があわてふためくのを見てよろこぶような気持ちは、子供のときにだってあるものです。

それは完成された美がくつがえる、その瞬間のスリルに対する興味といえます。だから、そこだけ見てしまえばいいようなものです。イタズラというのはもともとそういうものです。あっさりしているとい

えはいえます。

それにくらべると、縛ったりムチうったりするのは、もっとネチネチと持続的でし、いためつけることによって、美なり魅力なりを、ゆがんだ形で昂揚させようという意味ではより本格的です。

もっとも、女の足首をつかみたいというのは、ビクビク動く生身の手ごたえをたしかめたい願望のあらわれですから、ある程度は、縛りや鞭打にも通じているといえます。

縛りは性的コース

憑かれていた者でなくても、女を縛ったり鞭打ったりしてみたいという願望は、多少はもっているものです。

ちかごろは映画にもよくそんなシーンが出てきますが、それは一般の映画観客の心にひそんでいる、そうした願望を計算してのうえだと思われまます。

女を縛る、というのは、相手の自由をもぎとって、暴力的に従わせようということの前提です。その意味で、このうえもな

くセクシユアルなケースです。

ところが倒錯者にあつては、縛ることはなにかの予備行為、またはいうことをきかせたり、こらしめたりする手段ではなくて、目的そのものです。

縛られた女を見ただけで、キャッとさけびだしたいような性的なショックを感じる。

ショックを感じて、それから何かするといふのではなくて、それだけで充足することのできる、一つの性的なコースなのです。鞭打にしてもそうです。

敏感なマニアは、鞭と女、あるいはナワと女、という観念を思いうかべただけで、もう陶醉してしまいます。

まして、じっさいにそれを目のあたりにしたときのショックは、なおさらです。

縛られた女、鞭うたれる女——こんな性的な絵はない、とマニアはいうでしょう。



生身の肉体をつかって、一幅の立体的な活人画を構成する。

それを観賞しながら、エジャクトする人の例を知っています。

かれは気が弱いので、

「縛らせておくれ」

といって相手の女性に哀願するのだそうです。

相手はイヤイヤ縛られる。

そして、相手の男性のヘンテコな趣味に對して、なんともいえないさげすみの表情でむくいる。

その侮べつの光をたたえた冷たい視線に刺されながらエジャクトするのが、その男性の人生最大のよろこびなのでした。

アメリカあたりのコール・ガールの客にも、それ専門の男がいるそうです。

コール・ガールの研究家である精神分析医のH・グリーンウォルドという人は、そのことについて、くわしく書いています。

ある客は、自分が気に入ったポーズのヌード写真や、縛り写真をもってきて、コール・ガールにそれと同じポーズをとってもらい、そして見ながらたのしむのだそう

す。

親切なコール・ガールなら、その親切心から、客のそうした欲求にこたえてくれるでしょうし、あまり親切でなくても、金にさえなればしかたがない、といった気持ちから、OKしてくれる女性もあるわけです。またなかには、そんなふうにされるのが好きな女性もあるにちがいないのです。

もっともアメリカのコール・ガールというのは日本のそれとはだいぶちがっていて、はっきりと性的な取り引きをうち出している女性のことです。

最近では日本の職業女性のあいだでも、男性の特殊な嗜好に対する理解が、だいぶゆき渡ったとみえて、
「なにか変わったことするんだったら、や
ってあげるわ」

などと、向こうから切りだしたりします。もっとも、そんなのは、その道の経験の豊富な苦労人の女性に多いようです。



高慢な女には鞭

どんな女を縛ってみたいか。どんな女を鞭うってみたいか。それについても、いろんな好みがあるようです。

かれんなお姫さまタイプ。
小股こまたのきれあがった感じの年増女。
きかない気のおてんば娘。

美貌をハナにかけた、高慢ちきな女。それらはすべて、縛りや、鞭の対象になります。

とても手が届かないような高嶺たかねの花。しかも相手が高慢ちきで、ハナもひっかけないような態度だと、男は、

「コンチキショウ」

と思います。

そして、そんな女を思い知らせるのは、縛りあげてブチあげるより手はないのだ、というような気になります。

ふだん思いきって高慢チキにふるまっている女が、手足を縛られてシオたれているところは、なんともいえないおもしろいものです。

もっとも、なかにはシオたれるどころか、縛られたりすると、ますます反抗心をつのらせて、くいつきかねない憎悪の表情でニラみつけたりする気の強い女もあります。

そんな女には鞭打という、かっこうの責め道具があります。

蚊にもくわせないくらいじにしていく肌を、思いきってピシッとやるのですから、ショックは深刻です。



ヒップ 花火

黒いスーツの女

日高靖之助^{ひたかやすけのすけ}は、家を出る時に、庭のサボテンの葉を一枚むしり取って、背広のポケットに入れた。サボテンのトゲを、三田加奈子^{みたかなこ}のお尻の下に据えていじめてやろうという思いつきだった。加奈子はその柔らかい尻肉をよじって痛がる格好を想像して、日高靖之助は、バスの中でもにやにや笑いがもれてきていた。

ある、割合に権威的な演劇研究所の研究生である三田加奈子は、靖之助がきょう電話で指定したスタンド・バー「F」に、ちゃんと時間どおり来て、暴虐な恋人があらわれるのを、神妙に待っていた。

薄手の黒いスーツを着て、あどけない目鼻立ちをした美しい顔が、いっそう色白く見える感じだった。スーツは新調したものだろう。靖之助は初めて見るもので、(黒とはオレの趣味にかなう)と、

何かもう異様に熱い目で、その黒いスーツに包まれた肢体をながめ、

「奥へこい」

と、薄ら笑いをして

言った。

「はい……」

「早くこい」

「……」

ためらいぎみな加奈

子の手を、靖之助の骨

張った手がぐいとひっ

ぱった。加奈子のハイヒールの脚がもつれる

ようにして、ほの暗い奥へ歩んで行くと、そ

こに一つきりあるシートの上に、靖之助は、

彼女のからだを前こごみに伏させて、尻をま

くらせた。

スカートをまくり上げ、パンティーをずら

し、白い美しい球形をさらけ出した三田加奈

子は、場所がらも考慮しないこの乱暴な命令

に、全身に羞恥の情をみなぎらして、涙ぐん

でしまっていた。

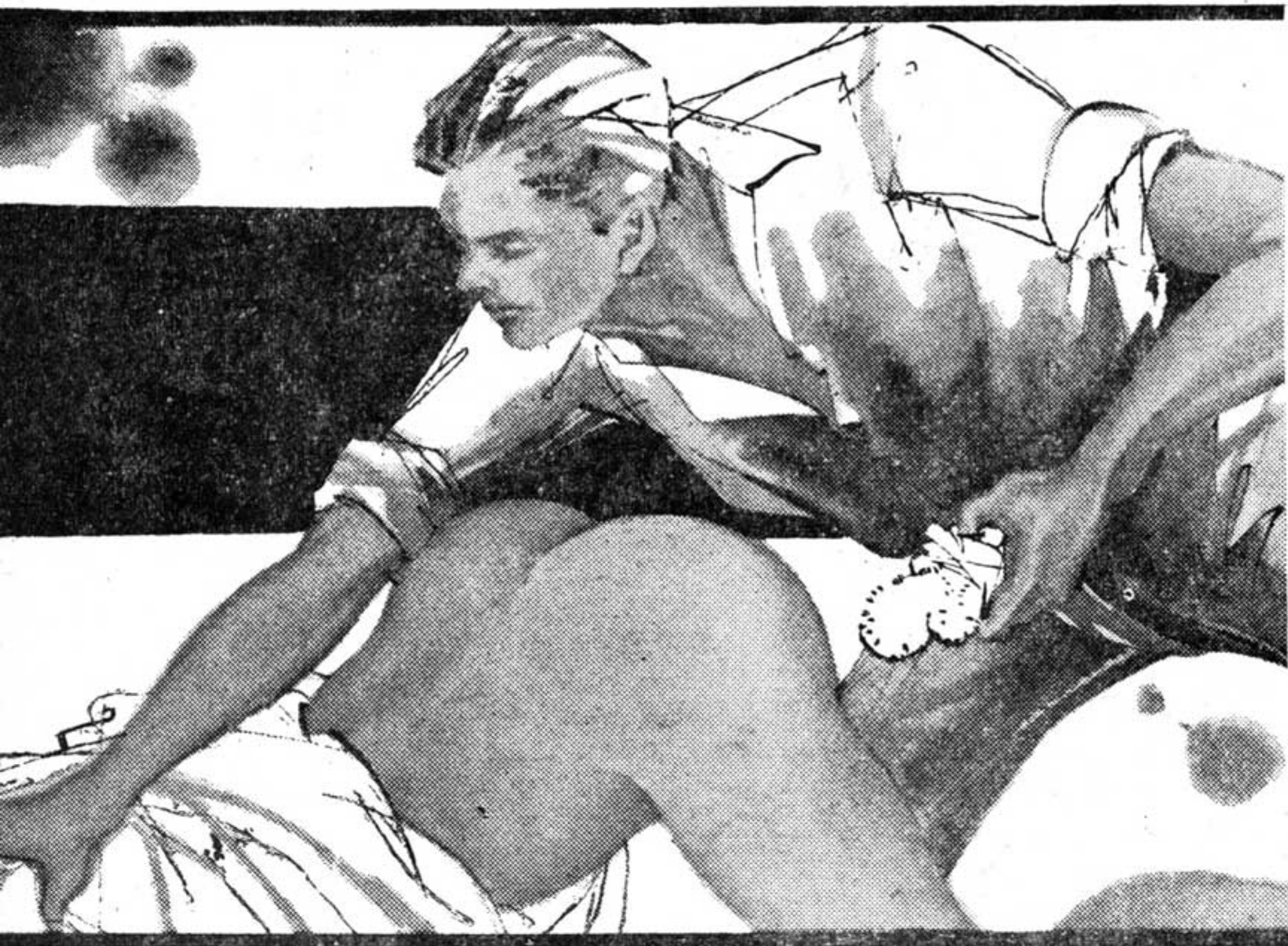
情け容赦もなく、靖之助は、サボテンの葉

を、白い尻肉の間にはさみ、両手でぎゅっと

北

潤

田上恵子・え



左右から尻たぽを圧縮した。鋭いトゲが食い込んで、加奈子は尻をよじり、身もだえて、くちびるから悲鳴をもらした。

「ああ……」

「音を上げると、ほら、あすこからバーテンのやつがこっちを見るぞ」

「ううう……かんにんして……」

「ふふふ」

尻に薄赤く血がにじむまで、かれは圧縮した。加奈子は、シートの皮を握りしめて、懸命に悲鳴をこらえていた。

この渋谷の道玄坂に近い「F」は、階上でちょっとした料理物もできた。スタンドにしだいに客が

たて込んできだすと、さすがに靖之助も客の目をはばかって、加奈子を許したが、そのかわり、二階の個室で、たっぷりとサボテンと皮ベルトを使って彼女の尻を責めようと、中年のチーフ・バーテンに申し込みに行ったが、あいにく、階上の室は予約でいっぱいだったので、靖之助は渋谷を作りながら、しかたがなく加奈子を伴って、外に出た。

「浣腸器は持っているだろうな？」

道玄坂のほうへぶらぶらたどって行きながら、靖之助は加奈子にきいた。

「ちゃんと買っておいただろうな？」

「……………」

「貸してみろ！」

靖之助は、加奈子の手からハンドバッグをひったくって、中をあけて見た。すると、香水のおうその中には、化粧品にまじって、ちゃんと浣腸器が一ダース新たに買い整えられてはいっていた。

二つの白い肉塊

道玄坂を登りつめたところで、日高靖之助は、思案するふうだったが、けっきょく、かれのサド仲間の藤村順哉の家へ加奈子連れに行くことに考えが落ち着いたようだ。客窓

なかれば、ホテル代を惜しむのである。が、また、二、三流のホテルでは防音装置が不完全で、尻に炸裂するベルトの音と加奈子の悲鳴とが、四方にもれる心配もあるのだった。

今までは、すべて加奈子の家で、靖之助は責めていた。加奈子と知り合ってから以後、ずっとそうだった。加奈子の家は世田谷の閑静な郊外にあって、また、家は広々とした造りで、加奈子のひとり住まいだったのだが、四日ほど前に、その家の本来の持ち主である加奈子のおばが、札幌から上京してきて同居することになって、靖之助は、加虐の場所を失うことになったのだ。

そのお婆というのは、相当な資産家の未亡人で、メイの加奈子をかわいがり、加奈子のすでに亡くなった両親に代わって彼女の生活をいっさいみてやっているということだが、靖之助は、そのお婆なる女に、まだ会う機会はなかった。また、すすんで会う気は、もうとうなかった。

顔を見たこともないが、かれにとって、その加奈子のお婆は、ただじゃまな存在でしかなかった。加奈子と自分の仲に、きつと、なんらかの形でひびを入れるに違いない存在だという先入観念があって、こればかりは、加

奈子の頼みに同意して、自分をお婆の目から隠すように努めた。

だから、靖之助は、自分のアパートの室に加奈子を伴うこともならず、藤村順哉の家でも借りなければ、しかたがないのだ。

「どこに……？」

と、タクシーに乗せられると、うるんだ声で、三田加奈子は言ったが、恋人がその冷たい横顔を見せたきりでいると、じつとうなだれて黙ってしまった。霧の深い夜である。

「おう、日高か、よくきたな」

と、藤村順哉は、玄関であいそうよく言った。

「三田加奈子さんですね。日高から聞いていた以上に美人だな」

無遠慮にじろじろと、黒いスーツの肢体をながめながら、靖之助の肩をたたいて、

「場所はいつでも提供するぜ」

奥の部屋で、白い女の裸形が動くのを、靖之助は目ざとく見て、「おい、上がれ」と加奈子の尻をひっぱたいた。

部屋に動いていた白い裸形は、藤村の妻であった。桃子という、その二十三、四の若妻は、裸体に直接浴衣をまとった姿であいさつしたが、リノリューム張りの床には、麻縄が

散乱し、竹鞭と皮鞭が投げ捨てられていて、つい今まで行なわれていた加虐の光景を思わせるのにじゅうぶんだった。

室のまん中には、ひとかかえほどある円柱が突っ立っていて、それには、非情な鉄製の手カセと足カセが付いていた。桃子の肌のぬくみが、まだその石膏色の円柱に残っているようであった。

そんな部屋の一角に突っ立って、加奈子は、せつなく嗚咽しながら、まず、そのお尻から丸出しにして、藤村夫婦の目に示さなければならなかった。そう、桃子も、順哉といっしょに、ソファに並んで掛けて、熱心に加奈子の尻をながめた。

「いい尻だな……」

藤村は感嘆したふうに、靖之助へ言った。

「日高、こりゃ本当に掘り出し物だ……」

「ふふ」

加奈子のバッグから、靖之助は浣腸器をつかみ出して、歩み寄った。加奈子は、両手を尻たばに掛けて前こごみになったが、この時、たまりかねたように激しくせき上げた。尻は全開放になり、見ている桃子のほうを思わず顔を染めるまでに、それは恥ずかしいポーズだ。

「おトイレは……靖之助さん、おトイレはどこ？」

泣きじゃくりながら、加奈子はきく。そう言ううちに、浣腸器が挿入された。

「あ……！」

「もっと尻をひろげろ」

「むうう……ううっ……」

排泄の衝動が下腹部を襲い、加奈子はもう恥も忘れたように尻をゆさぶって、

「おトイレへ……！」

と、悲しく叫ぶ。靖之助は、片手でその細腰をかかえ込み、一方の手に、二本めの浣腸器を握って、荒々しく挿入すると、

「ああ、お尻をぶって！」

尻を激しくぶたれると、排泄衝動が一時小やみするのだ。それで彼女は、もう夢中で、みずから尻打ちを願うのだ。けけけ！ と真うしろで藤村が、奇態な笑い声をあげた。そしてかれは、いきなり加奈子の片尻へ平手打ちをくれた。びしんとはずみのいい音がたつ。

「もっとですか、加奈子さん」

「……もっとぶってください！」

「あなた」と、ソファから桃子が叫んだ。

「構わないですよ、奥さん」

無気味なほど冷たい声で靖之助が言った。

しかし、桃子は廊下へ走って、

「加奈子さん、早く！」

と、トイレの戸をあけて叫んだ。

寝室の鞭責め

加奈子がトイレから出て来ると、桃子は、彼女を湯殿へ案内した。そういう女同士の親切さが、よほど身にしみてうれしいのだろう、加奈子は、幾度も桃子に礼を言ったが、しかし、湯殿の中で、晩秋の夜の冷たい水道の水を、加奈子は、桃子から尻に注がれた。

藤村が桃子に命じたことだが、加奈子にしてみれば、今の親切を裏切られるような思いが、ないでもなかった。

加奈子は全裸になり、タイルの床に四つんばいになって、ホースからほとぼしる冷たい水を、尻全体にくまなく浴びせかけられた。

「責め柱があり、水をぶっかける湯殿がある、こういう家をオレも持ちたいよ、藤村」

と、靖之助は、水を浴びて震えている加奈子の肢体をながめながら、言うのだ。

「壁一重のアパート暮らしじゃ、こいつを連れて行って鞭をくらわすこともできん。口には猿ぐつわをかましても、鞭音が響くからな」

「まあ、せいせいオレの家を利用しな。女が

ふたりからむと、芸が広くていいじゃないか。おまえの女はまだ二十前だし、こいつは二十四で、年も違って、いっそうおもしろい」

「奥さんも裸にさせな」

「わかってるよ。おい、桃子」

脱げ、という藤村順哉の一声で、桃子は、まるでロボットのように、するすると裸体を現わした。目をつぶって、まず乳房を示し、次いで、うしろ向きになってタイル壁に両手を突き、深い中腰の姿勢で、靖之助の目に尻のすべての部分をさらけ出した。竹鞭と皮鞭の激しい打擲の跡が、一面に交錯した無残な臀部である。

「立て、加奈子。そして、おまえも、奥さんの尻をよく見るんだ」

「……」

「いやだというのか」

「い、いいえ……」

加奈子が起き上がった気配に、桃子は、思わず羞恥をみなぎらして、わずかに尻をすぼめる様子に、男ふたりは笑いを誘われた。桃子は、順哉から荒々しく尻たばを押しひろげられて、加奈子の目にも同じようにくまなくすべての尻の部分を示した。

加奈子は、鞭跡こそむごたらしいが、肌理

のこまかな、そして丸くひきしまったいい尻だと、内心思わざるを得なかった。尻を見比べるということで、加奈子は夫人の横に並んで同じように深い中腰の姿勢をとった。

その後、円柱にくくりつけられての激しい尻打ちが恋人の手によって、思うぞんぶん加えられ、白い尻を血まみれにして加奈子がリノリューム床にはいつくばった時には、霧の深い秋の夜はふけていて、午前二時。

「ううう……ううう……ううう……」

尻肉の焼けただれるような激烈な痛み、白いイモムシのようにはいつくばって呻吟する痛ましい加奈子にむかい、藤村は靖之助の手から代わって鞭を取って、

「加奈子さん、さあ今度はわたしにも少し責めさしてください」

「ああッ、もうかんにんしてっ！」

「ははは」

大声で靖之助が笑い出した。笑いながらかれは、かたわらの桃子の裸形をぐいと引き寄せて、トイレへうながした。桃子は素直にトイレの中へはいつて便器にまたがったが、浣腸の必要はないことを靖之助に告げた。今夜、初めにちゃんと順哉からその処置を受けていて、尻打ちされても粗相はしないという。聞くと、靖之助はわざと五回余りも浣腸を試みた。しかしやはり効果はなかった。

「円柱に縛るんですか？」

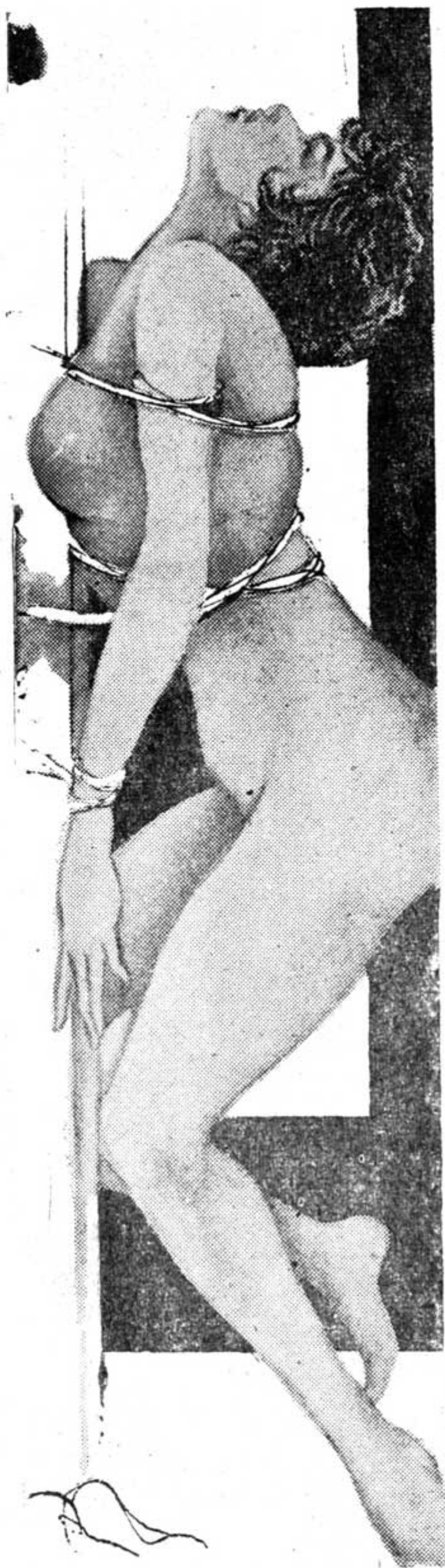
と、便器から腰を上げながら桃子がきいたとき、加奈子もまた藤村に髪をつかまれながら悲痛な声で、

「柱にまた縛るんですか……」

手カセ足カセをされて、中腰の姿勢でたたかれるのは苦痛が倍加する。しかも、暴虐な恋人の手による執拗な激しい打撃で、尻はもう血まみれなのだ。できたら、こうしてはたままで加奈子は新手の責めに耐えたかった。だが、

「立つんだ！」

と、藤村は容赦なく、長い黒髪をひつつかんで加奈子をずるずると引き起こし、髪の毛を引っ張りながら廊下へ連れだした。桃子が



今でて来ているトイレとは反対のほうへ、藤村は片手で加奈子の尻をたたきながら彼女を歩ませた。

順哉の寝室だった。ダブル・ベッドを見ると、加奈子の顔は思わずハッと青ざめるふうだったが、貞操に関する心配は絶対にない、と藤村は笑って言った。

「日高も、このわたしも、いわば日陰者のサディストだが、しかし、加奈子さん、われわれはノーマルな人間よりも、肉欲には清潔なのだ」

竹鞭の先で、かれは加奈子の尻^{しりひだ}を突つき、「そこのビデで尻を洗って、タオルで血をふきとりなさい」

噴水式にあふれ出るビデの水の冷たさが、今はヒリヒリと痛む皮膚に快かった。藤村がもっと蛇口をひねり、加奈子は腰を浮かして、

かれの手が尻を洗うのにまかせた。洗う

のではなく、びしびしとたたいてもらいたい気持ちが不意に加奈子にした。タオルでふいたのも藤村だった。

そしてかれは、加

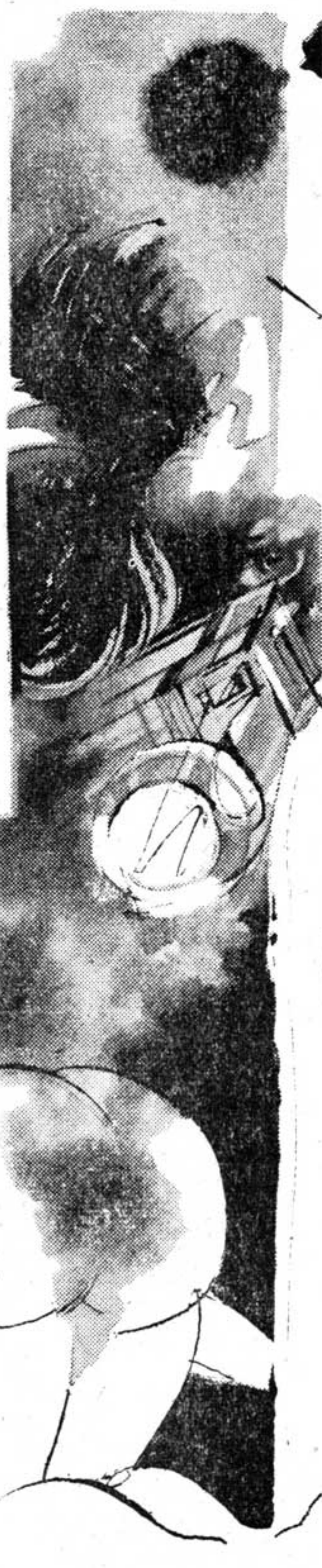
奈子をベッドの枠をつかまらせて立たせ、ライター・オイルを尻にかけて火をつけ、一瞬青、赤の炎が尻を包んで燃え上がるのを素早くカメラにとらえた。加奈子はそれとほとんど同時にベッドへころがり込んで、うめいた。

しかし、不思議にも、熱さはつかの間感じただけで、皮膚はうぶ毛を焼いた程度にとどまった。これですごく美しいカラー写真がで

きると、藤村順哉ははなはだ満足に言った。

青、赤二色の炎で燃える女の裸臀、なるほどそれは、サディスチックな妖美な写真になることも知れない。

加奈子は、ベッドの上で四つんばいに尻を高々とさせられて、竹鞭で打たれた。たちまちまた血がしたたりだし、悲鳴が絶え間なくほとぼしかった。リノリューム^{へや}ばりの部屋で、



いまひとつ別な悲鳴が、円柱の女体からもか
ん高くあがっていた。

白裸の浣腸責め

「日高、こないだは愉快だったな」

四、五日して、山手線の国電の中で、偶然
靖之助と顔が合うと、藤村は寝不足らしい赤
い目をして言った。朝の通勤電車は、今朝も
例外なく満員で、日高靖之助は、扉口から
だを押しつけられながら、むっつりとした表
情で、

「うむ。……おまえ、だいぶ目が赤いぞ」

夜明け近くまで、桃子の尻をいじめていた
んだ、と藤村順哉はあくびまじりに言った。

窓外を秋日射しの町並みが走る。

「おまえのほうは、あれからどうなんだ？」

順哉がきくと、

「加奈子か、あいつは、あれのお婆と一週間
ほど東北のほうへ旅をするらしい」

「ほう、そいつは長い旅だな。で、いつ発つ
んだ？」

「それが、きょうの午後の急行なんだ」

と、靖之助はふきげんに言った。

新宿駅でふたりは左右に別れて、靖之助は
西口近くにあるかれの会社へいったん行った

が、課長に胃痛を訴えて、一時間そこで
早退した。

かれは、赤電話から加奈子の家へ電話を入
れた。つごうよく加奈子がでたので、かれは
内心ほっとしながら、今からすぐ千駄ヶ谷の
“B” 荘という温泉マークのホテルへ来るよ
うに彼女に命じた。いまお婆とふたりで旅行
の準備をしているところなのに……と加奈子
は困ったように言ったが、靖之助はきかなか
った。

「わかりましたわ……」

と、加奈子は泣くような声で言った。

B 荘へ一足先に靖之助は行って、トイレ付
きの一番高い洋室を借りた。しかし、この
払いは、加奈子に出させる気なのだ。

タバコをくゆらしながら、靖之助が窓から
外を見ていると、やがてホテルの前に小型タ
クシーが止まって、三田加奈子が降り立った。

女中に案内されて彼女が部屋に通ると、靖
之助はすぐトイレを指さして、まだ長いタバ
コを手荒く灰皿に押しつぶした。瞬間、加奈
子の顔におびえた色が走って、

「あなた、ごめんなさい……」

と、手を合わせた。バッグの中に浣腸器の
用意がしてないのである。靖之助は加奈子の

ほおげたを音高く平手で張った。

「……旅行のしたくで忙しくて、つい忘れた
のよ、堪忍して——」

言いながら加奈子は、スカートを脱ぎ、下
着をひざがしらまでめくりおろしスリッパの
すそを背中までからげて尻を丸出しにした。
藤村の家で打たれ責められた跡が、青じみに
なって縞模様を両尻たばに描いている。

ぴしゃっぴしゃっ、靖之助は手のひらで
たたきながら、その合い間にベルを押して女
中を呼んだ。

ベルを押したのは加奈子にはわからないか
ら、彼女はそのあさましい自分のポーズを女
中に見られてしまうことになった。加奈子が
哀れにろうばいしてスリッパで尻を隠そうと
すると、靖之助の叱咤が飛び、皮ベルトが激
しく炸裂した。

見て見ぬふりをしている女中に、浣腸器を
四、五本買って来てくれ、と靖之助は無表情
に頼んだ。承知して女中はさがった。

加奈子は素っ裸にさせられて、洋式の腰高
便器にまたがさせられた。

「女中をここに入れないで……」

「うふふ……」と日高靖之助は笑う。

「一週間会えないかわり、きょうここで一週



間分、この尻に鞭をくらわしておいてやる」
「……いいえ、三日くらいしたら、あたしだけ先に帰ることになりましたの。……だから、そのときあたしのお家で、またお尻をなぶってください」

「三日ぐらいでおまえだけ先に帰るだど？」

「はい。つごうでそうになりましたの。あなたに家の鍵を渡しておきますから、よかったら、あたしの家に泊まっていってください」

「ふむ」

「ねえ、だからあなた、あたしが帰ってからたっぷりお尻打ちをなさってよ」

加奈子はけんめいに頼んだ。

「きょうのところは、お願いですから、お手柔らかにしてください。お尻がはれ上がって、すわることも歩くこともできなくなったら、あたし、どうすることもできない……」

「犬みたいに四つんばいで歩くんだな」

と、靖之助がにべもなく答えたとき、ドアがひらいて、さっきの女中が戻って来た。トイレのドアは開放されているので、加奈子の全裸のまたがり姿は、女中の目にひと目に映る。青い鞭筋の刻まれた若い裸の尻を、いやおうなく女中は目にし、加奈子は耳のつけ根まで赤くして、全身に羞恥をみなぎらした。

靖之助は礼を言って、女中の手から浣腸器を受け取った。渡したとたん、女中はにわかに身をひるがえして室から出て行った。なんともいえないような異様なムードに、けおされたふうだった。

女中が去った気配に、加奈子は少しほっとしながら、中腰の姿勢に変わって、いつものように尻をぐっとうしろへ突きだし、両手をまわして、尻たばをおしひろげて、浣腸器の挿入を受けた。ぐるぐると激しく直腸が蠕動し、尻肉をみずから激しく驚つかみにして、声をこらえ、加奈子は猛烈な排泄衝動に耐え、「ゆ、ゆるして……!」

「まだまだ」

靖之助は二本めを挿入する。ついで、三本め。尻を左右にゆさぶり、足踏みして加奈子はもたえるのだ。

排泄をやっと許されて、それを済ましたあと、加奈子の美しい白裸の肢体は、死んだようにぐったりとなって、西洋便器の上から動こうとしなかった。裸の背中に黒髪を振り乱してすすり泣くその哀れな美少女の尻肉へ、日高靖之助は力いっぱいベルトを横なぎさせた。

「ああ……」

たちまちサーッと赤い血筋が走る。水道のハンドルを加奈子が握ると、水が勢いよく流れ出して、乳房にも飛沫がかかるようだった。鞭は、狂熱的にたて続けに打ち振られた。

加虐を喜ぶ人妻

千駄ヶ谷の温泉マークB荘で、さんざん尻打ちをされた三田加奈子が、ともかく予定どおりの日の午後、おばの秘書役として東北地方へ旅立ったあと、彼女の家には、日高靖之助が、彼女の帰りを待ちながら暮らすようになった。騒々しいアパートとは違って、閑静なこの郊外の家は、熟睡できて、はなはだ快適である。

加奈子のおばさえいなかったら、オレはここでずっと暮らすのに……と、靖之助はつくづくおばの存在をいまいました。おばのモノらしい、割合につややかで上品な色柄の和服が、ダンスの中にしまわれているのもいまいしかったです。

加奈子の化粧品でいっぱいな三面鏡台を見ると、その鏡に、鞭傷で色どられた尻を写し見る加奈子のポーズが頭にほうふつとして、靖之助は、彼女の帰りがもどかしかった。

この家で尻打ちを加えると、靖之助はかな

らず加奈子に自分の尻をながめさせていたのだ。赤く血ばれしたおのが尻を、加奈子は涙の目で見なければならなかったのだ。

二日たち、三日たった。

しかし、加奈子は戻ってこなかった。

靖之助は、気がいらだって、加奈子の帰りをむなしく待つことに耐えられなかった。かれは五日めの夜には、中目黒の藤村順哉の家へでかけて行った。藤村が出張で留守なことを、承知のうえで、靖之助は出向いて行ったのだ。

靖之助の会社と同業態の鉄鋼関係の会社で順哉は課長をつとめていて、大阪での関係者の寄り合いに順哉がおもむいたことは、靖之助は聞き知っていたのだ。

だから家庭には、桃子ひとりしかいなかった。彼女は、あいそうよく笑顔で靖之助を迎えたが、その笑顔の裏には、やはりなんとはなし羞恥するものが見えた。こないだの円柱での尻打ちの記憶が甦えるためだろう。しかしその石膏色の責め柱のある部屋に、彼女は靖之助を招いた

「お紅茶がよろしい? それともコーヒー?」

「コーヒーをいただきたい」

グレーのタイトスカートがびっちり腰を包

んで、尻の形をよく示し、その尻が揺れて調理場のほうへ行くのを、靖之助は見つめた。

サイホンでコーヒーをたてている桃子のうしろに、いつのまにか足音もなく日高靖之助は近寄っていて、

「奥さん……」

「……………」

「桃子さん……」

桃子は、サイホンのアルコール・ランプを途中で吹き消して、スカートの止め金をはずし、身をかがめて下着を足首に落とすと、ナイロン・スリッパを大きくからげ上げて、尻を丸出しにして、「……………」声もなく羞恥した。

「出張する日に、藤村からずいぶん鞭打たれて……傷だらけですわ」

と、桃子はあえぐように言った。なるほど、生々しい鞭傷が尻全体にある。靖之助が手のひらでたたくと、ぴしゃぴしゃと尻肉は鳴り、もうそれだけで傷口の痛みは桃子はうめいた。

「加奈子さんの代用品なのね……」

そのまま調理場の板の間で、足をひらいて深い中腰の姿勢で、桃子は浣腸を受けながら、そう言った。靖之助は、ほおのあたりにちら

と冷笑を浮かべただけで、答えない。浣腸は二回加えられ、桃子はお腹を抱えながら小走りにトイレへむかった。

柱は、今度は使わなかった。

場所は湯殿をえらび、その冷たいダイル床の上に桃子を四つんばいにはわせて、まず加奈子に用いたトゲの鋭いサボテンの葉を当てがって、尻たばを圧縮してしいたげた。血がにじみ、しだいに血の糸がたれたすと、

「つ、つらい……つらいわ……鞭のほうがまだましだわ、日高さん……！」

桃子は悲鳴を断続させた。

「お願い……鞭で打って……！」

「ふふ、鞭もあとでたっぷりと進呈しますよ。奥さん」

命じられて、桃子は起き上がると、壁にしがみついた。血まみれの人妻の尻へ、靖之助は冷たい水を激しく注ぎだしていた。頭からも水をかけた。そうして、そのずぶ濡れの裸身へ皮鞭が炸裂しだしていた。

藤村桃子に対して、一種感謝に近い感情が、冷酷なはずの日高靖之助の胸中にも多少湧いたようだった。加奈子という対象のいない、向け場のなくなった自分のサディズムの炎を、藤村桃子が、身代わりの燃焼さしてく

れたことはやはりありがたい、とかれは思う。同病相あわれむというか、世間のノーマルな通念を超越したサド、マゾの二性が、きわめて純粋にその存在生命的な火を燃やし合ったことに、感慨がないわけではなかった。

靖之助は桃子のもとに二泊して、ふたたび加奈子の家へ戻ったが、その日は会社で残業して、帰ったときは夜になっていた。

と、浴室に灯がともっているのである。門をはいるとすぐ、深い庭木立ちを透かして、まぎれもなく浴室に灯の色が見えるのだ。加奈子が帰って来た、と思うと、靖之助の足ははずんだ。

家にはいると、しかし靖之助は、この内心の感情を急にしずめて、ゆっくりと忍び足で浴室へむかって、広廊下をたどって行った。

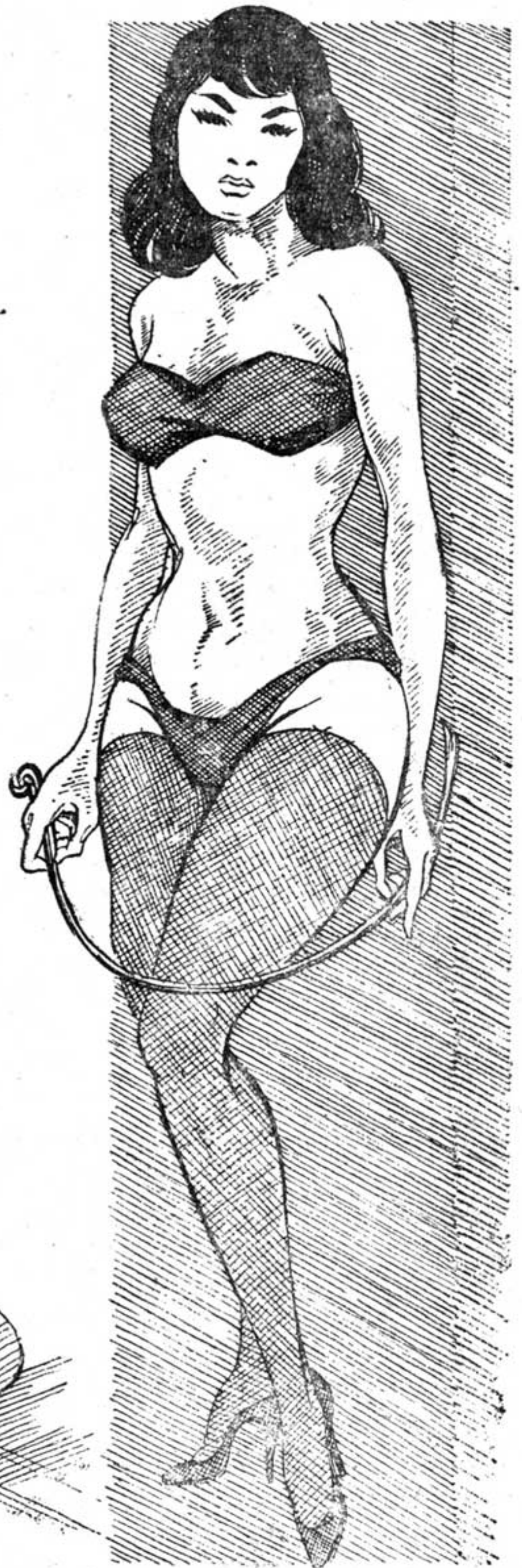
浴室の戸が半開きになっていて、白い湯気が立ちこめる中に、髪を洗っているらしい、桃色をおびた白い女体が見えた。尻がこちらを向いている。加奈子のからだだと靖之助は思い込んで、一点の疑いもたずに、湯気の中へ身を入ると、ものもいわずベルトを尻へ打ち下ろした。尻肉をたたく激しい響きと同時にただならぬ恐怖の声がほとばしった。

加奈子ではなかったのだ——。(以下次号)

よ う な 女

向を異にする3人の女とア
プレイに耽溺し陶醉する女

真 崎 伸 一



悪魔の

それぞれ性
ブチツクな

あたしはレスビアン

あたしは当年とって二十五歳の、美しいB
Gです。

自分で美しいというのは、決して、うぬぼれじゃありません。顔全体の輪郭は、格好のよい卵型。目はぱっちり大きく、ひとみは黒く、うるみをおびており、鼻も高からず低からず、くちびるは口紅など使わずともしっとりと赤くぬれております。身長は一メートル五七センチで、バスト九一センチ、ウエスト五六センチ、ヒップ九三センチ、と申しますならば、顔立ちだけではなく、からだのほうも堂々たるグラマーであることがわかりでしょう。



そうそう、あたしはまだ独身なのです。そりゃ、あたしのような美人ともなると、言い寄ってくる男性も数知れずありますが、全部あっさり袖にしちゃいました。別に、えりごのみをしているわけじゃないんです。

実のところ、あたしは、男に全然興味がない体質なのです。男の姿を思い浮かべるだけでゾッとしてしまい、全身の毛がさかだってしまう始末なのです。

だって、男って動物は、ヤボでしみたれでいて、うすぎたないことと言ったら、お話にならないんですもの。ちょっと手入れを怠ると、もしゃもしゃとヒゲだらけだし、からだはごつごつしているし、ガサガサした脚は毛だらけ。

多くの女性がなぜ、自己を犠牲にしているのか、あんないやったらしい動物につかえていくのか、あたしには、全く不可解ですわ。

その点、女のからだはなめらかで、美しく、ふわふわと柔らかいことと言ったら。

そうよ。あたしは同性愛なのよ。レスビアンというほうがしっくりしますわ。

だから、あたしの恋人は、女ばかりなんです。現在、そんな恋人が三人もいるんです。

うっふん、いやあね、そんな顔しちゃ。だんだんと話が進むにつれて、ひとりずつ紹介してあげますから。でもね。ひょっとすると、あたし、その三人の恋人たちを、いっぺんに今夜、失うかもしれない羽目になっちゃいつつあるのよ。

網にかかったエモノ

あたしは、二年前に、父の知人のお世話で上京して、いま勤めているK商事に就職したのです。容姿のおかげなのか、すぐに秘書課勤務を命ぜられました。そして、一月もたないうちに、若い多くの社員たちから、いろんな誘惑を受けましたが、むろん、そんなのにはなんの魅力も覚えません。

それよりか、あたしは、社長秘書の礼子さんにほれちゃったのです。

礼子さんは、あたしより三ツ年上で、独身でした。身長はあたしより少し高く、バストやヒップは、あたしのように出っ張ってはいませんが、すらりとした均勢のとれたからだつきでした。

とうとう、礼子さんを誘い出すのに成功したのは、入社後三カ月もたってからでした。だって、礼子さんは、職務がら、いつも忙しく、それに、ボーイ・フレンドや恋人らしいのも、五、六人はいららしいので、なかなかうまく誘い出せなかったのです。

バンザイ、と心の中



で、あたしは快心の叫びをあげました。もうその時は全く有頂天でした。心臓が喜びでどきどきと激しくおどっておりました。

なんとかかとか口実をもうけて彼女をあたしのアパートにつれ込み、睡眠薬を少ししこんだポートワインを飲ましてあげました。アルコールに混入した薬は、思いのほか早く吸収されましたので、二十分ばかりで礼子さんはぐったりと畳の上に横になり、ものうげに目をパチパチやっていました。が、

「少し休ませていただくわ。あーあ、お酒がまわっちゃった」

と言って、スヤスヤと愛らしい寝息をたて始めたのです。

しめた、とペロリと赤い舌を出し、首をすくめて満足の意を示してから、あたしは、身につけているものを全部ぬぎすて、黒のブラジャー、黒のパンティー、黒のストッキングという魔女のような^{ふんそう}扮装になり、それから、眠っている礼子さんの服や下着まではぎとり

ました。彼女は、ふんふんと鼻をならし、軽く抵抗しただけで、あたしのなすがままになっただけです。

今や、あたしのいけいけは、ピンクのうすいパンティー一枚の哀れな姿で、眼前に横たわっているのです。

いけいけは、常に自由であってはなりません。そこで、綿の^{ゆめ}ロープで、手首と足首をしかりと縛ってあげました。彼女は、完全にあたしの支配下におかれたわけです。煮て食おうと焼いて食おうと、あたしの胸三寸なのです。

彼女は、このような自分の運命も知らず、幸福そうに眠っていました。

つと腕をのばして、ふっくらとした乳ぶさに手をかけ、指で、しこしこもんでみました。力を入れるたびに、彼女は無意識に、快い叫びをあげました。今度は力いっぱい乳ぶさをひねりあげてやりました。

「あっ！」

彼女は、激痛に顔をしかめて、目をさましてしまいました。

そして起きあがろうとしましたが、手足が縛られているので、ただ不格好にくねくねとむなしくあがいただけです。

彼女はやっと、自分がどんな姿にされているか気づいて、泣き出しそうに顔をゆがめ、不可解な目であたしをじっと見つめました。

「礼子さん。あたしはあんたが好きなの。わかる。ねえ、わかるでしょう、あたしの気持ちか」

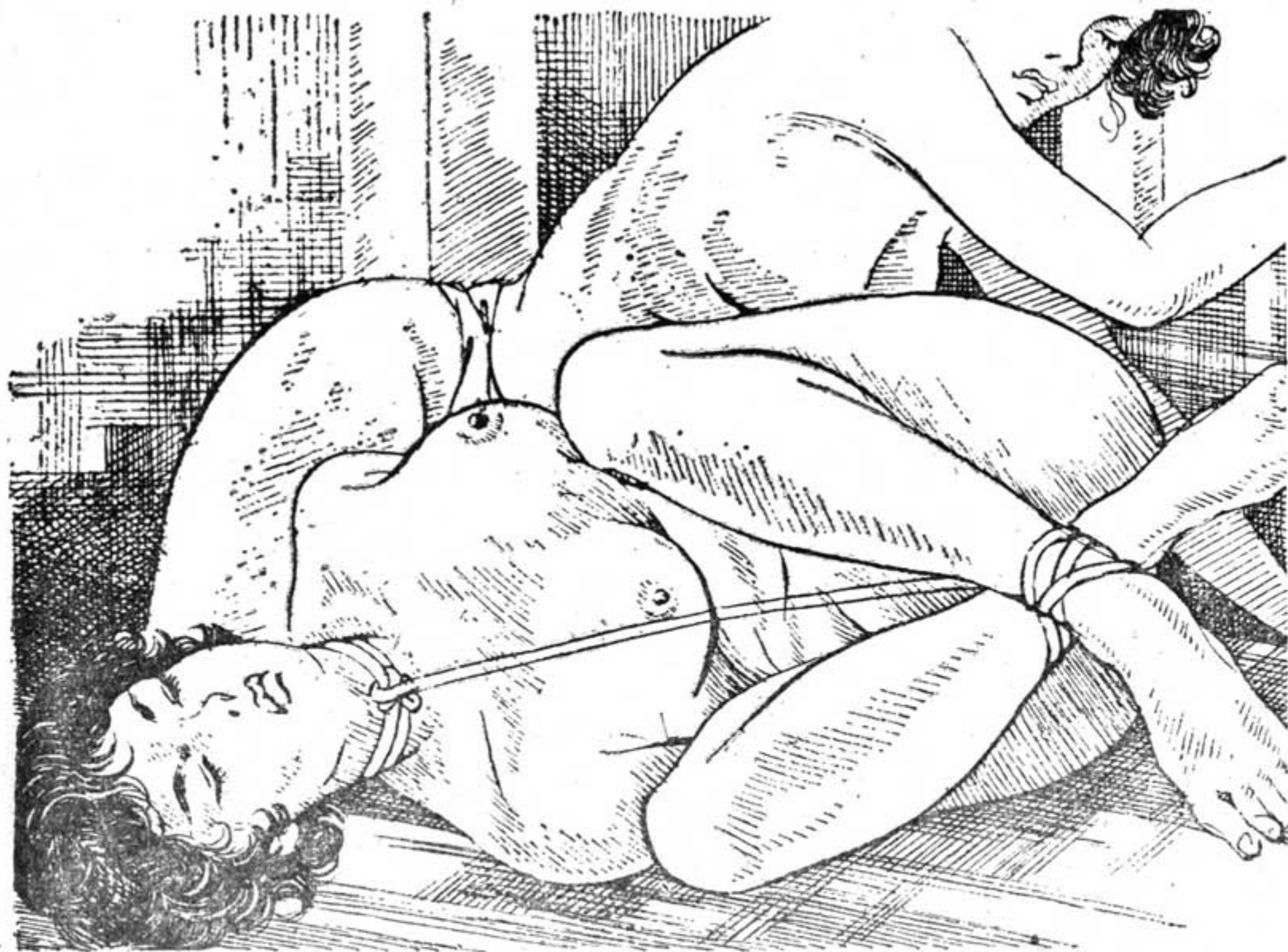
「でも、縛らなくてもいいじゃないの」

礼子さんの泣き顔は、怒り顔に変わりました。

「あたしね。好きな人を縛らずにはいられないのよ。逃げられないためにね」

思いがけない逆転

「ねえ、逃げやしないから、ほどいてよ。あ



たし、なんでも言うことをきくわ。おトイレに行きたくなっちゃったのよ」まんざらウソでもなさそうに思えたので、ロープをほどいてあげました。

ところが、そのとたんに、形勢は逆転してしまっただけです。礼子さんは、いきなりあたしにとびかかってきたのです。そして、簡単に背中へ両腕をねじあげられ、畳の上へゴリゴリと顔をこすりつけられちゃったのです。もがけばもがくほど、ねじられた腕に激痛が走り、さすがのあたしも、降参の悲鳴をあげました。

そんなあたしを、情け容赦なく、彼女は嚴重に縛りあげ、あごに手をかけて、あたしの顔をぐいとしゃくりあげて言いました。

「さあ、これで、あたしのほうが強いことがわかったでしょう。あたしのかわいい奴隷さん。これから、たんとかわいがってあげますからね」

これじゃ、まるであべこべです。でも、しかたありません。礼子さんのほうが、あたしより強いのですもの。

礼子さんも、あたしをねらっていたそうなのです。そして、なんとかして、あたしを手に入れようと考えている時に、うまうまとあ

たしのペテンにかかったのですが、じょうずに危機を切りぬけて、実力で目的を達したのでした。

礼子さんは、お仕置きとして、細い乗馬鞭で、あたしの裸のお尻を十五ぶちました。あたしが、彼女のお尻をぶってやるために買っておいた鞭で、とうのあたしがぶたれるとは、なんという皮肉な結果でしょうか。

それに、その痛いことと言ったら。がまん強いあたしも、十回めの鞭がふりおろされた時、ついに悲鳴をあげ、やめてちょうだいと哀願しましたが、涙だらけのあたしの顔を、冷酷な表情で見返しただけで、ものも言わず、正確に、あと五回、力まかせに鞭をふりおろし続けたのです。

鞭が肉に食い入って、ぴしりとなるたびに、電撃のような鋭い痛みが、脳天までつきあげてくるのです。

最後の鞭が終わってから、彼女は、涙でべとべとになったあたしの顔をのぞき込んで、きびしい口調で申しました。

「さあ、あたしを永遠に愛します、一生、あたしの奴隷になります、ということ、すぐお誓い。そうでないと、あともう二十回ぶちますよ」

もう二十回も鞭をぶち込まれたら、お尻がはれあがって、歩けなくなるとたいへんだと思っ、大急ぎで誓いました。

「あたしは、礼子さんを永遠に愛します。一生、礼子さんの奴隷です」

すると彼女は、急に優しくなって、あたしを抱きしめ、くちびるで、あたしの涙をぬぐってくれたのです。

あたしの女サジストとしての誇りは、礼子さんのためにさんざんに打ち破られました。それから礼子さんはまさに、あたしにとっては恐怖でした。

そのくせ、彼女から離れることはできないのです。彼女に縛られ、彼女に鞭うたれ、彼女に抱きすくめられて、ところきらわずキッスされる時、あたしは、いっさいを忘れて快樂の世界に耽溺してしまふのです。

それなのに、あたしは少し不満なのです。なぜなら、あたしははじめから礼子さんをあたしの立場において考えていたのですから。ひょっとすると、あたしは、礼子さんに責められながら、責める自分と責められる礼子さんという設定を、内心ひそかに描いていたのかもしれない。あたしはたぶん、本来からのサジスチンなのですが、ただ、強い者には

二人だけが楽しむ大人の絵本？

好き人の筐底に隠された夜の秘密！

秘められた名画と

禁じられた場面集

この場面をマネしないで下さい！

夜のムードにマッチした
新形式の秘芸画入 千両 五〇〇円

▼カタログ切手30円封入申込の方に急送す

東京都世田谷局二十一号(イ) 福寿会

勝てず、一時的にマゾに転化して満足していたにすぎなかったとも言えます。

海老縛りの女

一年間、そんな交際が続き、礼子さんはますますあたしを愛するようになり、とうとう同棲することになってしまったのです。おかげで毎晩、あたしは縛られっぱなしで、便所へも自分で行けないありさまなのでした。

そこで、一晩くらいは自由を楽しみたくなったあたしは、いやなのを辛抱して、ある男の社員につれられて、銀座のバーへ行きまして。お酒が飲みたかったのです。女給という美しい同性を相手にしてね。

そして、お酒を飲みすぎてベロンベロンに酔っぱらい、明子という女給に、連れられて店をあとにしたのは、午前二時ごろ。もちろん、あたしをつれてきてくれた社員は、とうの昔に姿を消しておりました。あたしの飲みっぷりに、きもをひやしたのでしょう。

「ねえ、お嬢さんのお宅はどちらですの」

明子は、心配そうにあたしの顔をのぞき込みながら、尋ねました。

あたしは、今夜はアパートへ帰るのは、いやでした。礼子のひどいお仕置きが待っていることでしょうし、夜遊びの罰として半死半生の目にあわされるかもしれません。

「家なんてないわよ」

「冗談おっしゃるものじゃありませんわ」

「家なんてないのよ。あんなのどこへ泊めてよ。そうでなきゃ、舌かんで死んじゃう」

「困りましたわね」

さんざんダダをこねたので、けっきょく、明子は、あたしを彼女のアパートに泊めてくれました。

明子はおとなしそうな性格でした。からだもずっとあたしより小柄で、くりくりしたかわい目をしておりました。

自分より弱そうだと思うと、つい、あたし

は欲望を押えることができず、彼女を押えつけ、裸にして細ヒモで縛りあげてしまいました。

明子は、あたしよりずっと弱く、抵抗らしい抵抗もあまりしなかったのです。むしろ、おびえて、おどおどしていました。

あたしは、何年ぶりかで、征服感をしみじみと味わいながら、この愛くるしい獲物を、どのように料理してやろうかな、と舌なめずりしながら考えました。

「ふっふふ」

思わず悪魔のような含み笑いが、あたしの口からもれ出しました。

「エッチね。こんなことする人、きらいよ」

明子は、不安そうに眉をひそめ、せいっぱいの怒りを示して、非難しました。

あたしはいっこうに平気です。こうなったら、もうこの愛らしい獲物を、どうしていいか、めてやろうかという思いで、あたしの頭はいっぱいだったのです。

それに弱いくせに生意気に、エッチね、なんてことを言った罰として、最初に、思いきり恥ずかしい目にあわしてやれ、と決心して、足を組ませて縛ったロープを首にかけ、ぐいぐいと荷物でもくくるように締めあげてやっ

たのです。

彼女はびっくりして声も出ないのか、くうくうと、のどの奥で苦しそうに泣きました。

とうとう二つ折りになった彼女は、くちびるが、白いやわらかな脛にとどきそうになりました。これで完全な海老縛りができあがったのです。

しばらく、そんな彼女の姿をながめておりましたが、ますます残虐な気持ちが起こってきたので、ポンと、足でけってみました。

「ひーっ！」

悲鳴をあげて、彼女のからだはごろりところがりました。

なんというすばらしいながめ、なんというすてきなお仕置きでしょうか。彼女の白い双丘は、高々と今やあたしの眼前に盛りあがって、ぴくぴくとかすかにけいれんしながら、虐待されるのを待っているのです。二つの丘の間の秘密の谷間も、まったくすみずみまで目がとどくありさまなのです。

彼女は、羞恥のあまり、しくしくと泣き始めました。泣いたら許してもらえるかもしれないという甘い考えをすぐあたしは、容赦なくたたきつぶしてあげることにしました。

その夜は一晚じゅう、あたしも明子も一睡

もせずに過ごしました。

明子は泣きべそで、少々マゾの傾向があったものですから、あたしと彼女のアブノーマルな関係は、すらすらと成立し、発展して行きましたわ。

浣腸で結ばれた人

一方では、礼子さんにいじめられて喜悅のうめきを発し、他方では、明子をいじめて喜の絶頂に遊ぶという、なんとも複雑な変態生活を送っているうちにあたしは、運がいいのか悪いのか、今度はまた、変わった女性に会ってしまったのです。

ある暑い日の午後、お腹が張ってシクシク痛むので、会社を早退し、アパートの近くの医院へ診察してもらいに行きました。

診察に出てきたのは、女医さんでした。堂々たる体格で、三十五歳ぐらいの年ごろでした。堅くて冷たい診察台の上に寝たあたしのお腹のあたりを軽くさすってみて、

「最近、お通じあって？」

と尋ねました。そう言えば、ここ四、五日お通じがなかったことを思い出し、首を横にふりました。

「なるほど。原因はそれですよ。すぐ楽にし

てあげますからね。さあパンティーを脱いで脚をあげ、ひざを両手でかかえてちょうだい。ちよっと不快な気持ちができるけれど、お腹がスツとすれば、さっぱりしますからね」

何をされるかピンときたので、あたしは、言下にきっぱりと拒絶しました。

「いやです。あたし、お浣腸なんて、絶対にいやです。下剤をください」

「だめです。下剤なんかより、お浣腸のほうがずっとききめも早いし、からだのためにもいいのです。さあ、医者言うことはきくものですよ」

女医さんは、とてもこわい顔でにらみつけました。

その剣幕に押されてあたしは、しぶしぶパンティーを脱ぎ、スリッパのすそをまくりあげて、夢にも思っていなかった恥ずかしい姿勢になりました。明子を海老縛りにしてじめたことを思い出し、その時の明子の恥ずかしさを身にしみて思い知らされたのです。

消毒液のついた脱脂綿で、露出した柔らかい部分をごしごしこすられた後、そのひりひりした痛さがなおらぬうちに、何か細い堅いものが、抵抗を押しつけて、体内にぬるぬるともぐり込んで行くのが、不愉快な悪寒をと

もなって感じられました。

じわじわとなまあたの液体が大量に注入されました。そして、その管は、ぬるぬると、生物のようにたまらない嫌悪感をかきたてながら、体内を動き始め、数秒後には、完全に体外へ脱出させられました。

とたんに、あたしのお腹の中で、途方もない怪物が猛烈にあらはれ始めたのです。

「十五分間、辛抱するのです。そうでなきゃ効力が半減されますからね」

女医さんは、いとも冷酷な声で、突き放すように宣言しました。あたしは、返事どころではありません。こらえるのにいっしょうけんめいでした。でも、下半身に力を入れすぎたのか、少しもらしてしまいました。

「出ちゃったわ。すこし……」

さすがのあたしも、ペソをかい、涙声で訴えました。

「あら、まだ三分もたっていないのよ。だめね。それに、診察台までよこしちゃって。じゃあ、お手伝いしてあげましょうね」

女医さんは、脱脂綿の大きな塊をくるくるとまるめて、ぐいぐいと押し込み、太い綿棒でしっかりと栓をしてくれました。

あたしは、ひざ小僧をかかえ、お尻を高々

と盛りあげた姿勢で、反射的に何度かうめきながら、下腹に力を入れました。でも、がっかりと栓をせんされているので、むなしもがきに終わるのでした。

十分余りの間に、この発作はつさに似た反射運動を数回、あたしは繰り返しました。息もたえだえで、全身汗びっしょりでした。はじめは苦痛で不快な気持ちも、夢中で呻う



吟ぎんしている間に、いつのまにやら、名状しがたい恍惚とした快感の極致に変わっていたのです。子供を生む時も、このような苦痛を味わうのかなと、なんとなく考え、女の生理の悲しさとうれしさを痛感してもいたのです。その時、あたしの苦痛のなかの快感をせきとめていた栓せんが、さっとはずされ、お尻の下に便器が挿し込まれました。

ほっと大きく吐息をつくと同時に、シャーッと勢いよく、病の源泉は体外へほとばしり出たのでした。

ふたたび、あたしは、あの名状しがたい恍惚感におぼれて行ったのです。

「どう。これでスッとしたでしょう」

女医さんは優しい手つきで、あたしのしものよこれを始末してくれながら、微笑しました。あたしは、母親に甘える赤ん坊のような気持ちになって、素直にうなずきました。

「あなたは便秘症ですからね。時々、お浣腸しにいらしゃい。じょうずにやってあげますからね。治療代なんていらなわ。無料サービスよ。きょうはゆっくりしてお行きなさいよ、何かおいしいものでもご馳走ちそうしてあげますわ。だって、あたし、あなたのような娘さんが好きなんですから、お友だちになって

くださいね」

ぶっきらぼうなものの言い方のなかに、優しきと好意がこもっているのを感じ取ったので、あたしは思わず承知してしまいました。「じゃ、指切りよ」あたしの指と女医さんの指は、誓いの心を込めてからみ合いました。

破滅へのワナ

あたしはとても巧みに、礼子と明子と女医の知子^{ともこ}の間を、あぶないバランスを保って立ちまわり続けました。あたしの複雑きわまる生理と心理は、同時に、これらの異なる欲求を持つ三人の女性を要求したのです。でも、いつまでも三人に、この関係を隠しとおすことはできませんでした。

明子と知子のふたりが、別々の日にあたしのアパートをたずね、それぞれ、礼子を通して知り合いになっていたのです。

そのことはうすうす承知しておりましたが、それでもずぶとく知らん顔の半兵衛をきめ込んでいたのですけど、前にも言いましたとおり、なんだか近ごろ、変な予感がしてしようなないんですよ。

今夜、あたしは、女医の知子の家へ来るように誘われたのです。アパートへ帰ってみて

も礼子は不在だし、明子のところへ電話をかけてみましたが、彼女も留守なのです。

現在のところでは、単なる想像なんですけれども、たぶん、あたしに、それぞれ裏切られた三人の女たちは、そのうっぶんを晴らすために、共謀してワナにかける手はずをしているのだらうと思われるのです。

知子の家へ行ったらあたしは、半殺しの目に合わされる恐れがあります。礼子は、あたしをさかさづりにしてメチャメチャに鞭打つでしょう。明子は泣きながら、ところきわらずかみついてくるでしょう。そして知子は、あたしをカチカチ山のタヌキみたいに宙づりにして、トウガラシやカラシの汁を直腸に注入するかも知れません。

けれどもあたしは、行かねばならないのです。あたしは、あの三人の女性、三人の恋人から離れることはできません。三人とも、同じ程度に強く愛しているのです。彼女たちを失うことは、死ねというのと同じことです。

それに、あたしの性癖を、今夜こそしっかりと確かめてみたいのです。今夜の行動が、あたしの今後の進むべき道を明白に示してくれるような気がしてならないのです。

それは、はたして、あたしがサジスチンな

元東京中野病院外科部長 上谷文一著

慢性淋疾短期根治

★新薬盲信の害即ち慢性淋疾の本態尿道側管淋の病理を明らかにし側管壁に生成される防壁の為薬剤は菌に到達不能となり根治至難再発する理由★現行全療法の慢性淋根治至難の理由★難治淋を一回淋糸消滅十日以内絶対根治の合理的無痛無害直接殺菌の一方法説明す★全国根治患者礼状集

送料共百円

発行 東京都中野区宮園通り四の五

上谷外科医院

発売 東京都中野駅前20番地(南口大通百米左側) 宮園書店

のかどうか、あるいはひょっとするとマゾヒストなのか、それとも、ノーマルな生活を人妻として送ることができるかどうか、これらのすべてを賭けてみるつもりなのです。

あたしは、愛用の黒パンティーに黒ブラジャー、黒いストッキングを身につけ、その上からコートをはおりました。手には、しなやかで鋭い乗馬鞭を握りしめました。この扮装が一番好きなのです。

黒い魔女、サジスチンとしての典型的なスタイルで、これから、いよいよ、新しい関係の中へ勇敢に飛び込んで行きます。そのあとのことは神様だけがご存知のことです。

火の鞭狂うとき

真野 麗

古正英生・え

死のプロローグ

鹿火矢、ということばを諸君はごぞんじだろうか。

むかし、アイヌの先住者たちが、北海道の山野を駆けて、狩猟をこととしていたころ、かれらは、シカを射るのに、火を点じた矢を使った。その矢を「鹿火矢」とよんだのだ。

アイヌの子として生まれた河西景太は、幼時から、祖父や曾祖父の自慢ばなしに、この鹿火矢のことを——鹿火矢をもってしたシカ狩りのことを、いくどとなくきかされた。

景太は子供ごろに、それをすばらしいと思った。かれは、自分を狩りの主人公にし



て、そのシカ狩りの光景をあれこれと空想した。それは空想だけにかれのこのみのままに発展した。

広漠たる原野のやみをぬって、一頭のシカがひたばしりに走っている。

景太は、愛弓に火矢をつがえ、シカをめがけて、ひょうとばかりに射放つ。

やみのなかに、赤くメラメラと燃えながら、宙をかける火。

矢はみごとにシカにあたる。

と、そこがひとところ明るくなって、ひきしまった皮膚に、のぶかくも矢を突きさされ、草のうえに倒れ伏した若者のすがたが……。

矢キズからは、赤い毛糸をひきだすように、ドクドクと血が流れてる。

七転八倒して、もがきくるしむシカ。そして、苦しみのはては死ぬ。

——こうしたさまが、さながら映画の画面のように、いきいきとあざやかに、景太の脳裏にえがかれているのだ。



ことに、そのうちの、宙をとぶ火矢と、シカの苦悶のさまを空想するとき、かれは、からだじゅうがうずきだすような、ふしぎな快感をおぼえた。

そしてこの空想は、成長するとともにつよさをましていったかれの嗜虐性と、みごとに結びついたようであった。

炎の中で

戦後も五年をへて、日本もようやくおちつきかけていた。その年の秋――。

景太は二十五歳、すでに戦前から東京に出ていたかれは、戦後の混乱期に大きなヤミ商売をやったというけし、その金をモトデにかなり手広く印刷工場を営んでいたのだが、そのころ、大きく仕事をうけおっていた得意先の出版社がつぎつぎとつぶれ、印刷代金の回収が大半不能となったため、工場は倒産寸前になった。

十数人の職工たちは、社長の景太に、毎日のように給料の支払いを迫った。が、だめとわかると、いっせいにやめてしまった。

景太は工場を閉じ、阿佐ガ谷の自宅にひきこもって、イライラと日を送っていた。

が、かれにはたったひとつの鬱のやり場があった。それは、同棲す

うしろを向いた白い女体の背に、臀に、脚に、赤い鞭は激しく、いつ果てるともなく狂い回った!

る愛人ユカリにたいする鞭打^{むち}だった。

ユカリは二十二歳、目元と口元のあたりにまだ幼げなところをのこした丸顔、上半身はほっそりとしているが、ヒップのムックリと発達した、いわゆる蜂腰^{はちこし}の、景太のこのみのからだつき。

彼女はとりわけて被虐をよろこぶというのではないが、景太にべたぼれなので、かれの鞭を甘受しているふうだった。

その夜も景太は、階下の寝室で、ベッドのうえにうつぶせに縛りつけたユカリのからだに、鞭をふりおろしはじめていた。

「ユカ！ ゆくゾ！」

一鞭あげるごとに、景太はそうさけぶ。威嚇^{いかく}だった。威かくにふさわしい底力のこもった声だった。

そうすると、ユカリのからだは、いつもピクリとけいれんする。

しなやかな、うすみず色のネグリジェのすそは、肩胛骨^{けんこうこつ}のあたりまでまくりあげられ、ユカリの背や臀が、スタンドの光に、白くなまめかしくかがやいている。

わきにたてた大きな三面鏡がまた、彼女のはだかを吸いにとって……。
びゅーッ……。

景太の鞭がうなりをたてて、ユカリの臀をななめにムチは、きょうは、走い血潮の色に染まった竹鞭だ。

このときの景太は、鞭にすべてを賭^かけている。鞭は、かれの性器だった。女体を攻撃し、征服する性器なのだ。

「ソレ、いくゾー」

「また、いくゾー」

鞭は容赦なく、つぎつぎと追い打ちをかける。
情け無用の鞭……。

ユカリは眉^{まゆ}をひそめ、口をゆがめて、苦痛をこらえている表情だ。広い庭のここから、虫の音がきこえてくる。もう秋もおわりの、ほそぼそとしたその音は、ユカリのたえだえのうめきにも似て、力なかった。

と、ふと、虫の音がハタととまった。

瞬間、景太は、

「火事だー」

とさけぶ人の声をきいた。

かれはすぐ、庭に面したガラス戸のカーテンをひきあげた。

外はいちめんに朱^{あか}に染まっている。

「近いゾ」

ガラス戸を押して、テラスに走りでた。

とたんにむっと鼻口^{びこう}を圧する激しい熱風。火はすぐ隣室まで燃えて来ているのだ。

「たいへんだー」

と景太は部屋にかけもどった。手にした鞭が、火の粉をかぶったのか、先端からメラメラと炎をふきだしている。

そのさまは、瞬間、空想の中での鹿火矢を景太に思いおこさせた。

かれはおもわず鞭をふりあげていた。

「ユカ、うちが火事だ。早く逃げなきゃ」

早口にいいながら。ことばとははんたいに、燃える鞭をユカリのうえにびゅっと走らせた。

が、彼女のからだは、こんどはすこしも動^{どう}じなかった。

「いいのよ」

とユカリはおちついた声でいった。



「火事はあたしのやったことなの。さっきここへ来るまえに、物置きへ火をつけておいたンです」
「な、なぜ、そんなことしたンだ？」
「だって、あたしのからだはもうダメになってるンです。あなただって……もう事業は再建のみこみがないンでしょう。だから……いっしょに死のうと思って……」
いうと、そのままがっくりとなった。けむりのために窒息したらしい。

そのときにはすでに隣室をなめつくした紅蓮ぐれんの炎は、寝室に襲いはじめ、もうもうたる黒煙が室内に充満していた。
景太は、からだじゅう焼けるような熱さと、息ぐるしさにたえなから、夢中で、ユカリを縛ったなわを解きにかかった。
が、あわてているせいか、堅くしばったなわは、容易に解けない。
——だめだ。ぐずぐずしていると、おれも死んでしまう。
そう思った景太は、さっとテラスにとびだすと、庭をよこぎって、道路にむかっていっさんに逃げ走った。

ソドムの獄

家は全焼し、ユカリは黒焦げの死体となっていた。

景太は、顔の右半面、見るも醜く火傷した。

警察で現場検証の結果、明らかに放火と断定され、景太の家に三百万円の火災保険がかけられていたことなどから、かれは一応、放火容疑で警察に留置された。

また、ユカリの死体の状況に不審な点があるとみとめられ、かれに殺人容疑もかかっていた。

もちろん、景太は、その両方ともに否定した。そして取り調べの末、放火はかれが犯人でないことは判明したが、殺人容疑のほうは晴れなかった。

——しかたがない。考えようによっては、おれが殺したものかもしれないから、罪を受けよう。

と、景太はこう心をきめて、ユカリ殺人をみとめ、獄に下った。懲役七年の刑だった。

社会で印刷業を営んでいたということで、景太は刑務所内の印刷工場に配置された。あたえられた職場は鑄造であった。

二年ほどの後に、景太は三級に昇進するとともに、鑄造の責任者となった。

その年の暮れちかいある日の午後のこと——。

景太が昼の食事をおわったみちたりた気分、手回しの鑄造機をコトコトと回しているとき、工場の入り口の戸があいて、新入らしい受刑者が五人、担当(看守)につれられてはいってきた。

まだ「社会」のにおいを多分に残っているような新入者をみると、景太は、いつものことながら、胸のおどるような感慨をおぼえる。

かれが機械のハンドルを回しながら、チラリチラリとそのほうをみまもっているうちに、まもなく、五人の新入者は、宇多川という副担当にみちびかれて、鑄造場に来た。

この工場に回された新入者は、すべてひとまず鑄造場におかれ、やがて、文選場なり製本場なりの職場に配置されるのが、定めとなっているのだ。

「親方、頼むゾ」

宇多川副担当が、景太にそういいおいて去っていったあと、景太は鑄造機を、助手の吉田に託して、新入者の前に立ったが、ふと、そのなかのひとりを見たとき、一瞬、激しい衝撃に発止！ とうたれた。

それは、目のさめるような美少年なのだ。光るような雪白の膚、敏捷そうな、くりっとつづらな目、くっきりとあざやかな桃色のくちびるが、とくに印象的だった。

同性にたいして、恋に似たこのような気もちを感じたことは、景太は生まれてはじめてだった。機会的同性愛におちいりやすい刑務所内にいても、いままでそんなことはなかったのに……。

やがて景太は、五人をヤスリ場の机の前にすわらせて、鑄造された活字の仕上げ法を教えはじめたが、心はおちつかなかった。口と手は皆に教えていたが、心はかの美しいわかものに教えていた。

新入者たちは、あくる日から、ひとりずつ別の職場へ配置されていた。その若者だけが、本担当の指示のないままに、三日間、ヤスリ場にすわっていた。その間、景太は、かれにじゅうぶん親近すること

ができた。

若者は藤間純といい、二十一歳で、住居は横浜の山下町と告げた。

「ヤマ（犯罪）は？」

「スリです」

ハッキリと純は答えた。

「常習だったんだね」

「ええ、常習だったんです」

「どうしてスリなんかやったの？」

そんなことはきいていけないと思いながら、ことばのはずみで、景太の口をすべりだしていた。

一瞬、純はさっとほおを染めた。それは罪の自責による羞恥というよりも、なにかアブチックなかけをひそめた羞恥のように、景太には感じられた。そして、その恥じらいを含んだ純の顔のなまめかしさ！

景太はまたしても、ぐいと心をつかまれ、ゆすぶられた。

「そのわけは、いまはいえませんが……そのうちおはなしします」
ややあって、純がいった。

「いいんだよ、そんなことはどうでも」

「いいえ、親方にはおはなししたいんです。……ねえ、親方、ぼくをこの鑄造場に、ずっとおいてもらえないでしょうか？」

「それはぼくにはきめられないよ。……ここにいたいのか？」

「いたいです」

「ぼくもきみにいてもらいたいのか？」

助手の吉田は、仕事の用で機械場（輪転機）へ出かけていた。

景太は担当台のほうへ背をそむけて、純に仕事を教えているふうにみせかけながら、あたりに人のいないのをさいわい、このようなこと

ばで、純と、たがいの心を打ち明けあった。

が、ふたりのねがいはいかなわず、その翌日、純は文選場に配置されていった。

わかものを打つ

純の秀抜な美貌は、すでに工場じゅうで評判になっていた。一、二級者たちが、スキをみては、純にちかつこうとしているようすが、ありありと景太にうかがわれる。

景太は心がおだやかでなかった。

が、純は、文選場に移ってから、活字の注文とか、ヤスリを借りとか、なんとか鑄造の用をひきうけては、景太のところへ出かけてくる。

そして、鑄造機を回している景太のそばに立って、急ぎの活字をまわっているふうにながら、景太と語らっていくのだ。

いつのまにか、「鑄造の河西は新入の藤間をアンコにしている」というわさが、工場内にひろがっていた。

顔の半面がグロテスクなまでに醜くなっている景太に、美貌な純が心をひかれているふうなのは、純のなかの女性的なものが、景太の醜貌にたいして、マゾ的な魅力をおぼえるのかもしれない。……

その年も明けて、正月中ごろのよく晴れた日であった。

その日の午後、景太は、本担当から、エントツ掃除を命じられた。

エントツ掃除は、この工場内でタッタひとつの火を使う仕事である鑄造の役なのだ。また、それは「役得」でもあった。というのは、掃除中は、屋根の上からあこがれの「社会」の風景を、目のあたりに望

見することができからだ。

景太は、助手の吉田に本担の命を伝え、ふたりでエントツ掃除の用意をはじめた。

と、このとき、面会所の担当がはいってきて、吉田に面会人がまっていることを知らせた。吉田はアタフタと、その担当にともなわれて、工場を出ていった。

瞬間、景太の胸裏に、天来のようにビーンと鳴るものがあつた。

——そうだ、藤間に掃除を手伝わせよう。

景太はさっそく、本担当にそのことを申し出て、承諾を得た。

鼻・口をてぬぐいでマスクし、ズボンのすそをからげた景太と純は、宇多川副担当に裏口のカギをあけてもらい、庭へ出た。

景太は、エントツの下に、たずさえてきたハシゴをたてかけた。

「藤間、きみ先へ上れよ」

いうと、純は、慣れた手付きでハシゴに手をかけ、スルスルとのぼりはじめる。すぐあとから、景太は上っていった。

景太の目の前で、純の格好のよい豊かな尻が、前後に左右にゆれうごく。

瞬間、景太の身内に、いままで忘れていた欲望が、勃然とつきあげてきた。

——この尻を打ちたい！ 思いきり鞭打ってみたい！

ふたりはたちまちにして屋根のうえに上った。

純はやくも、刑務所の高い石塀ごしに見える「社会」の風景に目をうつしている。

日に光る家々のイラカ。二階家のらんかん干されている赤い布団。ほしもの台に動いている若い女。その下の細い道路を駆けていく

少年……

が、景太には、いつもは心をおどらせながらみとれるそれらの風景も、きょうは目をかすめたきりで、焦点は、純の均齊のとれたからだの線にすえられていた。

景太は、そつと下のほうをうかがった。看守役の宇多川副担当は、気をきかせてか、こっちに背をみせたまま、あちこちと歩きまわったり、体操のまねをしたりしている。

「藤間君……」

低い声でそう呼ぶと、景太はいきなり純の腰に手をかけた。その指先がひきしまった皮膚にくいいる。

「頼みがある。おれにきみのからだを打たせてもらいたいんだ。憎くてそうするんじゃない、好きだから、好きでたまらないから、打ちたいんだ」

うめくようにさういうと、純はすぐ、わかっていますという表情で、コックリした。

景太もそれにこたえてうなずくと、エントツ掃除用ブラシの長い竹の柄をさか手にもった。

びゅーん……

竹竿は風をきって純の尻ぺたにとんだ。

純の双手が、頭のうえの屋根ヒサシをむずとつかんだ。

つづいて二度、三度、四度と、竹竿は純の若々しいからだを責める。

景太にとって、いまは天地になにもものなかった。あるのは、ただ、おのが手にしたムチと、あいてのうつそみの肉体だけだった。



おれはアイヌ

この日以来、景太の体内にプスプスとくすぶっていたサドの欲望が、ふたたび、かっかっとなえあがりはじめた。

工場で働いているときでも、景太はふっと、純を鞭打ちたい欲求にはげしくおそわれる。舎房にもどって、ベッドのなかでみる夢は、純にたいする強烈な責めのそれであった。ひとりの遂情も、純の一糸まとわぬ裸形への鞭打を幻想しておこなわれた。

二月はじめのひどく寒いある朝のことであった。

景太は、鑄造機の釜のなかの堅くかたまったナマリを溶かすために、釜下へしきりにタキギをくべていた。

細く割ったタキギは、おもしろいように燃える。暖かい。

「冬は鑄造の天国」と、ほかの職場の受刑者たちからうらやましがられるゆえんだ。

「親方、おはようございます」

そう声をかけながら、純が景太のそばへやってきた。手には注文活字をしるしたメモの紙片をもっている。

寒くなってから、鑄造で、火を使っているときには、ほかの職場の責任者たちが用をかこつけては暖まりにくるので、それを遠慮するか、純はめったに景太のところに現われなかった。たまに来て、事件だけをいって、すぐに戻ってしまう。

きょうのようなことはめずらしかった。

「すこしあたっていきたまえ」

景太はそう純にいいながら、受刑者の本能でチラッと担当台のほうをうかがった。

床から二メートルほど高い担当台では本担と副担とが、なにやらしきりに話しあっている。

純は、景太に並んで火のそばにたちながら、

「親方はおくにはどこなんです？ わりと寒がらないようですが」

いままでいちどもきかなかったことをたずねた。

「北海道だよ。あすこの旭川部落でとれたといえば、ぼくがなんだかわかるだろう？」

「ああ、そうですか」

純は、わかったような、わからないような顔をした。

「そうなんだ」

いってしまうと、景太は急に劣等感に身を締めつけられるのを覚えた。手は長いタキギを釜下におしこもうとしていた。が、内部がせまいため、タキギはポロリと焚き口をこぼれて、床におちた。

景太はそれを拾いあげた。タキギはすでに半ば以上に火がついていて、メラメラと赤い炎をふいていた。

「そうなんだ！」

と景太はタキギを握りしめながら、またおなじことばをくりかえし

た。

「おれはね、この鹿火矢で教育されてきたアイヌなんだよ」

いうや、タキギをびゅっと横に振った。それには、内地人にたいする景太の反抗のすべてがこめられていた。

あっ！ とさけんで、純は身をよけようとしたが、そのはずみに、タキギは純の二の腕のあたりを強く打った。

「痛いッ」

純は悲鳴をあげて逃げかけた。それを追って、景太のタキギが、また相手の肩口を一撃した。

純はその場に倒れ伏した。

騒ぎをききつけた副担当がかけつけてきた。

「バカッ、なにをするんだ」

副担はどなった。それは、仕事にまじめな景太に好感をもっているかれの愛の叱咤のようでもあった。

白い女体と赤い鞭と

それから五年をすぎた秋のある日の朝、景太は、東京P刑務所を釈放された。

すでに三十歳を二年こえ、いわゆる、*「懲役太り」*で肉のついたからだは、じゅうぶんに中年の貫禄をみせていた。

が、刑務所の堀沿いに裏道を歩きだした景太の足は、なにか地についていない。目につくものなにもかもがめずらしく、別世界をさまよっているような気がするのだ。

ものの五分ほど歩いたころ、ふと、景太はたちどまった。とある

二階家の玄関のドアがあいていて、中でひとりの若い女が、こっちにうしろをみせてタタキを掃いているのだが、その尻が目についたのだ。

——ヤケに発達してやがる。

そう思いながら、かれはじいーっとみまもった。

女がひょいとふりかえった。みおぼえのある顔だ。景太はおもわず、かるく黙礼した。

と、女も頭をさげて、

「あの、どちらさまでしょうか？」

「いやア、名のるほどの者じゃありませんが……」

いいながら、景太はようやく思ひだした。この家は、所内の工場でのエントツ掃除のとき、屋根のうえからかれがいつもながめていた、塀外の一軒なのだ。そしてこの女は、この家の女中らしいのだ。

「ご主人はおいでですか？」

「奥さまはいまお風呂にはいっていらっしやいますから、中でちょっとおまちくださいまし」

こう女中にいわれて、景太は玄関の中にはいった。

女中は、入浴中の女主人に知らせるのだろう、小走りに奥のほうへいそいでいく。

景太はドアのカケガネをおろすと、すぐ目についたのが、ゲタ箱のわきにつるしてあった柄の長いクツペラだ。かれにとって、炎の色を思ひださせる赤いクツペラだ。

それを手にとると、そのまま上がりカマチをあがって、廊下を奥へ進む。つきあたって右へ曲がると、さっきの女中が、浴室らしいガラス障子を細目にあけて、中にむかってなにかしゃべっていた。

いきなり、景太の手のクツペラが、女中の臀をたたきつけた。

あっとさけんで女中はふりむいたが、そこに景太の姿をみとめると、また驚愕の声をあげながら、中へ逃げこんだ。

景太はそのまま浴室にふみこんだが、とたん、白々と光る女体が、かれの目を射た。

二十七、八、二号らしいからだつきの女が、壁を背に、女中とならんで、おびえたような表情でつたっている。

「なにもしやしません」

と景太はいった。

「いまやったように、あんたがたをこれで打つだけです」

いいながら、ふたりの女にジリジリと進みよった。

恐怖のために、声も出ないようすの女たち。

「では打つゾ！」

景太の口から、めずらしく、まえぶれの威嚇のことはがとびだした。びゅッ……。

火の色の鞭が宙で鳴ったかとみえたが、次の瞬間には、ふたりの女をとともどもに斜めに切っていた。

つづいてまた一撃、またまた一撃……。そのたびに、きいーッと悲鳴をあげる女たち。

「うしろをむけ！」と景太はどなった。

ふたりがからだを裏返すと、景太の鞭はいっそう激しく、相手の背を、臀を、脚を、責めたてる。白い女体のうえに赤い鞭は、いつはてようともなく狂いまわっていた。

その夜、景太は藤間純の家にほど近い横浜の海に入水して果てた。

美女受難シーン (テレビ番組から)

テレビをみてみると、意外に思われるほど責め場があらわれ、ドキリとすることが多い。ことに、こどもむけ番組のドラマやフィルムに、すてがたいシーンが多くみられる。八月の午前ちゅう、フジテレビでは夏休み子ども映画大会と題して、四本の劇映画を毎日二時間にわたり放映していたが、そのなかからみかけた印象的な責め場をあげてみると――

まず『快傑鷹の羽』。これはチャンバラ時代もので、『鷹の羽』という和製ロビンフッドが登場し、城の悪家老や山賊どもを相手に正義の剣をふるう。

この映画では、城主の美しいお姫さまと、ちいさい若君が、つねに危機にさらされる。ほとんど毎回といっていいほど、悪者どもにつかまり、しばられたり、ムチうたれたりする。

山賊小屋の柱に、うしろ手のまま、ぐるぐる巻きに緊縛

されて、観念の目をしていい姫君さまのポーズには、なかなかの被虐美がある。また、敵方の城主にとらわれ、城中の庭の木に立ったまましばりつけられて、われ竹のムチや、弓の折れで打たれたりする。

このお姫さまにふんする女優(野口ふみえ)が愛らしく、現代的なまるいひとみをもつ娘なので、しばられたポーズにもムードがあって美しい。

また『ピカ助捕物帳』というフィルム番組にも、若い女の受難場面が多くあらわれる。ピカ助というのは少年岡っぴきのなまえで、その姉がよく悪者たちに誘拐され、しばられる。

八月三十日に放送した回には、十四、五歳の清純な美少女の責め場がみられた。成熟した娘とはちがい、まだ少女のからだのしぼられた姿は、とくにいたいたしく、おびえる表情にも、かれんなふぜいがあるもので、この種のムード

をこのむファンは多い。

うしろ手の縄じりをひかれてよろめいたり、暗い山小屋のなかの柱にしばりつけられたり、美少女被虐の場面は、珍重でもある。なぜなら、テレビのほかにちよっとお目にかかれないからである。

また、NETテレビでも八月ちゅう、おなじような番組を放送していたが、そのなかでも、もっとも責めシーンの多いのが『アララの使者』という現代活劇もの。

なにしろ、毎日毎回かならずといっても誇張ではなく、若い女が誘惑され、人質にされ、いじめられる。とにかく、美女受難のシーンが絶えることなく連続する。

あやしげな邪教の祭だんの前にしばりつけられたいけにえの美女ふたり。そのふたりの頭上から、数本の剣がぐるぐる回転しながらおりてきて、アワヤ、という場面。

また、地下室にとじこめられた娘が、なんとかうしろ手の縄をとこうと、必死にもがく場面。

あるいは、オトリのために河原へひきだされ、草の上のしばられたままねかされて、悲鳴をあげながら、イモムシのようにもがく娘。

とにかく映画はうごくから、恐怖の表情、縄目のあいだの乳ぶさのふくらみがゆれるのもわかり、サディスチックな感興も、また、ひとしおである。

処女責め

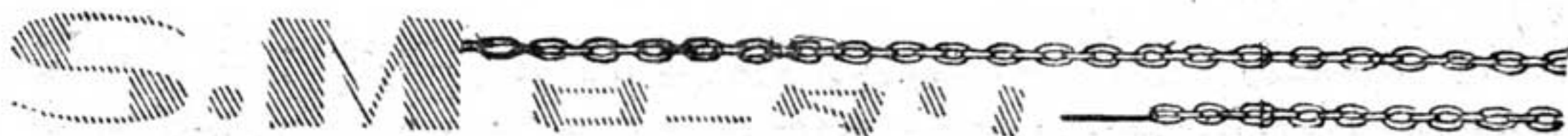
(『週刊新潮』から)

『週刊新潮』に新連載の時代小説、山田風太郎作『外道忍法帳』は、冒頭からサディスチックな場面があらわれて興味がある。

この小説はキリシタン迫害に伝奇的な構成をくわえたも

のらしく、したがって、責め場も必然的に登場してくる。というわけ。

江戸小日向のキリシタン牢屋敷へ、モニカお京という美しい処女の信徒がおくられてくる。



娘は全裸にされ、ふたつの卓に上半身と下肢とをそれぞれあおむけにしばりつけられている。ほそい胴が、あいだの空間に弓のごとく浮き、ふくよかな乳ぶさはかすかにいきづいていて、という責められポーズ。

さて、この娘の女陰のなかには、一コの鈴がおしこめら

れていて、さらにその鈴には、巨額の黄金のかくし場所が秘められている設定も気をもませる。

ころびキリシタンの沢野忠庵が、しばりつけた娘の体内から、その鈴をとりだすというリョウ奇的シーンもあり、こんごの展開がたのしめそうである。

火あぶりの景 (映画「七人の騎士」から)

東映の時代劇映画「七人の騎士」にでてくる責めシーンは、ちかごろの映画のなかではみごたえのあるもの。

この映画は三部作となっており、すでに完結編部までが封切られているが、一部二部合わせて、美女の受難場面は三度ほどでてくる。

はじめは、あらあらしい野武士のむれにとらわれた若い女たちが、集団的にしぼられるのだが、これはどうもいただけない。アブッけのない、だらしない縄のかけかたで、なんの感興もわかない。二度めは、悪領主のけらいにとらわれた娘が、サルグツ

ワをかまされて、山中のふとい木にしばりつけられるのだが、緊縛感がたりず、サド・シーンとしてはB級といつて



(写真は東映「七人の騎士」の一シーン)

よいだろう。

さて、三度めには、ふたりの美女と、ひとりの若者がしぼられる。みどころは、このシーンで、かなりリアルにしばってあるために、悲そう感がただよ。

悪領主にとらわれた三人は、しばられたまま馬にのせられて、刑場にむかうのだが、このとき、馬の背に両またをひらいてのせられている娘ふたりのポーズに、かつてない刺激的な被虐美の味がある。うしろ手首の縄目の、ぎっちりしばってあるのがみえてサド派にはゾクリとくる。

いよいよ馬は刑場について、三人は、ハリツケにされる。広い原に白木の十字架が三本ならんでたつ。

中央に若者、その左右に娘。かたのごとく左右の手を水平にしばりつけられている。

柱の根もとには、タキギの山がきずかれ、やがて火がつけられる。すなわち、火あぶりの刑である。

この火あぶりシーンは、まずA級と称してよく、黒煙がもうもうとたちのぼり、あまりトリックを感じさせない迫力があつた。したがって、十字架上の三人の苦もんじゆがむ表情にも、演技をこえた真実性があるように思われた。

ただ、さんねんなのは、水平にのぼしてしばりつけられた左右の手首の縄目が、どうもなまぬるいこと。力をいれてひけば、ぬけてしまいうような縄のかけかたである。

しかし、一般の観客に劇的興奮をあたえるのには、これでじゅうぶんなのだらう。

「はたして三人の運命は？」というところで、この第二部は終わるわけである。



昼も夜も肉にしがれる

三 吟 本 根

家族風呂で

肉のおねえさま

劇団『あざみ』を、巡業先からズラかった
ぼくと万里子は、F温泉にやってきた。

さて、こうやって、ふたりっきりにはなっ
たものの、あしたからの生活の設計があるわ
けではなかった。

なにもなかった。ふりだしが、行きどまり

みたいなものだった。

ただ、ふたりにゆるされているのは、つか
のまの肉のしびれだけだった。

「しびれようよ、何もかもわすれて——」
そうだ。

あしたのことは考えまい。しびれて、しび
れて、しびれて、しびれぬくのだ。

そして、肉がバカみたいになって、しびれ
ることさえできなくなったら、そんなときはス
イミン剤でものんじまえばいいんだ。

万里子もそのことには異存がなかった。

「なんでもやったげるわ。ジミイ」

と、万里子はいった。

「肉のおねえさまになって……」

と、ぼくはいった。

話のわかる肉のおねえさまがいて、ぼくを
徹底的にやつつけてくれないかなあ、という
夢が、ちいさいときからあった。

その夢を、ぼくはいま、万里子にかなえて
もらおうというのだった。



『あざみ』では、

万里子は、一座の看板女優、そしてぼくは、しがない道具方だった。

それがいま、肉の友となつてむすばれるのだ。

「万里子さん、これをつかつて」

ぼくは、劇団をスラかるときスーツケースに入れてきた小道具のムチを、うやうやしく彼女にさしだした。

「ああ、これね」

といって、彼女は、なにもかものみこんだように、ニッコリ笑った。

それから、びゅ

っ、と虚空なら

して、それに素振り

をくれた。

そんな形も、女優だけに堂に入ったものだ。

「すてきッ」

といって、ぼくは、彼女の肉づきのい

い足のあたりにはいつくばると、そのくるぶしに熱っぽくくちびるをおしあてた。

そして、それだけではがまんできなくなつて、そこいらじゅうを、のったりのったリナメあげはじめた。

アゴもはずれよと

「フフ、よしてッ。くすぐったい！」

万里子は、



身をよじらせた。

それでも、ぼくがやめられないものだから、たと足あげて、けるようなしぐさをした。

そして、その足さきは、まさに

ぼくのアゴをけたのだった。

「ぐえッ」

と、おかしい声をだして、ぼくはひっくりかえった。

そして、たまらなくうれしくなり、

「おねえさま。足のさきをぼくの口の中へ入れて……」

アゴもはずれよと、口をあぐり大きくひらいた。

「じゃ、入れるワヨ」

「ウン、入れて……」

ぼくが目をつぶって、期待でドキドキしていると、顔のあたりに、肉がちがついてくるムウッとしたような気配がした。

それから、いきなり足指とおぼしい肉のかたまりが、ぐわあ——と口の中へセリこんできた。

「グ、グエッ、ゲーッ、ガー」

それが、ノドちゃんこのあたりまで押しこまれたので、ぼくは、嘔吐おうとするように全身をケイレンさせ、すっぱい胃液を口の中へ逆流さ

せた。

そして、目には涙がイッパイたまった。

しかし、ぼくの手は、いとおしいもののよう
に、万里子の足をかいこみ、なでさすりなが
ら、もっともとおくへ押しこもうとするの
だった。

肉の慰問使

ふたりは、いつのまにか熱がはいっていた。

万里子は下着一つになり、ぼくはフンドシ裸になった。

まひるの家族風呂ふろは、気が遠くなるほど静かだった。

ふたりの呼吸の音がからみあい、体内の血がごぼっ、ごぼっと音をたてて、あかぐろくふくれあがるのがわかった。



「おのぞみどおりよッ」

いつか、ムチがにぎられていた。

万里子の手には、

ぼくの胴にからんだ。「アッチチチ」

火よりも熱い感触だった。

「さんた……ま・り・あ」

ぼくは、全身を弓のようにそらせ、虚空に

ムチは音をたてて、

「おねえさまッ、本格的ねッ」

思わずさげんだ。

ムチは、い

びしッ、びしッ、とそれが思うツボにキマ

ってくるので、ぼくは、

思わずさげんだ。

ムチは、い

むかってうめいた。

すると、肩のあたりに、ドサリと重みがあった。

彼女が片足をそこへ投げかけたのだ。

それは、ムチの苦痛にやかれているぼくへの、肉の慰問使だった。

ぼくは、片手でそれをかい抱くと、クンクン鼻を鳴らして嗅ぎまわりながら、慰問使の愛をたしかめた。

万里子は、だんだん調子にのってきた。

はじめは、おっかなびっくりだったムチは、しまいには、すすんでぼくの肉をもとめはじめた。

よいよさえた。

万里子はしまいには、ぼくの背中を、ブリッヂをわたるように、ハイヒールのまま渡りながら、ムチをふるった。

打つ者と打たれる者の呼吸が、あんまりピッタリしてきたので、ふたりはいつのまにか泣いていた。

泣きながら、

「おねえさま！」

「ジミイ！」

びれて、しびれて、しびれないことには、気がすまなかったのだ。

あすなきしびれ

つめたいタイルの感触が、ぼくの意識をよびさました。

目をひらくと、

と呼び
かわし、
合い手のよう
に、ムチが鳴った。

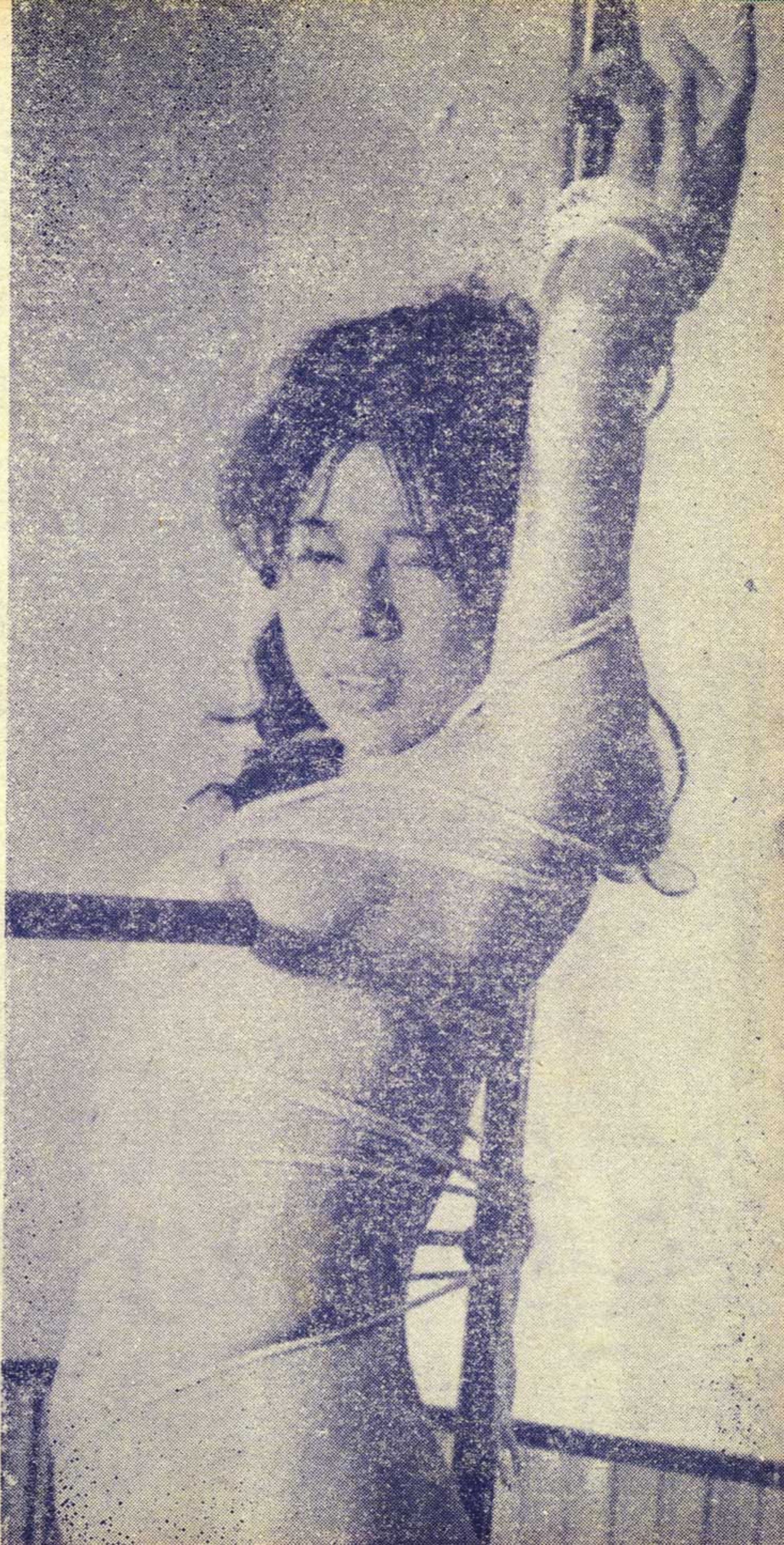
あすのない恋だから、最後の肉のひとカケラまで、し



万里子が、ぼくをまたいだまま立っていた。
二つのもりあがる肉柱がそりたち、その
におやかな起伏のむこう、摩天楼のようなは
るかな高みに、微笑をたたえてぼくを見おろ
す万里子の顔があった。

「気がついたのね。ノドがかわく？」
と、彼女がいった。
「うん」
と、ぼくがこたえた。
「じゃあ、あげるわ」

彼女はそういうと、ウメボシ
のタネをしゃぶりだすように
口をモゴモゴ動かしていた
が、やがて、いっぱ
いたまっ



たツバキを、ジュクジュクとくちびるのあいだからのぞかせた。

「よくって？」

というように――。

ぼくは、あわてて大きく口をひらくと、自分の開いた口が、彼女の口の直下に位置するように、タイルの上でせわしく背中をずらせた。

それにつれて、彼女もぼくをまたいで立たまま、すこしからだを動かした。

「さあ」

「うん」

唾液は、彼女のくちびるからまとめて押し出され、ひとかたまりの粘液となって、そこをはなれると、ぼくにむかって、一直線におちてきた。

ながい、はるかな落下のコースだった。そして、びちゃっ、と音を立てて、うまく、ぼ

くの口の中におさまった。

ぼくは、あわてて、ゴクリとそれをのみこんだ。それから、ふたりは顔を見あわせて、キャッキャッと笑った。

彼女は、笑い声といっしょにぼくの上にくずれ落ちてきた。それから、タイルの上でからみあった。あ

たらしい肉のしびれをもとめるために!!

あすもな

かった。

金も

なかった。

あるの

は肉のし

びれだけ。

棒の歌

女の小荷物

「縛られて、はずかしめられて……」
と女がいった。

百年の

凌辱と責め

苦がおわったあと

のように、息もたえ



だえの調子だった。

それから、うらめしそうに男を見上げて、
いった。

「ひどいことをするのね。あなたという人は——」

「こんな男にだれがした……」

歌の文句をまねながら、男がせせら笑うような調子でいった。

ミカン箱に腰かけ、片足を大きくひざの上にハネあげたにくいポーズだった。

それから、くちやくちゃの「新生」の袋から一本つまみだすと、火をつけてうまそうにけむりを吐きだした。

そんな男の足もとに、女は鉄道便の小荷物のように、縛られたままコロかされていた。

鉄道の荷物だって「取扱注意」の赤札のついたやつがあるのだが、この荷物は、さかさにされようと放りだされようと、下積みになれようと、いっさいお構いなしというガラクタなみの扱いだった。

「これが、三年もつれそったあたしに対するあしらいなの？」

「これが、三年つれそったなさけというものよ」

男は立ち上がった。



このうえ、どうして責めてくれよう、というように、女のまわりをグルグルまわっていたが、

「おお、コレコレ」

昔の捕吏がつかったような木の六尺棒を目にとめ、それをにぎって、ニヤリと笑った。

男は、横ぐわえにしたタバコのけむりをよけながら、その棒を、女の背中とナワのあい

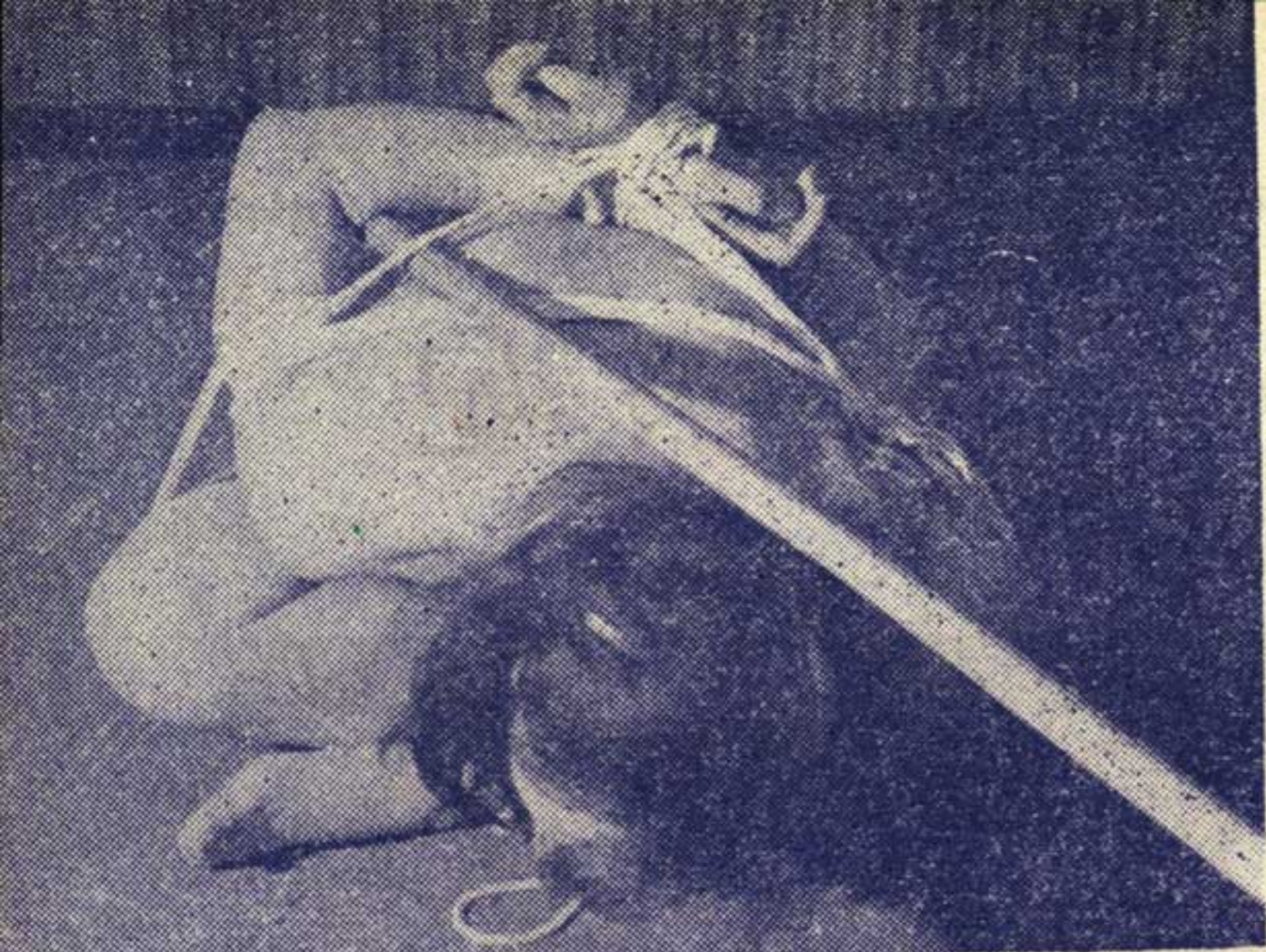
だにさしこむと、ギューツとナワをしぼりあげた。

わめいたり、さけんだりする段階は、すぎていた。

女は、あ、あ、あ、あ——と、しまりのないフヌケ声をだしたけだった。

「はりあいのねえアマだ」

男は苦笑しながら、女の顔に顔をちかつ



け、その髪の毛をさか手につかんで、グイと頭をもちあげた。

それから、目をつぶったままの女の顔へ、ふーッとタバコのけむりをふきかけた。

女はむせもしなかった。

ちよつと顔をしかめただけだった。

もう苦痛に対する反応力さえ、失せてしまっているのだ。



そして、生と死のあいだを、ユーラリ、ユーラリとさまよっているのだった。

狂った女の目

「このヤロー」

男は、いきなり、そんな女の横ッつらを二三ツツはりとばすと、女のからだをひき起こし、ふすまを背にひきすえておいて、そのノ

ド首にぐいと棒の先端をあてがった。

「ヤイ、目をあいておれのツラを見る。もう一度、ワンとかキャンとかいってみるんだ。

いわなきやこれだア」

全身の重みをかけて、棒を突いたからたまらない。

「ギエーッ」

女は、ノドからしほりだすような声をもらった。

そのまま棒がはなれても、しばらく、

「ウッ、ウッ、ウッ」

と、しゃくりあげていたが、急に火がついたようにわめきはじめた。

「もうないッ。どこをどう責められても、出ただけの音いろは出しちゃったわッ。もうないのッ。もうないんだッたらッ」

狂ったのだ、男はとっさにそう思った。

それから、責め道具をおさめると、女にちがついて、その閉じられたまぶたをおしひらき、瞳孔を点検したが、狂った徴候は、なかった。

それから、かれは聞いたのだ。ウワごとともつかず女がいつているのを――。

「ね、あなたのアタシよ。放しちゃいや、放しちゃ！」

デュー大公妃

Captain Circe
drags Lorraine down
to the hold of the
ship over a steep ladder
of human bodies!



続 バス

DUCHESS OF THE BASTILLE

庄政をしいていたバスティーユ大公妃に
対抗して、決然立ち上がったアルゴンの女
城主ロレイヌは、軍資金を敵方から奪おう
と、バスティーユ大公妃の妹カミーユを拉
致したが、逆に、大公妃の奸計にかかっ
て、囚人船で、死の島に送られることにな
った。——というのが、前編のあらすじで
ある。

★

ロレイヌは、囚人船のマストにくくりつ
けられた。

彼女とは別に船底に追い込まれた囚人た

ちには、苛酷な看守が、嗜虐的な本能をうず
うずさせながら待っているのだった。
船倉で、宙づりにされた女囚たちの裸身を
遠慮会釈もなく踏みつけてゆく女看守たちの
無情冷酷さ。

★

一方、拷問室では、マストからおろされた
ロレイヌに対する拷問が始まっていた。
親指縛りでさかさ吊りにされたロレイヌ
は、船底の天井にぶら下げられた。

こうして、囚人船の生活がつづいているう
ちに、ようやく、「死の島」に到着したのだ
った。

★

「死の島」の役人たちは、船の看守たちにも
ましてむごたらしいことが好きという者ぞろ
いだった。
女囚たちは、小馬にされ、女役人たちが、
それにまたがっての交通機関としての役目も
果たさなければならなかった。





head wardness
is impatiently
awaiting their
arrival!

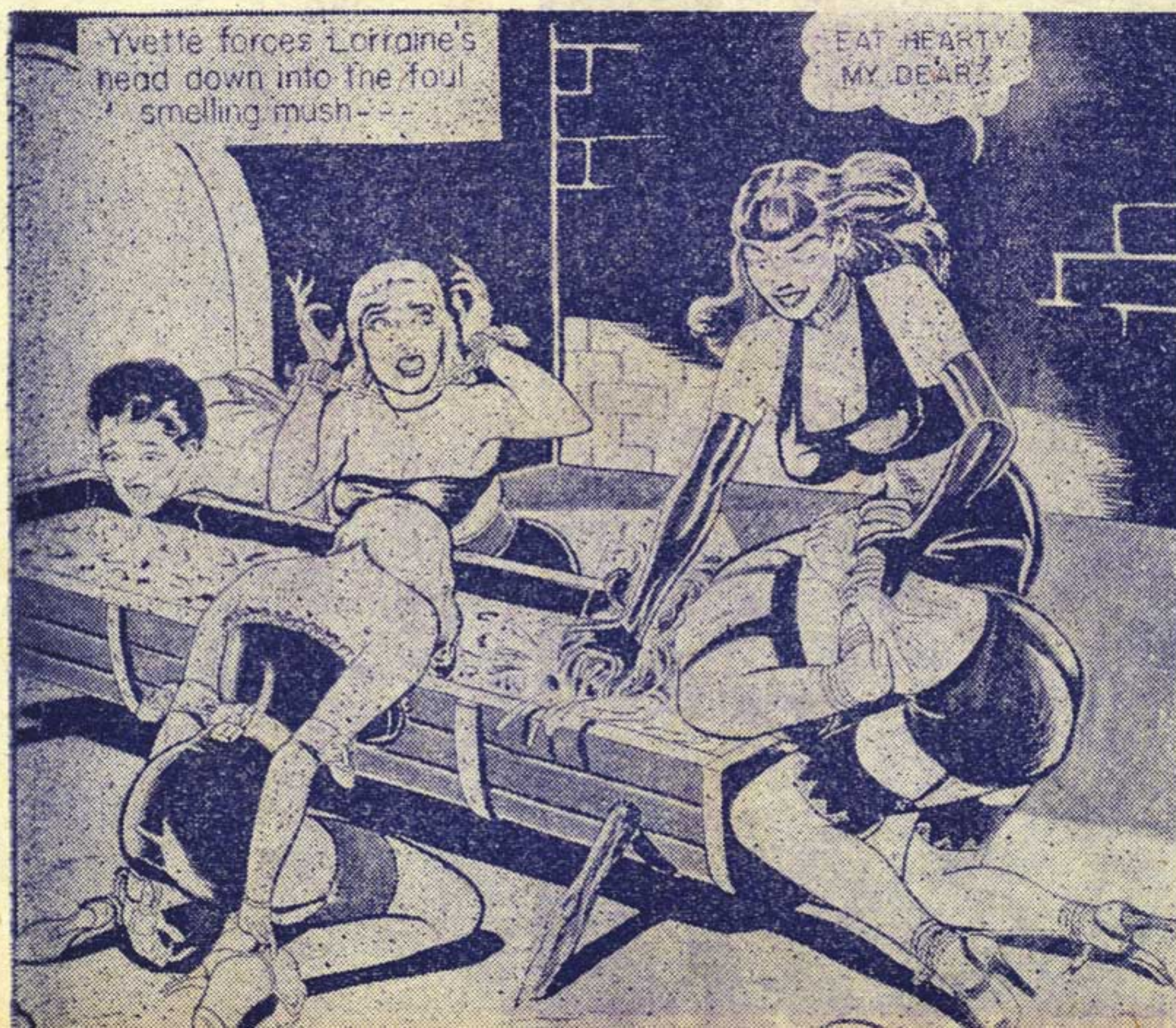
いろいろな形の
拷問具が、ちょっ
とした気まぐれで
用いられた。

ロレイヌも、島
の司令の気まぐれ
から、第一夜を、
こうしてすごさね
ばならなかった。
食事も、家畜な
みだった。ブタな
どに餌を与える長
い餌桶で食べねば
ならなかったから
である。

役人は、悪臭の
するこのおけの中
に、ロレイヌの顔
をつっこんだ。

誇り高いアルゴ
ンの女城主は、い
かに囚人とはなっ
ていても、相手を
許さなかった。

ロレイヌは、女



Yvette forces Lorraine's
head down into the foul
smelling mush---

EAT HEARTY
MY DEAR?

役人に、ツバをはきかけた。それが、彼女の
せいっぱいの反抗だった。

女役人は、黙っているわけはない、「懲戒」
のために、機械責めが待っていた。

そのうえ、見せ物にひきずり出されて、役
人たちの目を楽しませ
ることになったのだっ
た。

★

剣の上を、不自由な
姿勢で越えさせる「剣
の舞い」は、何人かの
女囚を犠牲にした。

見せ物のための訓練
は、なおつづいた。

「闘牛」という見せ物
では、ロレイヌは、頭
に角をつけられて、も
うひとりの女囚と戦わ
された。

相手の女囚は、ロレ
イヌにつき落とされた
ために、無残にムチで
打ち殺された。

the dress. Lorraine is fitted into an outfit,
added with sharp points which force her to
walk stiffly to prevent the prongs from
penetrating. The first ordeal is to be an
obstacle race, with each contestant
tied and bound differently!



★

さらに、司会は、「野馬と女」という見せ
物にロレイヌを出すように命じた。

四頭の野馬に、両手両足を別々に縛られた

ロレイヌ。

囚。
それぞれの馬にしばりつけられた四人の女

彼女たちは、自分につけられたハミを通し
てしか馬をぎよすることができないようにさ



れていた。
乗馬服の女役人が、点検してゆく。
綱がほどかれると、四頭の馬はあばれ始め
た。ロレイヌのからだは、一刻一刻ひきさか
れそうになってゆく。

band together under Lorraine and take over the entire
and several others as hostages! Rejoicing over their
they arm themselves for an attack on Captain Circe's

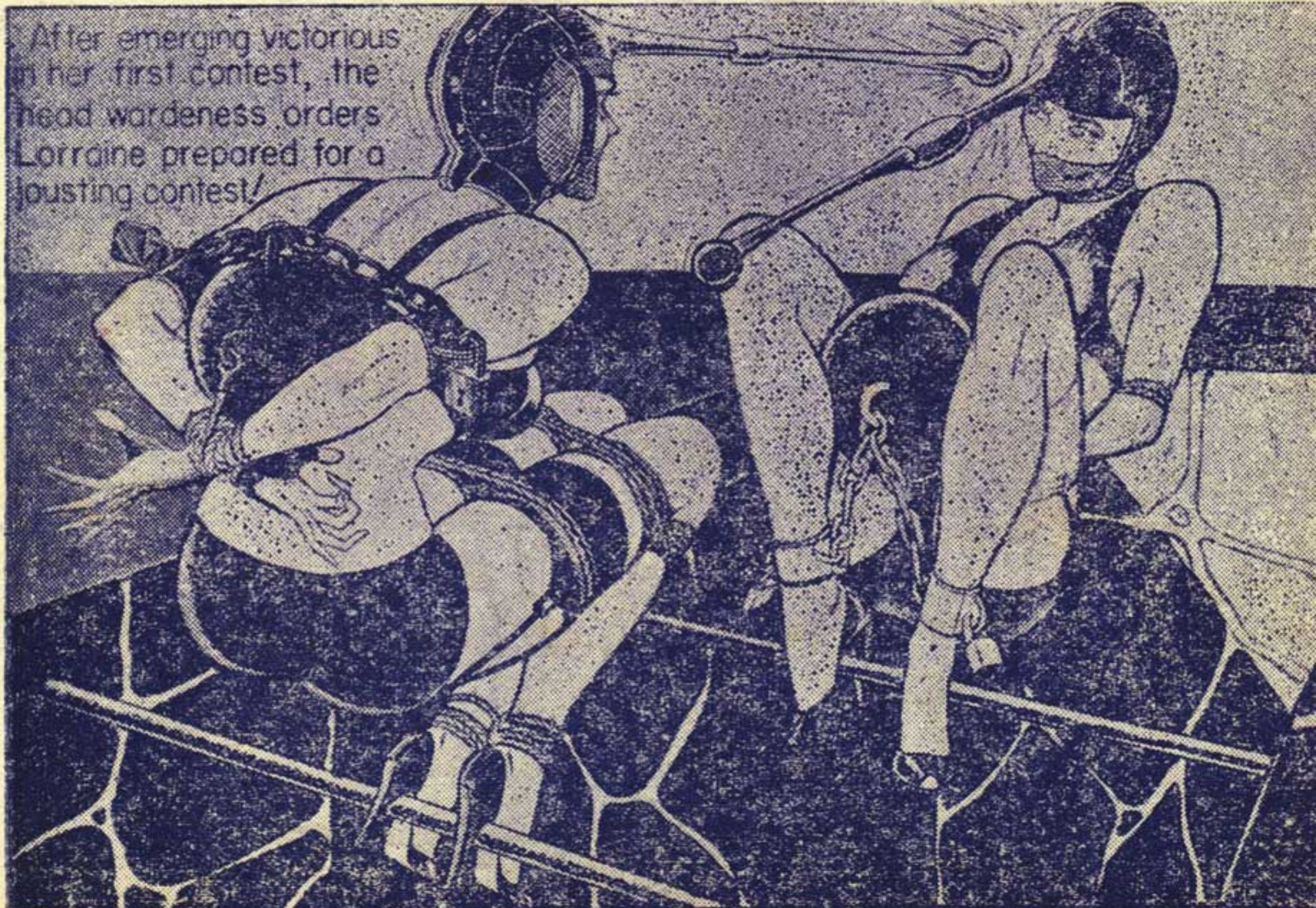
そのとき、ちょっとしたスキを
見つけたロレイヌは、監視の役
人の腰から、短剣をぬき取った。
ブツッ、ブツッと、ロレイヌ
は、手足の縄を切った。

自由になったロレイ
ヌは、ヒラリと一頭の
馬にまたがると、いち
もくさんに、司令目
けて突っ走った。
司令に刃をつきつけ
てロレイヌは全囚人を
解放するように迫る。

★

司令の命令で自由に
なった女囚たちはもう
黙ってはいなかった。
すべての役人は、逆
に車につけられて、そ
れを引かされ、短剣や
ピストルでおどかさ
れながら、囚人船に追
込まれた。
囚人船もたちまちに

After emerging victorious
in her first contest, the
head wardeness orders
Lorraine prepared for a
jousting contest!





The freed prisoner
Island, holding Yvette
new found freedom.

占領された。あらゆる責め道具が役人たちに、じゅうぶんに利用された。

★

船はやがてフランスについた。役人や司令をつれて王宮にかけ込んだロレイヌは、バスティーユ大公妃の悪事をのこらず、女王に報告するのだった。

たちまち、勅令で、バスティーユ

大公妃と、その一味は捕えられた。

ロレイヌが、バスティーユのとじこめられた地下牢をおとずれると、そこでは、連日の拷問にもめきたらず、まだ、車ひきで大公妃を責めている牢役人の姿があった。

いまや、すべてのロレイヌ方の人たちは、自由になった。

あべこべに、バスティーユ方の者たちが、拷問にかけられて、バスティーユ大公妃の悪政が、どんどん白日の下にさらされた。



entering the underground
way of the Bastille, Lorraine
fers a few of the Duchess's
s. Meanwhile one of the
s servants, hoping to reap a
reward for information about
aine's visit to the Queen, tries
her information too highly
is put on the "Troy Rock".



There is great rejoicing in the streets of France as the evil Duchess is exhibited on the way to the Courts of Justice!

★
うららかなある晴れた日に、広場ではギロチンの刃が、太陽の光をうけて、鈍く光っていた。

がいていた。
スルスルと刃がおちてきて、メルセデスの首は、血をふきながら、バスケットにおちこんだ。
空はあくまでも青く、日はうららかに照って、この惨刑も、一瞬のあいだに、うららかに浴け込んでしまった。
その物音と同時に、悪名高いバスティーユ



Lorraine supervises the last preparations on the guillotine of the Bastille, which is to put an end to the Duchess's reign of terror!

大公妃の圧政は、姿を消したのだった。思えば長い残虐の歴史だ。

(この物語は、全一編三〇章、さしえ数は約百点、本邦定価(予約)七二〇〇円です。)



な若妻を尾行して、ついに目的を達する夜がき
が目の前に横たわっている。あたしの胸は……

黒

い

夜

葦 田 奈 貴

九月もきょうで終わりというのに、暑かった。時間は二時を少し過ぎていた。もう汽車の時間だった。上野行きの急行は三時。このこじんまりした、感じのいい喫茶店「スワ^{なまなま}ン」とも別れを告げなければならなかった。生々しく、それでいて遠い気がする思いが心を占める。

ピントきたふたり

七月はじめ、その日も新潟ではめずらしく暑い昼下がりが、やっぱりこの「スワン」で、あたしはぼんやりしていた。なんとなくもの悲しく、フト空虚^{くうきょ}だった。太宰治、織田作之助、林芙美子らに傾倒して、小説家を志すは

のスイムで、お宅と陽子さんを見かけたんです。おふたりは、ただの関係ではないですね。それであたしも、お宅のようなママがほしいと思ってたんです。お宅少しエミ、と浮気しませんか？ 別に好ききらいという感情なしで、時々エミにコーヒでもおごってくれて、オコヅカイをくださる。それで、ご主人や新津さんの家のほうへはノー・コメント。どうです。エミとつき合ってくださいませんか？」

これだけを、ジッと相手から視線を離さないで言った。一日考えた結果のセリフだから、絶対気に入ったセリフだった。無言でうつ向いていた相手は、しばらくして静かにうなずいた。「契約成立ですね、じゃあ、エミがTELしたら、つき合ってくださいますね。きょうはこれで。それではどうも——」

しれ切れトンボのようなあいさつで引き上げる。

それから毎日電話して引っぱり出す。本を買ってもらって、コーヒを飲みながら、小説のことや自分の身の上話、希望などを話す。



はじめは警戒していたあの人も、打ちとけてくる。あたしも、ママ、ママと言って甘える。

目的は、いかにしてオコヅカイを引き出さかなのだ。こわい顔をしておどすよりも、計算した媚態を混ぜて、あたしはあたしなりに楽しむことにした。当分勤めなくてもいいということが、あたしを愉快にし、ママにあってはいる時は、したがってゴキゲンだった。

あえぐ白い乳房

そんなある夜、あたしはママを、お酒飲み引っぱり出すことに成功した。ママは、お酒を飲めないと言ったけれど、無理に承知させた。案外気楽にはいれる「清水」の地下へ案内する。いつもは、年齢のわりにしつとりと落ち着いているママだけれど、洋酒バーなどにははじめてという話は本当らしく、少しひとみの輝きが増しているように見えた。

俗に「女殺し」というスクリュードライバーを飲ませてやる。口当たりがいいから、初めてでも飲める。たて続けに二杯あけさせてやった。

急に酔いが回ったらしく、ママは荒い息づかいになる。車に乗せて家まで送る。車に揺れると、なお、酔いが回るのを計算済みの行動だ。

車を降りる時など、ママをささえてやらなと歩けないくらいだ。いささかあたしも面くらったほど酔っている。

ベッドへ寝かせて、頭や胸を冷やしてやる。こんな時は親切にしてやるに限る。ママだって心が弱くなっているから、「ママ、だいじょうぶ？」

「ごめんなさい、悪いわねえ」

「無理に飲ませたエミーが悪いんだ。ママ、ゴメンネ、少しは楽になった？」

笑い返すママを見ながら、視線がすべる。少しゆるめた着物の下で、豊かに息づく胸、白い肌、ハッと息をのむ。押えきれない欲望が起こる。

「ママ」

あたしを見あげているママの目のおのきの色が浮かんだ瞬間、あたしはママにおおいかぶさり、接吻していた。次に、あたしはママの胸を開く。

「ヤメテ」

というママの弱い抵抗にさからってあたしはママの裸身を見たいという欲望を満たす。そして、白い裸身を目の前にして、あたしはママを愛してやりたくなった。

手がからだに掛かると、はっとしたように身を引こうとしたが、その動作は鈍い。あたしのほうが力が強い。

しばらくすれば、そんな抵抗もない。少し呼吸が乱れる。ひそやかに、そして忍びやかに、声がもれる。あたしは思うとおりにママを愛す。あたしの



下で息づき、波打つ女体……。

愛してしまつて、一言も口をきかずに外へ出た。ママは顔をおおっていた。そんなママに、ことばを掛けるのが幾分めんどうだったから。それよりも、あたしはすごく満足していたんだ。

あたしのからだの下で、荒くあえいでいた白い乳房、初めてなのに空想していたとおりに、うまく愛撫できたことが愉快だった。女体を愛したということ自分で少しおとなになったような気がした。静まり返った住宅街のまっ黒な空でまたたいいていた、空いっぱいの星を忘れやしない。

翌日は、昼近くまで眠ってしまった。そして一日じゅう、なんとなくママを思って、気分よく過ごした。次の日の夕方、ママの家へ出掛けて行った。ぎこちない空気を、うすら笑いではぐらかして、また同じことがなされた。

そのまま、ずるずると、毎夜、ママの所へ行く習慣を作ってしまった。そして、甘い媚態を、冷笑の命令調に改める。あたしはいつも、幾度かママを求めた。ママは、それを拒まない。あきらめたように、あたしの言うとおりになる。

初めに愛の確認なしに、肉体の交わりがで
き、それをもっけの幸いと、あたしはオコッ
カイをもらうためと割り切ってつき合うつも
りだった。だが、悲しそうなママの目にぶつ
かると、あたしの心には、必要以上に凶暴な
荒々しさが起こり、ママを快楽の中へ引きず
り込まずにはいられなかった。

しかし、そのあと、なんとも言いようのな
い空白感、あたしをいらだたしくする。

「満足した？ それなら、オコッカイをくれ
ない？」

みだらな意味をこめたこんなことばを、顔
色も変えず口にした。本当は、こんなことば
を口にするのもいやだった。だが、ママが黙
ってあたしに従うたびに、あたしはだんだん
ずうずうしく下劣に行動した。

ママのあきらめに対して、あたしはやけく
そに、下劣にふるまった。残酷に扱えば扱う
ほど心はすさみ、意のままにするたびに、あ
たし自身傷ついた。そんな自虐的な快感を、
あたしはいつか欲していたようだ。

愛の宣言

夏の太陽は、ギラギラと強く、それでいて
明るい。砂浜近く水にたわむれる四、五人の

若い娘たち。陽子の洋裁友だちだ。

ママとあたしは、浜茶屋でそれをながめて
いた。ママは、相変わらずおとなしい。

きょう、ここで、あたしは、陽子に、ママ
のめいとして正式に紹介された。だが、陽子
は信じていない。ふと緊張した態度で、それ
はわかる。ママはずっと陽子に会っていな
い。陽子だって、ママの態度が変わったこと
に気づいているはずだ。赤、黄、緑と、原色
の水着をつけた若いからだは、好ましい。

「ママ、ボートに乗らない」

案の定、首は横だ。NOの返事は、せんこ
くご承知ずみなんだ。ただ聞いてみただけ。
沖へ向かって泳ぎ出した黄色の水着を追うた
めなんだ、目的は――

「乗りませんか？」

声を掛けると、すぐ上がってきた。

「なぜ泳ぎませんか？」

「泳げないから」

さっきから目をつけていたからだ。胸は豊

かだが、手足などはひきしまり、腰は細い。

小麦色の肌は、若さを感じさせる。一度は抱
いてみたいなあと思っているところへ、

「あなた、お名まえは？」ときた。

なんだか、ひとみの光が強い。

「絵見^{えみ}洋子^{ようこ}。新津陽子さんと同じ名まえだけ
ど、あたしは太平洋の洋よ。エミ―って呼ん
でください」

「あたしは高橋^{たかはし}紀子^{のりこ}、陽子さんとは親友な
の、君子おねえ様を、オバサマに持つなんて、
うらやましいわ」

「ママとはアカの他人」

予期した返事を聞いたようにうなずく。ま
た一段とひとみを強くした。にらまれている
ようなぐあいだった。

「陽子さん、悩んでいるのよ」

あたしを非難するひびきだ。

「あたしが原因っていうの？ ママと陽子さ
んは、このまま別れたほうがいいんです。こ
れ以上、ふたりはどうするつもり？ どちら
も受け身で、ふたりとも子供同士で、何もで
きやしない。これ以上の結びつきなど、ない
ほうがいい。自然に離れるようにしたほう
が、あたしはいいと思う」

実際、ママと陽子さんの関係は笑い話だ。

電話を借りにきた陽子の若々しさに、話をし
ながら、ママは、高校のとき上級生に接吻さ
れたことを思い出し、ふと抱きよせてくちび
るを重ねてしまったと言う。だが、ママの責
任感のようなものに縛られて、陽子とその後

会っていながら、もう二度と陽子を抱く気にはならない。熱をあげて来る陽子をもてあまし気味だったんだ。

「すばらしいかれでも見つけたら、ママのことなんかじきに忘れてしまう。そうでしょ？」
「そうかしら？ あなたは自分のつごうのいいように言ってるみたい」

「陽子なんか、すぐ男に夢中になる型よ。かえって、あなたのほうが、ママなんかにひかれる型じゃないかな。静かに底のほうで燃えている情熱家って感じだもの」

ふと絶句して見つめるひとみ、背に流れる黒髪。絶対イカスひとだ。

「あなたが好きになった、浮気しません？」
半分本気で半分冗談、そんな気持ちで、こんなことばが飛び出した。

「あなたは君子ねえさんを愛してんでしょ」
「愛してるさ」

「浮気なんていや」

「フーン、本気ならつき合う？」

「知らないわ」

「ママを愛している」——自分の口から出たこのことばに、あたしは妙に心を乱された。ボートから降りても、帰る道すがら。

あたしは、このことばにウソのないことを

認めなければならなかった。

その夜、ママを愛したあとで、真剣に、

「エミーは、ママを愛している」

と宣言した。あたしにとって、宣言したというにふさわしい、つきつめた気持ちだった。ふっと、ママのほおに浮かぶ笑い。あたしのことばを待ち構えていたような微笑。当然言われるべきことばを待っていた、そんなふうに取りれた。むらむらと何かまた反抗したくなった。

「なによ、その顔。エミーは真剣なのよ。本当の気持ちなのに、なにがおかしいの？」

荒いことばが出る。ベッドに寝ていたママが、起き上がってあたしを抱く。

「うれしいの。エミーが、いつそのことばを言ってくれるのかと思って、待ってたのよ」

熱い密語。強いキッス。あたしもキッスして返す。

「愛してる、愛してる」

百回も繰り返しても足りないと思う。ママを愛してるってことは、なんてすばらしいことだ。「I love you」って、素直に言えるってことが、なぜかうれしい。その夜のベッドは、ふたりの愛のことばで埋まってしまったみたいだった。

自虐の思い

その後、毎夜、あたしはママの所へ行った。行かずにはいられなかったのだ。三日に一度は、別れられずに泊まってしまう。家へ帰って、母の顔を見るのがつらい。ほんの短い一言のオコゴトが、胸を痛くする。

「同人雑誌を作るのに忙しいの」

こんなウソっぱちの理由を、気弱く口にする。ママを知る前のあたしは、この世で母を一番愛していた。母が、女手一つであたしをどのように苦勞して育てたか、よくわかっていた。自分自身よりも深く母を思っていた。

それが、母に打ち明けられない恋をしてしまった。一週間に一度ぐらい、いくらかの金を「失業保険」と言って母に渡す。もちろん、すまないと思いつながら、ママからももらった金だ。安定所などへは、とっくに行かなくなっていたから、悪いと思いつながらも、ママからもらわれないでいられない。

ホモセクシャルとは、麻薬のようなもので、淫乱な愛欲だという人へ、あたしは、「いや、もっと純粋な精神的なものがある」と反対した。それは、ママを知る前のこと……。だが、あたしは、ママと会えば、求めずに

はいられなかった。触れ合わずにははいられなかった。しっかりこの手でママを抱かないうちには、不安だった。いや抱いていてさえ、不安は消えなかったようだ。

レスボスに、精神的な結合を望んでいたあたしが、結果においては、肉体的な結び合いの関係になってしまったということについて、あたしは思う。

レスボスには、あしたという未来がない。ただあるものは、きょうという日だけ。天の摂理にそむいているという罪の意識が、現在だけの恋に情熱を燃え上がらせる。たえず、心のどこかに、背徳の意識が働き、不安と焦燥に駆られ、いつも追われているようにおそれ、一時の快楽に救いを求めることになる。せつなの愛に命を、若さを、すべてを燃え上がらせる。スリルを求めるなんてなまやさしいものではない。やみに咲かせる恋だから、日の当たらない愛だからこそひかれ、やみくもに自分をかけて愛し続ける。

退廃と惰性。苦悩と背徳、反抗と偽善。虚無と冷笑。絶望とあきらめ。説明できないデカダンな、これらのものへのあこがれ、自分を痛めつける精神的なマゾの自虐的な喜びが、あたしをレスボスへ追い込んだといえる。

キッス・マーク

花火の炸裂音が空気を震わせる。

ベッドに起き上がって、たばこへ火をつける。深く吸いこむ。このたばこ。その時、あたしはしみじみと自分の愛のしあわせを思う。ママはまだ静かに息づいている。その感情を感じたら、はっと考えが浮かぶ。と同時に、火をママの胸の谷間に押しつけていた。

「アッ！」

起き上がったママへ、あたしは許しをこう目を向ける。ママは、ゆっくり首を振る。無言でたばこをママへ差し出した。あたしも、ママの手で同じことをしてほしかったからだ。柔らかく倒されたあたしの胸へ押しつけられたものは、ママのぬれたくちびるだった。あたしの肌には、赤くあざやかにキッス・マークが――。見交わすママとあたし。許し合った者同士の親しみを、愛を、信じる。ただそれだけが、かよい合う。

二、三日後に、あたしの胸のマークは、新たにされた。

「満足した？」

こんなことばが、恥ずかしさをともないながらも、微妙にふたりを結びつける。前は、

このことばを吐き出すように言ったのに、くすぐるようにささやく時のうれしさ。

同じ性であるがゆえに相手を知り、いたわりあい、ひとすじに結び合う。どんな悲しみも、喜びも、ふたりのものだった。

妖しいばかりに美しく、そして激しい愛。ある小説では、レスボスをネコが自分のしっぽを追う恋だと言っていた。造形の神のエラーでできた人間とさげすまれようと、あたしは、この愛に身も心も燃やし尽くさずにははいられなかった。

一日一日が、抜き差しならぬところへ落ち込むような日であり、ママもあたしも破滅の日が来ることを知りながら、ただきょうの愛撫に、抱擁に、命を燃やすのだった。

別れの日

とうとうふたりの恋の終わる日が、やってきた。九月三十日、ママの夫が退院する。ふたりとも、それを聞きながら、何も言い出さなかった。少しも、触れなかった。

不自然な沈黙、息づまる毎日。そして、せつなの愉悦におぼれこみ、せつなの快樂しか求められない、あしたなき恋ゆえに泣いた。

三十日を目前に、あたしは、ママと別れる

決心をした。

ママ、あたし、ママの夫。この三つドモエの関係にいつか破滅はやって来る。その前にあたしの独占欲と嫉妬は、破局の日を早めるに違いない。まして、いつまでも秘めておくことなど、あたしは耐えられないことだ。

追い詰められたら、あたしは何をやりだすか、自分でもわからない。きっと、たいへんなことをやってしまうに違いない。

ママから離れよう。ママは受け身だ。もうしばらくたてば、夫との生活にも、前のように慣れるだろう。

ママが、家や夫を捨てて、あたしといっしょに生きると言ったら、私は無力だ。何もできやしない。

また、あたしも、ずるずるとママを、未来のないレスボスの愛へ引きずり込めなかった。ママを愛すればこそ。二十九日の夜、ママにお別れを言った。

しょせん、レスボスは許されぬ愛であり、最後は別れなければならぬ運命である。ママを愛すればこそ、身を引きたい。このままで行ったら、自分が何をやり出すか自信を持ってないと、正直に気持ちを言った。

「じゃあ、ママ、さよなら」



逃げるように外へ出る。

「エミー——耳に残るママの叫び。キッスも交わさず、手もにぎらずに出てきたのだ。」

でも、でも、前の夜はそのつもりで、最後のつもりで必死で愛してやったんだ。別れの夜だけは美しく、奇麗でありたかった。思い出だけになってしまふ初恋のためにも。

外は少し風が強い。雨もポツポツ降りだしていた。今夜半から台風が来るといふ。

若い肉体の大胆さ

歩きながら、やり場のない怒りが湧き上がる。何が奇麗な思い出だ。何が美しい恋だ。なぜ、ママを最後に抱いてこなかったんだろう。あたしのセンチな思いつきが、たまらなく憎かった。

ちくしょう、今夜をよごしてやろうと思った。足を東映の裏に向けた。海で会った高橋紀子のところへ行ったのだ。

「浮気しにきたよ」

「浮気？」

「そうさ。あたしにはママがいるもの」

「あなた、ママと別れてきたんじゃない？」

「なに！」

「わかるわ、それでなきゃあ、あなたが来る

はずあるもんですか」

「黙って！」

あたしの知らないあたしを、この人は、知っている。荒くくちびるをふさいでやる。ブラウスを、スカートを、乱暴に引きはがす。さからわない。一言の愛のことばも与えず荒々しく愛する。苦痛を与え、責めてやる。

胸の中で荒れ狂うもの狂おしさが、あたしに凶暴に紀子のからだを痛めつけさせた。苦痛のうめきが、なおさらあたしを駆りたてた。

終わったあとであたしは、はじめに打ちのめされたような、にがにがしい気持ちだった。けっきょくは、傷ついたのはあたしの心。そんなむなしさがあたしを包んでいたのだ。

「あたし、あなたを愛するから、捨てないで」ふっと、紀子のことばが胸を打つ。

「だめ、東京へ行く」

「いつ？」

「あした」

「あたしも行くわ」

「バカ」

あたしといっしょにきたって、なんになる。あしたなきレスボスの愛に、一生を賭けようと、レスボスに徹しようと、東京へ行く決心をしたのだ。

もはや、夢や望みは捨てた。太陽に背を向けて、第三の性に命を燃やす短い一生。「われはわが道を行く」という流儀で進もうと、心を決めたのだ。

じっとするように見ているひとみが、急にかわいかった。優しさがあたしを満たした。親しく愛してやろうと思った。

引き寄せて、柔らかく接吻して、手は胸を探索。息がはずむ、耳たぶへ軽く歯を立てる。

「エミーなんてバカ者は愛すんじゃない」

密語しながら、手は腰へすべる。若いからだ、大胆に愛を受ける。ママなんかと違って、よろこびの声は、すごく大っぴら。しばし夢中で愛し続けた。

「あしたの夜行ね、あたしもきつと行く」

約束の軽いキッスで別れてきたのだった。

しかし、あたしは、昼の急行で、ひとり新潟を離れるために、あたしの恋が始まり、そして終わったスワンを、今あとにして、駅に向かう。

ママも紀子も、思い出すだけのほうがいいんだ。非情に自分を見つめて、あたしはこれからレスピアンとして生きて行こうと思う。生まれて十九歳まで育った新潟、バイバイ。そして初恋よ、さようなら。

魅力

英 治

わたしは本年四十五歳の男ですが、このたび店頭で、はからずも、『風俗奇譚』を手に入れる機会を得まして、生まれて初めて頭の中の霧が晴れたように、スーッとした感じがしました。

というのは、いままでこんな悩みはわたしだけだと思っていたのが、貴誌を読んで、世のなかには同じような人がいることを知りま



<ヒップマニアの手記>

白い二つの半球の

豊満で、白く輝く二つの肉丘——そこ
には、限りない魅力がひそんでいる。

高 沢

した。

今後は、そういうかたちと、真剣に話し合っていきたいと思います。

そういう意味で、わたしのいままでの歴史を率直に書いてみます。

魅力の双丘

わたしが性的な関心をもち出してから三十余年、いつでも、わたしの心をとらえて離さなかったのは、あの美しい女性のヒップです。

この世の中で一番うつくしいものは、女の尻です。と、こう書いただけで、もうわたしの目の前には、まるまると盛り上がった白い二つの肉塊が浮かび、からだじゅうがゾクゾクしてくるのです。

うっとりとながめ、あたたかい丸みにさわると、なんともいえない弾力があり、二つの白い半球に押しせばめられた神秘的谷間の魅力。

わたしは、両手を半球にかけ、押し開こうとします。女ははげしくさからう。

それはまず、大きな盛り上がったヒップと太ももが、うねるように左右にのたうつことから始まるのです。次には、お尻の筋肉に必死の力をいれて谷を開かせまいとする。だ

が、とうとうわたしは勝つ。

懸命の力をこめているので、両半球は、びっくりするほど堅くなっていて、引きしめられた肌は、一段と白い。しかもそれは、柔らかいのだ。

その堅い、白い、柔らかい二つの球が、女の第二の顔なのだ。

だから、わたしは、洋装の女にしか興味がありません。と申しますのは、洋装の女のほうがいっそう、お尻の線がクッキリと現われるし、それにわたしは、洋装の女の下着に、たまらない魅力を感じてしまうのです。腰巻きや下着にはなんの興味も持ちません。

美しい脚を包んでいるナイロンのストッキング、カカトからずうっと上へ、太ももに走っている靴下の中心線、肉色もあれば茶色もある。

それに、各種のガーターの色が加わって、わたしはうっとりとしてしまう。

シュミーズのレース飾り、パンティー、ブ



ルマー、ズロース、ブラジャー、わたしは、婦人下着の並んでいる陳列窓の前に立ちつくし、人知れず興奮することもあります。

それというのも、この下着類が、みんな、あの豊かなヒップを包む衣類だからです。

女の下ばきに埋もれて

あれは、二十歳を過ぎて間のないころだったですか、わたしは、この女の下着を集めるのに夢中だったのを覚えています。

最初のうちは、夜ふけの町角をさまよい歩いては、なるべく遠くの洋品店や雑貨屋を捜しては、自分で買って歩いたものでした。

ある夜のことでした。わたしは、いつものように、欲望のとりこになって、ズロースの幻影につかれた夢遊病者のように、町はずれの通りをさまよっていました。軒並みに横目でチラチラと物色しては、わたしのほしいズロースの影を敏感に読みとっていたのです。

すると、運よく、老婆がひとり眠そうにすり込んでいる店にゆきあたりました。

その老婆は、わたしの求めに応じて、そこいらの箱から二、三種のズロースをとり出しては、わたしの前にひろげていたときです。奥から、二十二、三の、はでな若い女が顔を

出して、

「あっ、それは女物ですよ。男のかたのパンツならこちらですわ」

と気をきかしたつもりでいうのに、老婆は、

「お客様は女物がいいといわれたので……」

と答えると、娘の好奇の女線は、パッとわたしの顔を射て、わたしはそのなかに彼女のあわれみと軽蔑の色をかぎとりました。ジーンと全身が羞恥で赤くなり、舌の根がからからにかわいていくのをおぼえました。

それ以来です。わたしが、女の下着は買うのをやめて、よその物干し台に登って、干し忘れたのをちよっと失敬するとか、アパートの隣の部屋へやの女の洗たく物の中によこれたままっこんであるのを盗むとか……

このほうが、だれにも見られない気やすさもあったけど、第一、わたしにとってはたまらない貴重なものでした。あの優美な、わたしにとってはもっとも神秘的なヒップを包んで、しかも、その体臭をじゅうぶんに吸っている布かと思えば、芳香さえ感ずるほどでした。

そうして、わたしは、昼間のその女性たちを想像しては、夜をよごすのでした。

わたしは、いつも寝るときは、素裸で寝て、わたしのからだのまわりには、そういう戦利品をいっぱいにまきちらして寝ることにしています。

ピンクの……白の……よごれたもの……レースのついたおしゃれの……茶色くなったもの……黒いスカシ織りの……月経帯兼用のもの……絹の……ナイロンの……木綿の……

それらはみんな、直接、女のいのちを吸い、一番魅力的なヒップをそっと保護していたものなのだ。その役目のために、どれもこれもよごれ、しみがつき、甘いおいをいっぱいにしみ込ましていた。

わたしは、それを身にすりつけ、もみまわし、汗でけがしながら、うわ言をいうのでした。まるで、甘ずっぱいお花畑にのたうち回っているような、楽しい気持ちだったのをおぼえています。

トイレのぞき

それから、四、五年して、わたしは、また違うことにコッていまし。

そのころのわたしは、昼はある教科書の出版会社に勤め、夜は自宅で進学生を相手の塾を開いていました。進学生といっても、大学

を目指す、女の高校生も交じっているの、わたしのヒップ・マニアを刺激すること、たびたびでした。

たとえば、きょうも、最後に残った高校生のA子に、帰りしなに、トイレはどこですかと聞かれて……

「ああ、トイレはね、先生の部屋の前の廊下の突き当たり。がまんしないで、いつでも行きなさいね」

彼女は赤くなったが、ちょうどその時期だったとみえて、すぐ立って行きました、わたしは、すぐあとから部屋を出て、隣の三畳にはいるのです。

三畳の押し入れをあけると、そのすぐ向こうがトイレになっていて、ここにわたしの秘密の工作がしてあったのです。

わたしの宿願である「便所のぞき」——それには、この家は最適の条件を備えていました。

工作には手間はかかりませんでした。押し入れの床をはずして、便所の穴のすぐ下の横板をはずすだけで、わたしの頭は、はいつくばることによって、簡単に便所を下からのぞき見ることができるよう、細工がしてあったのです。

これでわたしは、どんな女性の中でも、その悩ましいヒップを、いつでも、その排尿の時期に、ゆっくりとながめることができたのです。と同時に、わたしは、それだけでは満足できなくなり、ここに小型カメラを据えつけて、その種の写真のコレクションを始めていたのです。

熱感と冷感とを

それから、また四、五年して、わたしは啓子という女性と同棲していました。

啓子は、有名な某デザイナーの助手をして、職業婦人としては一流の技術と収入をもっている女でしたが、容貌が悪く、ことに強度の近眼鏡をかけた女でした。

しかし、その容貌にくらべて、すばらしい肉体の持ち主で、いつも二寸半のハイヒールを愛用しているので、そのためか、みごとに発達したヒップの美しさといったら、ちょっとくらべる女性はないだろうと思われるほどでした。

わたしは、この啓子のヒップの美しさを、ながめているだけでなく、積極的に愛撫せずにはいられませんでした。

そのひとつとして、電気を利用しました。

まず、彼女をベッドに寝かせて、あきるほどながめたあげく、電気ヒップをなでるのです。もちろんコードつきで、スイッチを入れて。

つまり、電気スタンドのシェードをとり、さか手に持って行なうわけです。一度、電球を割ってコリたことがあるので、ガーゼを二重にして電球を包むことにしました。電球は相当に熱をおびていますから、ヒップの上をなでることによって、彼女は不思議な恍惚感にひたるようでした。始めは静かに寝ているだけでしたが、やがて、くねくねとからだを動かすようになってきます。

これは、電球でなくても、アイロンでもいいわけですが、しかし、アイロンの場合は、調節をうまくやらないと、すぐ熱くなりすぎ、火傷させるので、そのほうに気持ち悪く奪われて、たのしみが少ないのです。やはり、電球のデリケートな感じ、薄いガラスの器具感がよいようでした。

こんなぐあいに、ヒップに熱を与える方法は、案外のようなですが、女性を喜ばせることを知りました。啓子もたいへん気に入ったよう、また、その反対の場合もいいのだといいました。つまり、ヒップに電球によるマッ

サージを施して、彼女が陶醉しているとき、不意に、ヒップの上に、つめたい短刀の抜き身、ハサミ、メスなどを乗せる方法です。

もちろん、氷でもいいのですが、こんな凶器類のほうが、心理的にわたしも彼女も満足が多いようでした。冬など、ほんとに飛び上がるほど冷たく感ずる、と彼女は、いっていました。

夢心地になっている啓子は、悲鳴を上げて、反射的にふりかえって、ヒップの上を見ます。白い光芒を放って、つめたく光っている抜き身。

わたしにとっては思わず、ほくそえまずにいられないシーンです。啓子は、「いやッ、いやッ、早くとって!」

と、かんだかい声をあげながらあえぐ、そのくせ、とってもいいはずなのです。

ソロバン責め

まったく「臀部愛好」といっても、わたしの、サディスチックにできているから、自然、愛好ぶりも、そんな傾向をおびてくるようでした。

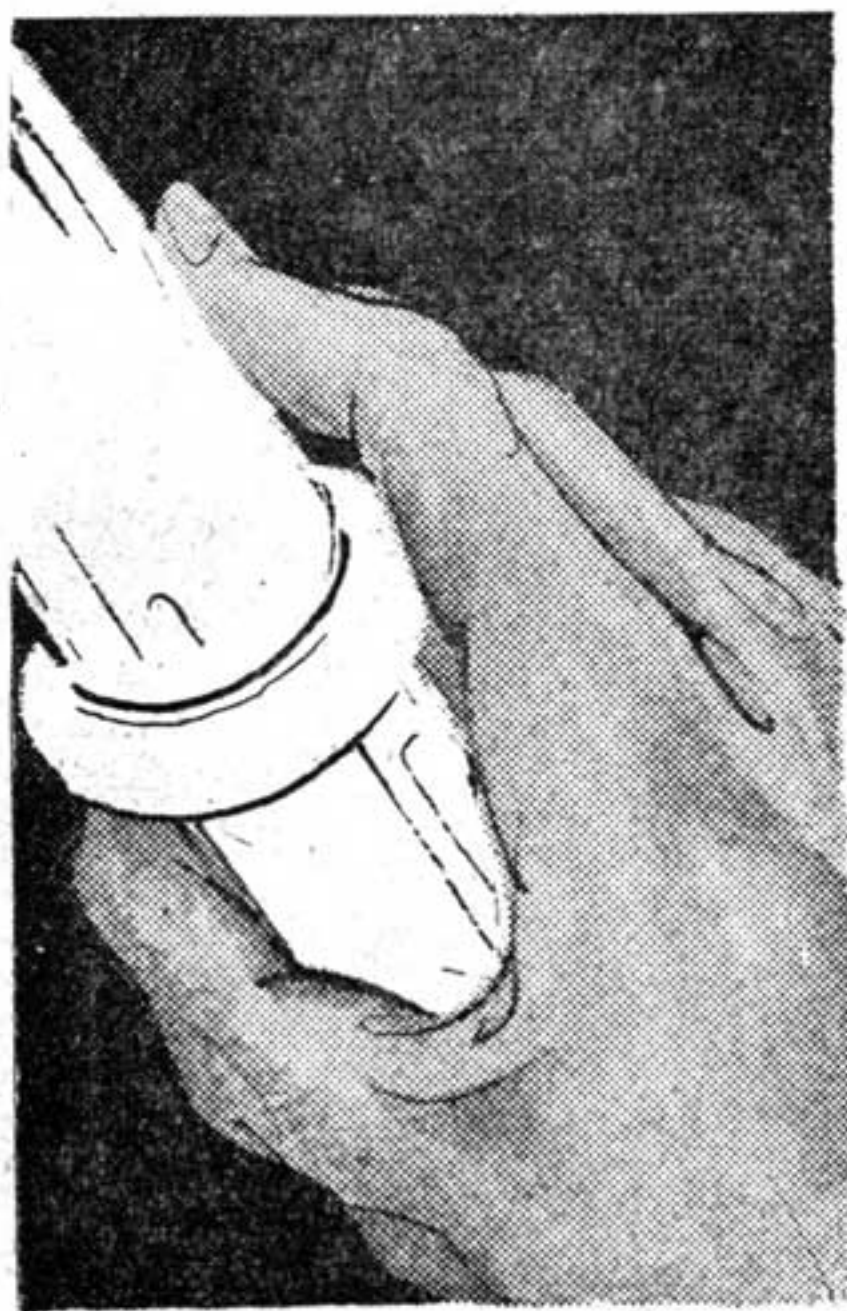
そのころよく利用したのが、洗たく板、でなければソロバン。ダンダラの不

思議な縞模様を見せる豊かなヒップの表情は、どれほどわたしの血を湧き立たせたかわかりません。ソロバンで摩擦すると、ほんとうに電流が生じるらしいですね。

わたしが少しでも手を休めると、啓子は、自分からヒップを運動させるほど、気持ちのよいものらしいです。

また、必ずしも、わたしが手を動かさなくても、彼女のヒップに、玉を下にしてソロバンを乗せ、わたしがその上に腰をかけることもやりました。

腰部の運動で、ソロバンはきしみながら動きます。この場合は、わたしの体重で、啓子の苦しさは大変だったのでしょう。よほど腰を浮かすように加減してやらないと、傷がつ



いて困りました。

しかし、この場合、ポーズ上からも、わたしの心理的満足はとても大で、やめられないものでした。彼女だって、泣いて喜ぶほどでした。

ですからわたしの家のソロバンは、彼女のヒップの汗とあぶらを吸い込んで、なんともいえない色をおびて光っていたほどでした。

まったく、この啓子と暮らした五年間は、わたしにとっては、たとえようなない幸福の生活でしたが、その彼女も、病に倒れ、故郷の岡山に帰ってしまったのです。そして二年、ついに帰らぬ旅に立ってしまったのです。わたしのイタズラな生活が原因だったのでしょうか。

美人看護婦

そしてまた、五年ほど前から、わたしは、こんな考えを持つようになったのです。

いうならば、わたしの臀部崇拜は、とうとう浣腸のエクスタシーにまで高めたことになりました。

恥ずかしさのあまり、必死にもがいて逃げようとする美しい女をむりに押えつ

け、スカートをとり、コルセットをはずし、パンティーをおしのけて、あの羞恥の肉体を電灯の下にさらけ出します。

すると、好色な浣腸器の嘴管が、たっぷりワセリンを塗られて差し込まれていく。ああ、それを思うと、わたしは、いまにも気が狂いそうな気持ちになります。わたしだけが、こうなるのでしょうか、いやいや、世のなかには、必ずわたしと同じスリルを感じる人が何人かいるに違いありません。

この空想が現実になったのは、次のようなことからです。わたしがスケートで左の足の骨を折って、赤坂の外科病院に入院しているときのことでした。

わたしが、この年をしてスケートに夢中になったというのも、もちろん、女のヒップを鑑賞するためです。

さて、その病院というのは、かねてからわたしの知り合いで、もう退院するころになると、若い医者や看護婦たちと友だちになってしまい、のこのこと診察室に出かけて雑談するほどでした。

午後は、たいてい暇になるので、わたしたちは診察室のベッドやイスに腰をか



けて、いつまでもおしゃべりをしました。話はいつか猥談になるのがオチで、いつもたあいなく笑いこけるのでした。

たしか、その日は天気の良い六月初旬の午後でした。広い診察室には、わたしの知り合いの院長と若い医者の大島さん、それにわたしとの三人がいました。わたしたちがとりとめのないムダ話をしていますと、たまたまそこへ病院一といわれる、きれいな看護婦の内田さんがはいつてきました。彼女はだまって部屋（へや）のすみにある流しで、いろいろな器具を洗いました。

内田看護婦は、すらりと背の高い、みごとに発達した胸と腰をもった美人でした。こちらに背を向け、すこし前かがみになって流しに向かっている姿、わたしの目は、すぐに彼女のヒップに向けられるのでした。

白衣の下になっているものの、わたしの目には、すこし後ろに突き出しているヴォリュームのある、すばらしいヒップがはっきりと映ります。わたしは吸いくようにその腰のあたりを見つめていました。そのとき、ふと院長が彼女に声を

かけました。

「内田さん、お腹はどうだい。もう痛くないのかい」

声に、彼女は美しい顔を少し赤らめて、ふり返り、まの悪そうな表情をして答えました。

「おかげさまで、あのお薬でなりましたわ」
「なおったわけじゃないよ。痛みが止まっただけだよ。通じがあった。ない。じゃ、また痛くなってくるぞ、通じがあったほうがいいんだがなあ」

「だいじょうぶだわ」

彼女は、にっこりして向こうへ向き直って、また洗いました。ときに、彼女が洗っている手もとで、チューチューという音がするので、なんだろうと思ってみると、三〇CCのリスリン浣腸器ではありませんか、わたしはハッと思いました。しかし、そのとき大島医師がこうたずねました。

「きょう、だれが浣腸したんですか」

「ええ、あの外来の痔病の奥さん」

「そうなんだ」と院長がうなずきました。「女も五十近くにもなると、平気だからね。浣腸の癖がついているんだ。すぐに浣腸してくれて、自分から言うよ。してやると、気持ちよさそうに目を細くしているんだから、イヤ

になっちゃう。ねえ、内田さん」

「まさか」

内田看護婦は、一段と顔を赤くしました。わたしは、すっかり興奮して、のどがひっついてしまいました。

まひるの浣腸風景

そのときでした、いきなり院長はイスから立ち上がって、内田さんの後ろへ行き、いま洗ったばかりの浣腸器を手に取ると、薬品のなかからリスリンの大びんを取り出し、まずジューと半分ほど吸い込ませ、あと半分はお湯を入れてませ始めました。そして、

「きみも、いまついでに浣腸しておこう。そうすれば晩までになおるよ」

さっと、内田さんは顔をこわばらせました。「いやよ、あたし」といいながら、むりに笑いを作っていました。しかし、院長は、ひとりで決めてしまった態度です。

「きみ、てつだってくれたまえ」

と当然なことのように大島医師にいうと、しずかに内田さんの腕をつかまえて診察用のベッドのそばに連れてきました。

「院長先生、いやですわ、浣腸しなくてもだいじょうぶですわ」

彼女は泣きだすような表情を交じえて尻ごみをしました。

「しなくちゃいかん」

院長は、低い力づよい声で命令するようについて、よいしょと声を出して、彼女をベッドの上にあおむけに斜めに押したおし、慣れた手つきで、ひょいと両脚をのせさせ、両ひざを立てて開かせようしました。

「あッ、だめ」

内田さんは、白衣が開いた下に現われたスカートが、ももにずり落ちるのを懸命にひざのほうへ上げるのでした。わたしの目は釘づけになっていました。そのころの看護婦にしては、ぜいたくな絹の靴下、その靴下が終わっている上の素肌のもも、白いパンティーがちらりとわたしの目を射しました。

「だめ、先生、かんにんして」

内田さんは、うめくように低い声でくりかえしました。そして、必死になって身をよじり、横向きになりましたが、ふたりの医師は、そのまま彼女を押えつけて、強引に浣腸をしようとするのです。

「いや、いや」

こうなっては半分は観念したのでしょう。すっかりおとなしくなり、手で顔をおおって

うっ伏せになってしまいました。

ああ、あの時のわたしの感動。六月の午後
の陽光に浮かび出た、白い、豊満なヒップ。

彼女は、浣腸器をのがれようとして、からだを左右に動かし、上や下にも動かすと、その隆起の魅力がすばらしくなる。

とうとう浣腸器は、美しい肉体に差しこまれ、リスリンが彼女のからだに注入されていきました。わたしは、一言も、声はむろんのこと、ひょっとした息も出せずに、このありさまをやきつく目で見ていました。

ああ、ながいこと空想だけしていた夢の実現。わたしという存在は吹きとんでしまい、あるのは眼前の光景だけでした。

生きもののヒップ

その夜、わたしは興奮しきって、何回も何回も昼間の光景を思い出しては、若者のような行為をするのでした。いや、思い出すというよりは、あのときの様子が絶えず頭の中にあざやかに写し出されていて、その影像を打ち消すため、みずから責め減らしていく戦いでもあり、喜びでもあったのです。

あくる日の午後、フラフラになったわが身を廊下に運んで行くと、向こうから内田看護

婦が来ます。わたしを見ると、さっさと一瞬の恥じらいを見せ、くるっと回れ右をして、右廊下に曲がってしまいました。

わたしは、急いで曲がりかどまで行きました。そして、大急ぎで、わたしの視線からのがれて行く彼女の美しい腰を、ヒップを見のがしませんでした。わたしは、彼女のヒップだけが、まるで独立した生き物でもあるかのように、縦横にゆれながら、風を切って逃げて行く姿を、この目にとらえました。

夢にみる二つの半球

このように、わたしの一生は、あの白い豊かな柔らかい二つの半球の夢にさいなまれてきました。いまでも、こうしてスタンドの灯を消すと、なんの変哲もないわたしの部屋は急に花園のように思われてくるのです。

ネオンが七色に、暗い夜空に輝くが、わたしの部屋はすわり机が一つに、洋服ダンスと書だなど、それだけの六畳。

この部屋でわたしの想像は際限なく広がっていきます。きょう発見したあのA子のすばらしい肉体、そしてまたみごとに熟したヒップ。わたしが思わずパンティーをむしりとって、両手にそのまるい感触を満喫したい衝動

にかられた瞬間……そんなことばかりを考えています。ああ、わたしはなんという悪魔にとりつかれた男なんでしょうか。

ヒップ！ 半円をつなぎ合わせた女の肉の円体、脂肪厚きうずねりの物質。わたしの生命は、あの場所でしか燃焼しないのです。

わたしの心は、ドンランなハゲタカのように、かずかずの女のヒップの経験を思い出し、それが糧となって、わたしの血は赤々と燃えてくるのです。

わたしは、それらの尻を次々に思い浮かべては、彼女らを裸にして、うっ伏せに並ませます。大きいボール紙、もちろん真っ黒いものを切り抜きます。それにひとりずつの尻をすっぽりと入れて、上から、むき出しの尻だけ観賞するのです。

ハート型に立体的に浮き出た白い二つの半球は、どのように美しいでしょうか。そしてそれは、ときおりピクピクとうごめく。二つの半円をつなぐ縦の線の下部には、おへそのように一つのシンボルが刻まれています。それは一つの宇宙の焦点であり、貴重な集約点なのです。こんな幻想にひたるのが、わたしの日課です。同じ思いにかられる同士よ、どうかお便りをください。

彼女は右足だけでカカシのように立った。左足を極端に開いて吊られももの筋肉の苦痛が彼女を襲い、それを耐える声が、口にこもった！

夜



悦虐の彷徨

⑦

左足首を縄でつられ、
たため、腰骨や関節や

被虐にぬれる

青山三枝吉

田上恵子・え

1

「白泉閣」の女主人、野井信代と私の異常な関係は、その後もずるずるとつづいた。一般的な形容をかりれば、私は信代の若い「情夫」といったところなのだろう。信代の情夫は、私だけではない。

れいの日本画家の宇多雪夫も、まぎれもなく、そうだった。そのほかにも、きっといるにちがいない。

信代は、エネルギーが、どん欲な、マゾ女だった。

信代の夫の野井は、茨城県の海岸のサナトリウムにいる。

私が、はじめて野井をたずねていったとき、彼は私にいった。

「うちの家内は、若いかったが、とても好きなんです。だから、ね、あなたも——」

なにしろ、経済的に不自由のない、川魚料理をかねた高級旅館の女あるじだった。

女ざかりの熟れきった肉体をもち、夫は五年間も療養所のベッドにねたきり、という条件にいたる信代である。

のぞむことは、たいてい、かなえられる身分にあった。

私は、その美しい女主人の情夫だったが、毎日毎日、朝から晩まで、彼女とともにいたわけではない。

★前号までのあらすじ

私（松平）は、大学を出たが、サラリーマンになるのがいやで、新聞広告を見て、花村駒代一座という旅まわりの女剣劇一座の裏方に雇われた。

娘形の花村あやめは、座長の駒代の妹だがマゾヒストである。秋田県のある小都市で興行をうつたとき、彼女は、私のある旅館へ誘った。そうして、用意してきた縄で縛ってくれという。緊縛の中で、あやめは陶酔し、愉悅して、私と結ばれた。

そのころ、座長の旧友のむすこの阪東紅也という十七歳の少年が、入座した。ある日、私は、芝居のハネたあとの楽屋で、紅也を責めている駒代の姿を見る。私のうしろにあやめがいた。

それが刺激となつて私は、紅也連れ出し女装の彼を縛りあげて鞭でさいなんだ。あとをつけてきたあやめが、その場にとび込んできて、嫉妬の刃を私にふるった。

花村一座にいにくくなつた私に、さすがに始まる。まず東京へ舞い戻つて、場末の芸人アパート共楽荘にころがりこむ。女漫才師春風さくらの「若いツバメ」になつたのだ。

その隣室に、浪曲家東家不二丸が住んでいたが、彼は、夜ごと女房を縛つて楽しむサド趣味の人物だつた。

私は、その奇妙な情事をのぞき見していたが、ある日、同じアパートに住む少女歌手の南条マキを縛りあげてさいなむ現場を目撃した。マキが海老責めにされて、尻をたたかれていまする光景は、私の嗜虐性を堪能させた。

やがて芸人たちは地方の夏祭りに出て行き、私はまた雇い主を失う。そこで大学の先輩西条をたよつて、東海地方の中都市にあるミューズ毛織会社の宣伝課に勤めることとなる。

仕事の上で知り合つた三沢京美というモデルは、ロング・ヘアのエキゾチックな女。私は、彼女と結ばれ、縄の味を教えこむ。はては彼女のアパートで加虐の快にありえ、彼女が大切にしている髪の毛で、彼女自身の排泄した尿をふきとりさえていじめた。

京美にパトロロンができて、彼女と別れた私は、バー「白夜」の女塩満悦子を得る。彼女は、私が東京へ出てきたあとを追つて上京、再会して、東京タワーの見える旅館で、緊縛の悦虐にひたる。だが彼女は、前に自殺の経験があり、や

くざと心中する。悦子が、縛られてスリッパでぶつてくれといった思い出が、鮮烈に残つた。

そんなある日、私のところへ、未知の野井はるみという人から郵便がくる。私は、彼を茨城県の実験所に尋ね、責め絵、責め写真のすばらしいコレクションをおくられる。

そのうえ、留守宅を訪れて、「家内に会つてくれ」と頼まれる。

彼の家は、多摩川ぞいの町で川魚料理兼高級旅館の「白泉閣」で、おかみの信代は、あかぬけた三十四、五の女性だつた。その離れで、私は、信代を責めることとなつたが、信代は、根っからのマゾヒストで、責めの実況を宇井雪夫という若い画家にスケッチさせる。これは全く異常の人たちだ。――

あいたくなると、府中まで電話をかけて、彼女のつごうをきく。

「どうぞ」という返事をもらってから、とんでいくのだった。

私には「経営指導センター」という、つとめさきがあったが、このころになると、私のからだは、ひか酷的自由になっていた。

勤務の半分は、家の万年床にねそべって、原稿をかけばよい身分になっている。原稿は「これからの小売り店のありかた」とか「販売競争はこの手で勝ちぬけ」といったたぐいの、あまり色気のない内容だった。

旅まわりの女剣劇の一座にいた男が「新しい販売法のひけつ」などという文章をかいいて小冊子にのせ、それでけっこう生活しているのだから、おもえば奇異な現象である。

これが人生というやつかも知れない。

私はいつのまにか、なかば自由業の環境におちつき、したがって「悦虐の彷徨」も、このころから、かなり意識的に、広範囲にまたがっていくのだった。

2

信代とそんな関係になってから、しばらくたったある日、私は彼女の口から、この白泉閣のべつ棟のはなれにおいて、ときおり「おたのしみ会」なるものがひらかれる事実をきいた。

「おたのしみ会」――

信代の口ぶりで、その会の内容は、すぐにピンときた。

「しばらくお仲間^{なかま}しなかったけど、あなたというお相手ができたから、こん夜はひさしぶりに、あのかたちといっしょに、おあそびしようかしら」

その夜、信代はうきうきと、私の表情をのぞきこむようにいった。こういうときの信代の目は、妖婦ということばがぴったりにあてはまる感じに、あやしい美しさでキラキラと底びかりする。

「お相手は、ぼくでなくても、雪夫くんがいるじゃありませんか」
私は、多少の皮肉をまじえていった。

先輩に対しての、一応のエチケットもあった。

「ダメなのよ。あの子はね、自分で縄をいじるのを、とてもいやがるの。ほかの男に女を縛らせ、自分はそのそばで、だまってスケッチしているのが一番だっていうの。変わってるわねえ、ほんとに」
なるほど、変わっている。

自分では手をくささず。第三者としてそばにいて、たのしむというのだ。

変わってはいるが、しかし、サディズムの形態には、各人それぞれのこのみに、微妙な差異がある。

私は、宇多雪夫をおもしろい男だと思い、いっその興味をいだいた。その興味のなかには、好感もあった。

その「おたのしみ会」の夜は、土曜日だった。

十時をまわるころになってから、メンバーはつぎつぎに白泉閣へ到着した。いずれも自家用車だった。

つぎつぎといっても、紳士がたが三人。その紳士がたのご同伴の女性が一名ずつ、計六名だけだった。

「こん夜のみなさんは、ハイ・クラスなのよ。だから、あなたもその

つもりでね」

と、信代は私にいった。

ハイ・クラスばかりがあつまる会、といわれ、私は身がひきしまるような緊張と、かすかなおそれをいだいた。

思えば、これまで私が経験してきたアブの道程には、ハイ・クラスとよぶべき人間は、ひとりもいなかった。

むしろ、下層といってもよい社会の男女の、むきだしにされた、なまぐさい情痴ばかりともいえる。

そう思うと、私は寸時^{すんじ}、一種の劣等感に似たひけめをおぼえた。が、すぐに、そんなひけめをはねかえすだけの好奇心が、ムラムラと、むしろ闘争的に、私の胸にもえあがってきた。

樹林にかこまれた庭のなかの、べつ棟^{べつどう}の和室に、その男女六人の客がおさまり、時間をおくらせて、私と信代がくわわった。

紳士たちは、三人とも旅館のゆかたに着がえてくつろいでいた。鼻下にヒゲをたくわえた最年長とおぼしき紳士は、いかにも大会社の重役タイプだった。年のころは、もう五十二、三というところだろう。

そのとなりには、銀髪を長くのばした紳士がすわっていた。うしろへきれいなでつけた白髪は、その人物の風貌を、いっそう品よくみせていた。やはりもう、五十にちかい年齢だろう。澄んだ、わかわかしい目をしていた。

この紳士は、音楽関係の芸術家ではないだろうか。なぜか、私はそう直感した。

いまひとりの人物は、外見だけではちょっと職業は想像できなかつたが、大きな商店の主人といった、どこか粋^{いき}なふんい気をもつ、四十

年配の男だった。

つやつやと血色のよいあから顔で、口もとには、つねに愛嬌のいい微笑をふくんでいた。

あとで信代にきいてみると、むろん、こまかいことは教えてくれなかったが、職業だけは、私の想像がだいたいあっていった。

3

三人の紳士は、しずかに膳ぜんの上の酒をのみ、三人の女はうしろ手に縛られて、畳の上にそれぞれのポーズで身をくねらせていた。

男たちと女たちのあいだは、三メートルほどもあるうか。その距離は、わざと置いてあるらしかった。

もとより、常軌を逸した異様な光景であった。

そんなながめに、なれているはずの私にも、この座敷いっばいに充満している空気は、異常なものに感じられた。

それは、じつに、しずかだったからである。ぶきみなほどであった。

かすかに、三人の女性の、
「ウウ、ウウ」



という、あえぎの声があった。

女たちは、いま、生きているサカナにひとしかった。

ひとりの女は、真紅しんくの長じゅばん姿で縛られていた。

あとのふたりは、スリッパ一枚の半裸で縛られていた。

そのふたりのうち、ひとりのスリッパは黒かった。ぬれたような光沢をもつ、黒さだった。

偶然か、それとも、そういう効果を意識しての演出か、赤、白、黒

という、強烈ではなやかな色彩をまとった生きもののうごめきだった。

くびをうなだれ、ひざをくずしたポーズで、すねたようにすわっている。

むろん、女たちはみな若く、個性的な美しい顔と、みずみずしい肉体をもっていた。



黒いスリッパの、ひととき美貌の女性に、私はみおぼえがあった。

ひところ、ニュー・スターとさわがれ、主演映画も何本かあった、宮原美香子^{みやはらみかこ}だった。

長じゅばんの女は、いわゆるウリザネ顔の日本的な美人である。からだつきも、どこかなよなよとしていた。

そして、もうひとりの、純白のスリッパをつけた女の、シンと鼻さきのとがった、エキゾチックな横顔をみたとき、私はあやうく声をあげるところだった。

だが、かろうじて、それを耐えた。

「さあ、おかみ、そんな隅^{すみ}にすわっていないで、こっちへきていっばいやれよ」

重役タイプの紳士が、肉のあついてのひらで、手まねきしながらいった。

「さようですか。ちょうだいいたします」

愛想^{あいそう}よく、なれたものごしと手つきで、信代はさかずきをうけとった。

「あいかわらず色っぽいな、おかみは」

商店主タイプ^{えがお}の客が、目をほそめた笑顔でいった。

「さあ、あなたもどうぞ」

と、私に酒をすすめたのは、品のよい銀髪^{えんぱ}の客だった。

「はあ、ありがとうございます」

私は恐縮して、そのさかずきをうけた。

「このひと、うちの亭主の親友でしてね。お若いのに、おもしろい経歴がたくさんおありで、いろんなことを知ってるんですよ」

と、信代があらためて私を、三人の客に紹介した。信代の口には誇張があり、私は顔をあからめた。

そのとき、白いスリップの女が、はじめて、うつむけている顔の、目だけをあげて、するどく私をみた。

女の顔に、おどろきの色がはしかった。

私はそれに気づいたが、わざとそしらぬ笑顔をつくっていた。女も私の視線を避けた。

——おもしろいことになりそうだ。

胸のなかで、つぶやいた。

このまま知らぬフリで、こん夜はとおそうと、私は思った。

4

時間はながれ、客たちの血液にアルコールがまわりはじめた。

同時に、うしろ手にいましめられている女たちにも、じわじわと苦痛がやってきた。

時間の経過の残酷さは、女たちの肌に縄をくいこませる。呼吸はしだいにあらくなり、肩や腰がくねくねとせつないもだえをみせはじめた。

彼女たちの腕や胸を縛っているのは、ふつうのもめんの縄だった。その縄じりは、畳の上を三メートルもはって、まるで巨大なエサをつけた釣り糸のように、紳士たちのすわる、ひざの前までのびていた。

はじめに、商店主氏の手が、自分の前のその縄じりにのびた。

「そうら」

という、かけ声と同時に、彼は縄じりをつかみ、かなりつよく手前にひいた。

「あッ」

ちいさく悲鳴をあげると、長じゅばんの女のからだは半回転して、畳の上に倒れた。

ひざがくずれ、足がもつれるように空をける。緋ぢりめんのしたから、白いはぎがこぼれた。

江戸期のおぶな絵めいた妖美の世界が、そこにひらけた。

重役氏も、銀髪氏も、酒でくちびるをぬらしながら、うっとり、そのうごくおぶな絵に目をそそぐのだ。

「さあ、起きなさい、それぞれ、お客さまの前でそんなに素足をだすなんて。行儀のわるいひとだよ」

口でなぶりながら、商店主氏は手もとにひいた縄じりをゆるめた。女は、さすがに羞恥のために、耳たぶまでもまっかにそめていた。

そして、けんめいな力で背や腰をかがめ、またのばして、身を起こそうとした。

きものに似合うように、きれいにセットされた髪型が、みるまにむざんに崩壊していく。

起きようとしても、しょせんはムリなのだった。左右の腕は背なかに、たかだかとくくりあげられている。

うごかすことのできるのは、腰と足だけなのだ。

「ウッ、ウッ」

という、せつないきが、赤い、ちいさなくちびるから発せられ

る。ぎっしりと背なかに縛りつけられている二本の手首の、いたいたしいほそさ。なまめかしいむごたらしさ。

もがけばもがくほど、緋ちりめんのすそは彼女の意志に反対して無情にまくれあがり、白いすねは、ますますさらけだす。

それでも、背をまるめ、足を畳にふんばるようにして、恥ずかしい格好になりながら、なんとか起きあがりかける。

すると、それを待っていたかのように、男の手ににぎられた縄じりが、ひょいとひかれるのだ。

たるんでいた縄はピンとはり、女はどうとばかりに、また横転する。長じゅばんのすそが、赤い金魚の尾のようにねあがる。大きくまくれあがる。

ふとももの白さが、目にしみるようだった。男たちの視線が、その白さにねばりつく。

「ひどいわア」

という女の声は、泣き笑いであり、あまえもまじっていた。

ネコが自分のツメのなかにとらえたネズミを、ゆっくりとなぶる光景を想像させた。

女は、もう起きようとする努力をすてて、ぐったりと畳に身を横たえてしまうのだ。

全身を、くの字に折りまげた艶姿。長じゅばんのえりもとが、雨にうたれた花びらのように大きくくずれ、縄のしたに、まるで牛乳をぬったような白い、むっちりした胸乳のふくらみまでがみえた。

——すごい。

私は口のなかでうめき、なまつばをのみこんだ。

恍惚や興奮を、はしたなくあらわすまいと、私は齒をくいしばるよ

うな顔をしていたにちがいない。

なよなよとした姿態の美しさをもつ女だけに、ひとつひとつの動作やポーズが、まるで計算されたような、たまらないエロチシズムの魅力となつて、私のこころをぐりぐりとかきまわし、血をさわがせるのだ。

むろん、この女は、商店主氏が馴致したマゾ・モデルであり、この魅力も一種の演技だろうが、それにしても洗練されている。

また私は、自分で縄をとらなくとも、第三者のプレイをみることに、よりはげしい陶酔を感じるという宇多雪夫の性癖を、このとき、なるほどと思った。

それは、被縛の女のこまかい表情や姿態を客観的にみることができ、るゆえにちがいない。

——さすがに彼は絵かきだな。

と、私は感じた。

5

プレイはしずかに、しかし、やすみなく、ねばっこくつけられた。

“おたのしみ会”のめんぼくが、いかになく発揮されていた。

私は、はじめて“おとな”の責めプレイに接して感嘆した。

ここにはムチもなければ、なんの責め道具もない。

縄だけがあり、その縄は、どんな大じかけな、こけおどかしの責め道具よりも、あやしいムードをかもした。

自分がつれてきた女を、ほかの複数の男たちの目にさらす、ということとは、その女に三倍四倍の羞恥と心理的な苦痛をあたえる。

その効果のために“おたのしみ会”はあるのだった。三人の紳士は、たくみにそれを演出する。

単純な肉体的苦痛をあたえるよりも、女たちの内面の部分に羞恥や屈辱をあたえて、微妙な反能をたのしむという、一歩つつこんだサド心理ともいえた。

映画女優の宮原美香子をつれてきたのは、銀髪氏だった。

「先生、あたし、もういやよ、かえして」

と、黒いスリップの美香子は、だだをこねるように、銀髪氏にいった。

いやよ、とはいっても、すでに観念しているポーズだった。いまさらそんなことばを吐くのは、彼女の最後のプライドをしめそうとする弱音にすぎない。

「もうダメだよ、ここまできたら」

銀髪氏は、柔和な微笑でこたえた。そして、手もとにおさえてある縄じりを、はずみをつけてひいた。

「あッ」

ふいをつかれて、美香子はもろくも、

あおむけさまにひっくり

かえった。

スリップのすそが、黒い花びらのように、みごとにひらいた。

白いゆたかなふとももがむきだされ、淡いピンク色のパンティーが、そのもものつけねに、ぴっちりときいこんでいた。

「ひどいわ、先生」

美香子は子どものように、足をばたばたさせた。むきだしにされた恥ずかしい肌を、なんとかかくそうとあばれた。

「ああ、そんなにジタバタしてはいけない。ホコリがたつじゃないか」苦笑しながら、銀髪氏はやおら膳の前を立ちあがった。

縄じりをにぎったまま、美香子のそばへ寄った。

「おとなしくしなさい」

というと、その長い縄じりで、あばれる美香子の両足首をぎりぎり縛りあわせた。

「あッ、いやよ、先生、いやよッ」

美香子の悲鳴は、しかし、嬌声きようせいのひびきもあった。

銀髪氏は、足首を縛った縄を、さらに前面から、女の首のうしろへまわしてとめた。かなり慣れた手つきだった。

腹部を内がわにまげた、ゆるいエビ縛りのかたちになって、美香子は「ウ、ウ、ウ」とうめいた。

銀髪氏はニヤニヤ笑いながら、大きな、だまの皮でもむくように、黒いスリップを、さつとまくりあげた。

「ひゃあッ」

という黄色い声。淡い

ピンクのパンティーにつつまれたヒップが、ぷりぷりとはずむような巨大さであらわれる。

手いれのゆきとどいた、なめらかなツヤの肌。まぶしいような肉づきのまるみだった。

「この女はね、プロデューサーの前で、いきなり、こういう格好をして、このパンティーも自分の手でひきずりおろして、そうして、主役になりついたのですよ。みなさん」

この銀髪氏のじょうだんめいたことばも、美香子にとっては苛酷な、

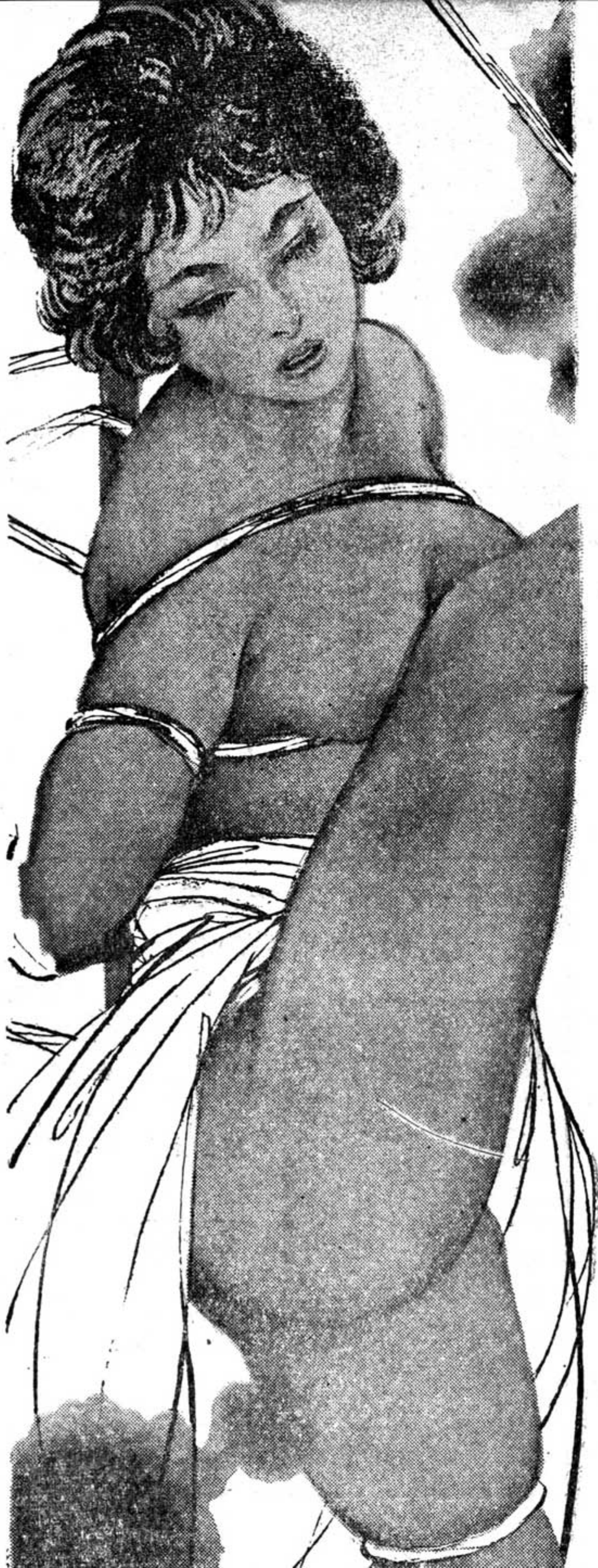
屈辱的な責めだったにちがいない。

「アアア、ククク……」

と、彼女のゆがんだくちびるから、反抗するような、意味のとれないわめきがもれた。

銀髪氏は、美香子のからだをうつむけに、ひざにかかえるようにして、はちきれそうな腰部の肉の隆起を、ひら手で、かるく愛撫のようになたきはじめた。

ピタピタ、ピタピタ、とそれは鳴った。



「いやいやいや、いやいやいやッ」

髪を左右にふって、美香子はもだえた。

エビ縛りのために、身を反転させてのがれることもできない。たたかれるままだった。

あまったるい悲鳴と、美しいしりをたたかれる音が、妙に刺激的に交差して、熱っぽい、しびれるような倒錯の酔いが、一座のなかにゆきわたった。

私は、となりにすわっている信代の表情をチラと盗みみた。

信代は顔をさくら色に上気させていた。それは、酒のためではなかった。同性の肉体のあやしい悦虐のもだえを目の前にして、信代もまた、異常な官能のたかぶりに、おのれの肉体の奥をうずかしているのだった。

6

「この女はね、さいきん知りあったんですが、ほんもののマゾなんですよ。めずらしいでしょう。若くて、なかなかの美人で、スタイルもいいし、ちょっとした掘りだしものでしたよ」

重役氏が、もったいぶった声をだした。

うなだれてすわったまま、まだなんの動的なプレイもうけないのが、その白いスリップをつけた、髪の高い女だった。

「では、このひとがマゾだという証拠を、お目にかけましょうかね」
いいながら重役氏は、よいしょとひくい声をかけて立ちあがった。
女は観念の目と同じ、ややだらしなく足をくずして、主人の加虐の手を待っている姿勢だった。

うしろ手にいしましめられた身を、微動だにしないそのポーズが、す

サド・マゾ・フェチシストにひそかに贈る 泰西出版資料の2大コレクターズ・システム



- 第1類** ヌートリクス社版出版物の中から
最上の選択で毎月定期的にお手元に
最低の費用で資料をおとどけます。
全30回 30カ月にわたる月ぎめ
コレクション
初回 5000円、以後毎月 2000円
- 第2類** ヨーロッパの同好者が贈る個人作品の
分割20カ月にわたる大集成
初回 5000円、以後毎月 2000円

○ゴルドン社版短期収集会

5カ月で各種の収集全部がそろふ。
初回 10,000円、以後毎月 2000円

○夏期特別予約

ヌートリクス社小冊子3冊1組の廉価集
(いずれもくわしくは返信料添付のう
えで本社あてお申し出てください)

泰西出版資料会社 横浜市中区北方町 1-67
Sitten-Bild-Verlag KG. TEL (20) 9313

でに被虐の味を知る女のものにみえる。

重役氏は縄じりをつかんで女を立たせ、いままで自分がすわっていた床柱の前まであるかせた。

「よし、ここに立つんだ」

立たせたまま、女の背なかを、床柱におしつけ、縄じりのあまりで、かたく、ぐるぐる巻きに縛りつけた。

指一本の抵抗もみせず、女は床柱と一体になった。胸と腹部に縄がかけられ、そこだけが沈むようにくびれた。

「さアて、これからが、ちょいと面倒だ」

いつのまに用意したのか、重役氏の右手には、もう一束の縄があった。

その縄の端で、女の片足首を縛り、さらに縄を飾り欄間のすきまへおとし、ずるずるとひいた。

「う、う、うッ」

左足首を縄でつられ、彼女は右足だけでカカシのように立った。柱に胸を縛りつけられているから、倒れるような心配はない。

だが、左足を極端にひらいて

つられたために、腰骨や関節や、いもの筋肉の苦痛が、たちまち

彼女におそいはじめた。

「ひ、ひ、ひッ」

という、苦痛を耐える声が、

彼女の口のなかにこもった。

「こうしておいて、と——」

ひとりごとをつぶやきなが

本誌独占!

男性緊縛の魅力

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| ☆禪姿二人プレイ (略B 18) | ☆純白の禪姿 (略B 26) | ☆踏んづけられて (略B 34) |
| ☆禪姿一人プレイ (略B 19) | ☆虐げられる禪男 (略B 27) | ☆男を責める男 (略B 35) |
| ☆禪姿ふたりの男 (略B 20) | ☆三角木馬責め (略B 28) | ☆おれのエモノ (略B 36) |
| ☆全裸の男性美 (略B 21) | ☆竹を背負って (略B 29) | ☆首しばり3態 (略B 37) |
| ☆禪姿一人緊縛 (略B 22) | ☆禪姿開脚の図 (略B 30) | ☆無残、男責め (略B 38) |
| ☆青竹十字背負い (略B 23) | ☆全裸の男 (略B 31) | ☆縛られた禪男 (略B 39) |
| ☆禪姿股間ポーズ (略B 24) | ☆変わり海老責め (略B 32) | ☆禪姿の悦虐境 (略B 40) |
| ☆変形縛り責め (略B 25) | ☆緊縛悦虐境 (略B 33) | |
- △各三枚一組三〇〇円▽

ら、重役氏は女のスリッパのすそをいっぱいにたくしあげて、胸の縄目のあいだにはさみこんだ。

下半身があらわになる。すんなりとのびた白い足。そして、その足のもっともふとい部分や腰のまわりに、まるで皮膚のようにびったりと吸いついているパンティー。

片足をつられていたために、パンティーの下部の布地が、裂けんばかりにのびていた。

「こうしておくと、マゾの証拠が、まもなくあらわれるですよ。じわり、じわりとね」

微笑をうかべながら、重役氏がいった。

女は、まだ目をとじていた。が、口紅をぬったくちびるは、ゆるんだように半びらきになっていた。

下くちびるに、かすかなけいれんがあった。おなじように、黒いまつ毛も、こまかくふるえはじめた。

片足づりの苦痛は、しだいにつよく、きびしく、女の肉体を責めつけていく。汗のつぶが、女のひたいにガラス片のように光った。

「アア、アア、アア……」

半びらきのくちびるから、うなるようなひくい声がもれはじめた。女のマユとマユのあいだに、濃いシワが寄った。

あごがたるみ、するとくちびるは、死んだ貝のようにひらいた。私はみた。

女の苦痛が、しだいに快感とすり変わっていく表情のうごきを。

「ウウウ、ウウウ……」

そのあえかなおえつは、苦痛と同時に、また骨のずいに針がつきささるような異常な快感ゆえのあえぎであることを、私は知っていた。

「ごらんなさい。ねえ、りっぱなマゾですよ、この女は」

重役氏は、かがみこむようにして、その場所をゆびさした。

たしかに、パンティーの一部に、重役氏のいう、マゾの証拠がにじみでていた。

声のないどよめきが、一座のひとびとのあいだにながれた。

「つってから、まだ五分とたたないのに、もうこれですよ。フフフ……」

だれにしこまれたんでしょうねえ、このひとは、こんな性癖を——」

重役氏は目をほそめ、まんぞくげにつぶやいた。

——ぼくですよ。きっと

私は、もうすこしで、そうさけぶところだった。が、かろうじて声をおさえた。

その女は、二年前にわかれた、ファッション・モデルの三沢京美だった。

イスに縛りつけて、口をひらかせ、大量の水を私の手でむりやりのませた女。

そのまま放置された京美は、やがて自分の体内から不浄の液体を排

男性の悩みは マグークインで



磁力即効回春器

☆性欲減少に！ 一回の御使用で心身ともに爽快

☆早漏防止に！ 取外す迄は完全保持目的を達す

☆インポに！ 使用後興奮状態になり満足を得

マグークインは磁力放射線を合法応用化した製品で性的不満は即時解消します。取付は簡単副作用なくそのまま歩行、入浴が出来る事は本器の特徴です

パンフレット 送 0円
説明書 密 30円
（要 3）

定価 一個 八〇〇円（送料共）

東京都中野区野方町二の一四九七の三
発売元 信光社 マグークイン本舗

振替東京五一七二八番
電話東京(385)六五〇六番

代理店・取次店
募 集 中

せつした。

私はその部屋のぬれたゆかを、彼女のゆたかな髪の毛でぬぐったのだ。

下劣だわ、最低だわ、あなたはキチガイだわ！

と、京美は私を罵倒し、憎悪の目を突きたてた。もともと、私とのつきあいは、彼女の打算から出発したものだった。

まもなく彼女は、私から遠ざかり、某電機メーカーの部長とやらに、かこわれる身となった。

気ぐらいの高い、ぜいたく好きの女であった。

その三沢京美が、いつのまにか強度のマゾヒストと変わりはて、いま私の目の前に、むざんな姿をさらしている。

——きみをこんなにしたのは、ぼくなのか！

私は、こころのなかでさげんだ。

女体責め分譲写真

ご注文は略号を明記のうえ振替か現金書留でお申し込みください

- ★女囚緊縛ポーズ (略A6)
- ★野外縛り (略A7)
- ★凄絶切腹六態 (略A8)
- ★全裸緊縛ポーズ (略A9)
- ★臀部責め (略A10)
- ★水責め・湯責め (略A11)
- ★本格鞭打プレイ (略A12)
- ★豊満なる緊縛女体 (略C6)
- ★海老責め地獄 (略C7)
- ★眼帯の女 (略C8)
- ★さるくつわ艶姿 (略C9)
- ★制服の乙女縛り (略C10)
- ★裸女棒しばり (略C11)
- ★密室の呪縛 (略D6)
- ★全裸変形地獄図 (略D7)
- ★無残二人しばり (略D8)
- ★浣腸悦虐フォト (略D10)
- ★浣腸陶酔ポーズ (略D11)
- ★力つきた処女 (略P1)
- ★蛇が白肌を (略P2)
- ★迫るローソクの炎 (略P3)
- ★全裸責めの魅惑 (略P4)
- ★晴れ着もあらわに (略P5)

「ちがう。あなたのせいではない。とこたえてもらいたかった。しかし、京美の口から返事はなく、ひらいた歯のあいだからもれるのは、なまぐさい女獣のうめきだけだった。私はぼうぜんと、片足づりにつられた京美の、虚栄も羞恥もすてて

喜悦におぼれこんでいる肉体をながめていた。「さあ、こんどはおかみが縛られる番だよ」という、だれかの声も、「待ってました」という拍手も、しばらくは私の耳にはいらなかった。(つづく)

モデル別ポーズ集

- ★股裂き三人選 (略P6)
- ★肌くらべ全裸縛り (略Q1)
- ★花ひらく受縛天国 (略Q2)
- ★血みどろのリンチ (略X8)
- ★悦虐の表情 (略X9)
- ★本格吊るし責め (略X10)
- △各三枚一組三〇〇円、ただしA8は六枚一組八〇〇円、X8は五枚一組五〇〇円V
- ☆舟木喜代子のBG緊縛
 - ▼大の字縛り (略F5)
 - ▼ハダカ男馬乗り (略F6)
 - ▼豊艶乳房しばり (略F7)
- ☆風早由美子の妖美緊縛
 - ▼樹間のニンフ (略H1)
 - ▼嘆きのセーラ服 (略H2)
 - ▼死のベルト誘い (略H3)
- ☆井神せい子の豊満縛姿
 - ▼窓ぎわの残虐 (略I1)

☆村上ユキ特選緊縛フォト

- ▼全裸後ろ手縛り (略M1)
- ▼お灸灼熱地獄 (略M2)
- ▼本格縛り責三態 (略M3)
- ▼豊麗切腹 (略M5)
- ▼閨房股間縛り (略M6)
- ▼凄絶雪責め (略M7)
- ▼古風な緊縛 (略M8)
- ▼椅子の上の無残 (略M9)
- ☆西牧えり子の悦虐縛り
 - ▼中国服悦虐姿態 (略N1)
 - ▼いたぶられ姑娘 (略N2)
 - ▼乙女の折り (略N3)
 - ▼全裸いたぶり (略N5)
 - ▼鼻責め嗜虐 (略N6)
 - ▼哀花受難 (略N7)
 - ▼制服の少女虐め (略N8)
 - ▼悦虐の園の女 (略N9)
 - ▼棒責め立ち姿 (略N10)
 - ▼棒責めの伏姿 (略N11)
- ☆西条さくら豊艶緊縛
 - ▼乳房地獄責め (略S1)

☆高月まゆみの縛悦姿態

- ▼腹部への嗜虐 (略S2)
- ▼悶姿の祭壇 (略S3)
- ▼ゴムひもの責め (略S4)
- ▼砂浜荒縄しばり (略T5)
- ▼あばらやの恋縄 (略T6)
- ▼碁盤責め三態 (略T7)
- ▼野外十字架縛り (略T8)
- ▼犬になった女 (略T9)
- ▼車中の拘束 (略T10)

☆島崎ユカ魅縛ポーズ

- ▼裸身は嘆く (略U1)
- △各三枚一組三〇〇円V

サデイスチン集

男性を被害にあえがせる
サド女性の魅惑ポーズ

- ☆女王様としもべ (略W1)
- ☆ドミナのムチ (略W2)
- ☆女に虐待される男 (略W3)
- △各三枚一組三〇〇円V

セックス 女性の愛を独

◎特許
従来のスキンの
外面に一平方ミ
リ約五百個の微
粒突起（すべり
止め）付き産制
品です。
一ダース 三〇〇円
二ダース 五七〇円
三ダース 八三〇円
四ダース 一〇〇〇円

☆粋な
おみやげ
贈物に
大好評！
●特製一函
七五〇円

★一雄で百数頭のメスに
どむ！ 驚異のオツトセイ
の寧丸を乾燥、粉碎精製し
た天然ホルモン福寿素の服
用は、若々しいエネルギー
の源泉です。

九八〇円

◎女性の間に
引張りダコ

(1) 湯又は水に浸すとスポンジより感觸がよく、やわらかくなります。

(2) 水を切ると自然に硬くなります。

(3) ヨゴレは石けんできれいになります。

(厚生省認可)

好評新発売！

一本五〇〇円

◆ただ塗るだけでシビ
レる！
行為の前にそつとひと
ぬり：女性の不感症に
ぬつて効果ズバリ！
チューブ入

三九〇四

★男女とも一枚た
べて性欲亢進！
媚薬入りの成人
向キョコをお試
しあれ！

▼トーサンピン
チヨコレート
六枚一函
六〇〇円

▼サースモン
チヨコレート
一枚一函
一、二〇〇円

★避妊と性病
予防に
効果百%

▼避妊には女性
の局所にクリー
ムを押出せば、
OK!

▼淋病・梅毒の
予防には男性器
にぬればOK!

(厚生省認可)
一本五〇〇円

◆男も女も見
て喜ぶ秘蔵版
必す
公開！
始め

▼▼▼
鍵穴の破る女
他い花びら密
各養1300円

★快感を2倍にする！

一組11、三五〇円
(個人名で送ります)

贈無
呈代

ハガキで申込次第、総合
力タログ無代進呈中です
(直接御注文の場合は現
金書留か、カワセで)

◆**「ハッパ」** ボディビ
原理で、あなたの性器
を膨大させる素晴らしい
方法があります。
「ラージ真空増大器」
はあなたのその部分だ
けを肥大伸長させるた
めの「専門器具」とし
て特になしく考案され
たものです。

東京京杉並区神戸町一二八
株式会社
療養の友社
電話(398)四六七九
振替東京118443
高田馬場より西武線井荻駅下車徒歩約二分
井荻駅行バス5分、柿の木町降

株式会社

療養の友社

電話(398)四六七九
振替東京118443

高田馬場より西武線井荻駅下車徒歩約二分
國電荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町降

ご存じですか？

自動アンマ番

特価 ★ ★ ◎
 ゴム付 女肉ポけお女
 1,950 円 マめも体でで性



◎女性から注文殺到！

★お悩みの処にアテるだ
けで自動的、快テン
ポでバイブレーターが
肉体をつらぬく！

★女も男も一度アテたら
やめられぬ無類の快ア
ンマ器の出現！

読者サロン



同性の友だちがほしい

小生、二十七歳の好男子です。お互いの人格と社会的な地位をキズつけないように、同好のかたと交際いたしたいと思ひます。

ボク、相手を求め、毎週金曜日の夜、日比谷パークにでかけますが、プロばかりで、恐ろしくなりました。アマのかたがおりましたら、お友だちになってください。(東京・水原一夫)

村上さんのファンです

小生は村上ユキさんのファンです。『画報』五月号での、とらえられた裸女以来、村上さんの全裸を拝見することがありませんでした。最近号でまた再登場したことをうれしく思います。

同じモデルの西牧さんに比べると、やはり小生の好みからして、村上さんをかいます。

とくにあの豊満なからだ、長い髪、まるまるとしたヒップ。すんなりとした脚、ボクをシビレさせます。

さて『画報』9月号を見て残念だったのは、痛めつけられる白肌の左ページの左足を少し起こし、右足を流してある写真は、グッときますが、肝心のところが消されているのが残念です。もつとも、そこまで要望するのは無理でしょうが、せっかくのポーズがくずれて興ざめ。とにかく、最近の貴誌は、男性ヌードに力をいれているようですが、私たちは一部のひとであり、大部分の緊縛マニアは、女性に対する

る加虐とか被虐に興味を持っていると思うのです。

ですから、女性という神秘の肉体をいじめることにより、われわれは満足するものです。男性フオトは一部でよい。

西牧、村上嬢などのほかに、新人モデルを発掘して、マンネリを打開してください。

(長野・百生)

和歌山さんの俘虜に

和歌山由夫様、あなたのお呼びかけに応じたいと思います。

小生は三十五歳、海軍時代の体力を生かして、あなたのご要望にむくいたいと思います。一度思うぞんぶんに料理してください。

住所をお知らせください。なお小生の住所は「風俗奇譚」編集部に知らせてありますからご連絡ください。(大阪・正幸)

四つの希望

貴社の発展を祈り、愚案を呈したい。まずフオトであるが、

① 誌上映画劇場なるページ(簡単なストーリーによる緊縛)を設ける。

② 読者の連絡室を設け、文

通、交際などの仲介の労をとること。

③ 代理部で写真の分譲を行なっているが、このほか緊縛用のロープ、サポーター、バイク白禪、赤禪などを取り扱ってほしい。

④ モデルと読者との文通への助力。

以上四項目を、ぜひはからってください。(福島・西野生)

フンドシ会を作ろう

先月、近所の書店で『画報』をはじめて買いました。そして、多くの同士がいることを知り、心強くなりました。

ボクは、男性マゾ、サドに興味をもっております。そこで、本誌の方針がすっかり気に入りました。

大阪で同類誌がでていますが、比較になりません。男性を重点にした編集だけに、貴誌をわれわれマニアで発展させたいと思うのです。

そのためには、本誌を中心に、フンドシ会の誕生を急ぎたいのです。同士よ、声を大にして集まろうではないか!

(兵庫・玉岡)

映画の禪シーンを

最近の日本人が、戦前のように禪一本でのたくましい姿が見られなくなったように、映画でも少なくなった。たまに見たとしても、端役の俳優かエキストラであり、主役の俳優などほとんど見られない。

それでも、昨年だったか『海賊八幡船』という映画で、大川橋蔵は裸にならなかったが、名もない俳優数人が、赤禪一本で活劇を見せたことはうれしかった。

また、中村錦之助主演の『宮本武蔵』では、相手が人気俳優のフンドシ姿だけに、ひさしぶりに満喫できた。しかも、はでな花色木綿の六尺禪だけに、魅

力があつた。

さらに、錦之助が相手役の女優の前に、フンドシ姿で仁王立ちになった瞬間、思わずドキッとさせられた。

また、このほかに『ふんどし医者』これは興味薄し『七人の侍』の三船敏郎の白禪は、全編を通じて、フンドシの決定版というところである。

さらに『潮騒』は、ソドミア作家・三島氏の原作だけに、この種のシーンがふんだんにあるだけに佳作。

とにかく、編集部に見たいのは、ときには、このような映画の「フンドシ特集」を誌面で紹介してもらいたいと思った次第。ご一考を願う。

(東京・山本)

南郷さんはスバラしい

『画報風奇』8月号の南郷さんの男性美に魅せられたファンです。

ファンといっても女性でなく申し訳ありませんが、熱くなるほどあなたが好きで好きでたまらないのです。

いちどでもいいです。いえ、五分でもけっこうです。せめてあなたとお茶でも飲みながら、お目にかかりたいのです。

気色の悪い男とお怒りでしょうが、どうしてもお会いしたい気持ちで、いても立ってもいられないのです。

お願いです。哀れなボクのことをご理解ください。

(東京泉・一夫)

絵物語をふんだんに

小生、貴誌の愛読者のひとり。そこで編集部に要望する。

吊り責めや海老責めを次号に収録してほしい。その点『艶麗無残』や『画報風奇』第2集の海老責めなどはたいへんけっこう。

また絵物語を多くしてほしい。『諸国責めばなし』は実によかった。次号からの掲載を望む。

(金沢・S・K)

どなたかお友だちに

毎号拝読を重ねるごとに、他誌にないセンスにたまらない魅力を感じる読者のひとりです。ことに外誌T・M、アドニスのごとく上半身はだか、短いブ

『風俗奇譚』在庫のお知らせ

△36年度▽

10月号△男同士・女同士の愛欲
図絵特集号▽
9月号△サド・マゾ特集号▽
8月号△フェチシズムの人達▽
7月号△責めさいなまれる女と男特集号▽

(定価各一五〇円)

6月号△女装に陶醉する男達▽
5月号△鞭に憑かれた男と女▽
4月号△東西刑罰残酷物語号▽
3月号△マゾヒストの世界号▽
2月号△鞭打悦虐小説傑作集▽
1月号△ソドミアとレスボス▽

△35年度▽

12月号△伊藤晴雨責め自選集▽
11月号△戦争残酷の記録特集▽
10月号△サディストの群れ号▽
9月号△女装する男たち特集▽
8月号△レスビアンの生態号▽
7月号△食人症特集号▽
6月号△フェチシズム特集号▽

(定価各一四〇円)

(定価各一三〇円)

夏の臨時増刊号(定価一八〇円)
法悦特集五月号(定価一四〇円)
春の臨時増刊号(定価二〇〇円)
艶妖特集二月号(定価一四〇円)
風俗奇譚8月臨時増刊IIサド小説とマゾ読み物号
(定価二五〇円)
風俗奇譚5月臨時増刊号
(定価二八〇円)

ご注文は、現金書留か振替
為替が便利です。

リーフ、またはサポーター、キ
ャルマ姿のパラエティに富ん
だポーズをぜひ採用してほしい
です。

また六尺褌、サルマタ（半タ
コ）のように純白の生地の下股
にびったり密着したのもけっ
こうです。

小生も日常は、短めのブリー
フ、キャルマタを愛用していま
す。そこで下着に興味のある諸
兄とM・Sに関し、またはホ
モ、アクロなど、文通、交際し
たいと希望します。ご連絡くだ
さい。（立川市立川局止め・大
森芳夫）

女性のアヌスを望む

わたしは大の浣腸マニアで
す。現在恋人（女性）がありま
すが、浣腸を施すだけの勇気が
ありません。ひとり空想して楽
しんでおりましたが、夏川絹子
嬢という女性マニアがいること
を知り、気を強くしました。

しかし小生は、浣腸よりも、
もっと恥ずかしい性向があるの
です。つまり女性のかわいらし
い、あの「アヌス」だけに心臓
の高鳴りをおぼえるのです。
ボクのは変質者でしょうか。

読者諸兄姉のご批判をいただき
たいのです。また、小生をご理
解くださる女性はおらないでし
ょうか、もしおりましたら、ご
交際したいのです。

（神奈川・上田大介）

男をいじめたい

読者の皆様、はじめまして：
：わたくし『画報』八月号から
のファンなの。よろしくネ。

アタイは男性の股間にピツタ
リした細いズボン姿が大好き。
だって、ハッキリ見えるのです
もの。そんな姿を見ると、ドキ
ッとしちゃうの。

アタイ、ご交際したいわ。文
通でもかまいません。いろいろ
教えてほしいの。未知の世界を
……。お願いネ。

また、南郷、大和さんのモデ
ルのほかに、十代の美少年のハ
ダカ緊縛とフンドシ姿のフォト
ほしいの。

もし許されるのでしたら、愛
読者からつのもいいんじゃない
ない。おりますわヨ。南郷さん
みたいな男性美のかたが……。
アタイ、まだ二十歳なの。ウ
フフ、おませかしら。でも、好
きな、男のかたをいじめたい

あらゆる角度から「悩み解消の自宅療法を
教ゆ」小冊子・楠山栄三著・コンドーム二
個・すりもの・希望の方は100円送金・

SEX

◎早く終る・女性がなげく・手軽に治療・
五〇〇円送金せられよ・クスリとズバリ
そのものを書く性愛の本・進呈
太く恥づかしくない・立派に育てる療法器・
コックソリ使える・カタログ無代進呈・
性・臭・媚薬・素人でも扱える・副業通信販売
乞書面・御自由・方法伝受す・一県一店代理店・

愛慾の炎をもやす……木の実

ガラナ……の実はそのままでしたべられな
酒・ウイスキーなどにソツと一パイ・男も女も・
ポケット瓶十回分・五〇〇円・特用千円

東京葛飾区本田中原町三五六番

白 水 荘

（どなたにも個人名で密送）

優生相談室

の。あたしって、魔女かしら……
じゃ、またネ。

（北海道・道産子）

フンドシ愛好者へ

この世に生をうけて三十余
年。小生、もの心つき始めてか
ら今日まで、六尺フンドシ以外
のパンツなどは、身につけたこ
とがないという男。

もっとも、父が職人だった関
係から、それに刺激されたもの
だが、それにしても、よき父を
持ったものと感謝している次
第。

フンドシ愛好者諸兄との交際

を望む。

（東京・N生）

男性ヌードを

いつも楽しく愛読していま
す。ボクが男責めファンである
から申しあげるのではないので
すが、とにかく、女性のハダカ
よりも、最近では男性の裸体が
見られるのが普通です。

例をあげますと、映画のポス
ターがそうです。

洋画にしても、モンローの裸
像より、男優の裸身のほうが、
強烈に写されています。

とくに魅力としては、エネル
ギッシュなボディとか分厚い胸

部、たくましい下肢などでしょう。

男性のボディは、女よりも男自身に興味があるものです。せせ、男性ヌードの焦点をこのようなどころにおいてください。

(東京・間宮)

編集部へ注文

ボクは、若い男性のたくましい裸身に好奇心を持つ男です。

そこで、編集部の小生のアイデアを寄せた次第。

① いつも、女性の写真が多いが、女性フォトは他誌にまかせて、男子ヌード専門にしてもいい。

② もっと多くのポーズを考え、誌面を飾ってください。できたら全裸も……。

③ 男性モデルが中年なので、できたら、高校生以上の若い人を使ってください。

(東京・M生)

川井さんご住所を

9月号の『読者サロン』で同性のお付き合いを求めている「東京の川井博さん」ボク交際したいのです。

当方二十三歳のサラリーマン。なんとなくあなたに魅力を感じました。お会いしたい。ご住所お知らせください。お待ちします。

(東京・富井)

南郷君へ

最近の貴誌のすばらしさは、他の追いつくを許さないものがある。

とくに、男責めと六尺禪のグラビアの迫力には、圧巻される。モデルも、南郷君の登場により、一段と充実してきた。

なかでも、9月号の障子にはさまれたポーズは、かねてからの念願だった戸外縛りの二ペー

す。

ただ残念だったのは、海水パンツの跡が残っていたことです。南郷君、貴君にパンツは不似合い。ふんどし一本がよろしい。堂々と正面きってポーズをとってください。頼む。

(東京・南郷ファン)

もっとわたしを責めて

黒木竜様、誌上でわたしを責めてくださいまして、ありがとうございます。まったくすばらしい責めに、からだは熱くなりました。これからも、わたしを責め恥ずかしめてください。さて、わたしの近況をお知らせいたします。

現在、わたしは苦痛の激しい浣腸責めを望み、アヌスに苦しみを与えてもらいたいと願っています。

先月でした、貞夫さん(八月号のわたしの告白に登場したバーテン)が、これこそ最高の責め道具として、持ってきてくれたものを使ってみました。

この器具は、牛乳ビンの口のほうをローソクでとかして、丸味をつけたものです。

ビンの口にワセリンをたっぷりつけて、プレイを行なうのですが、わたしのからだにも限度がありますので、口の部分の細かいほうはなんとか受けつけましたが、それ以上はどうしても階

画報風俗奇譚△在庫のお知らせ▽

△36年度▽

- 10月号・写真絵で描くアブ特集
- 9月号・縛虐悦女60態写真特集
- 8月号・魅縛縄飲の姿態写真集
- 7月号・緊縛競艶肌比べ写真集
- 6月号・男性緊縛と女人切腹集
- 5月号・セーラ服縛り写真特集
- 4月号・責められる女8態特集
- 3月号・伊藤晴雨責め写真特集

- 2月号・女性刑罰史と悦虐画集
- 1月号・女装と女体責め絵巻集

(定価各一八〇円)

△35年度▽

- 秘蔵版・第2集(定価三〇〇円)
- 画報・風俗第1集(売り切れ)
- 画報風俗奇譚2集

(定価一八〇円)

画報風俗奇譚秘蔵版

- 画報風俗奇譚第4集(定価一八〇円)
- 画報風俗奇譚第5集(定価一八〇円)
- 画報風俗奇譚第6集(定価一八〇円)
- 画報風俗奇譚第7集(定価一八〇円)

画報風俗奇譚4月臨時増刊……

(定価二八〇円)

画報風俗奇譚1月臨時増刊……

(定価二八〇円)

入できず、ついに失敗に終わりました。

次に貞夫さんは、わたしを小さなテーブルに縛りつけて、あむけに寝かせました。そして、トウモロコシをビニール製の袋で包み、これをあたしのアヌスに挿入しました。これは案外簡単でした。

さらに、こんどは袋をとって入しましたところ、モロコシの粒が刺激して、快い興フンを誘ってくれました。

最後に温泉浣腸ですが、貞夫さんは、わたしにとっても恥ずかしい行為をしたのです。

わたしは例によりベッドに上半身だけ腹ばいになり、手足をゆわかれてじっとしておりました。

プレイの開始です。ワセリンも何もつけません。そこへいきなり挿入してきました。わたしは全身の力を抜いて受け入れました。

しかし温泉がはいって来ません。しばらくジッとしていたかれは、いきなりからだを動かすはじめました。

「やめて、痛い、やめてエ」
いくら叫んでも、かれは作業

をつづけるのです。わたしのアヌスはカッカッとほてってききました。しばらくすると温泉がはいってききました。わたしは、その暖い液体を体内に感じ、思わずウツトリとしました。

あのような浣腸も、ときにはよいものだと思います。

こんどは貞夫さんをそそのかして、玲子やマダムにもやらせてみようと思います。その結果のようすは、また後日記したいと思います。
(夏川絹子)

無残絵物語を

ヒノキ様、お便りうれしく拝見しました。同好のかたがあちこちで名のりをあげられるのを見、うれしく思っています。

それに9月号には「流血の饗宴」なる裸女無残絵巻が発表されて、わたしのようなマニアにはたいへん楽しい読み物でした。とくに血汐にまみれて果てる裸女のくだりはグッとくるものがありました。

ドラクロアの名作「サルダナパールの死」よりヒントを得たものと思いますが、原画の中の右隅に画かれている、黒奴に後ろから咽喉を鋭い刃でえぐら

れ、のけぞり倒れんとする全裸の美女の姿態の美しさはすばらしいものです。唇をかみしめて、無念そうに見開いた目の横顔はぞっとする程美しく、グッと胸に迫ってきます。

わたしもヒノキ様と同様、古風な題材の裸女の無残絵模様のみに興味を持っています。現代物には全然といってよいほど興味はありません。現実の「殺し」は許されるべくもありませんが、無残絵にこれを求めるのは許さるべきであります。

それも過去に題材を求めるとある程度のファンダシーを与えてくれます。

わたしは何度も申上げるように、ふんどしをしめた裸女の血闘という全く異常な題材にあこがれており、それが日増しに強烈なものとなってきたております。この異常な趣味を満足してくださいるのは『風奇』においてのみ可能なのです。

他の類似誌もあります。が、『風奇』のみがわたしの気持を理解開拓していただきたく存じます。

(禪狂)

編集室より

今月から、しばらく画報を休刊して、本誌一本に総力を結集していく予定である。したがって、いものを読者のお手もとにお送りすることを約束する次第である。

まず虚飾に属する(?)色刷りを改めて、身のある絵物語にした。画報の要素を別の形で生かそうとしたわけである。

読み物も、粒をそろえた。一編一編が、読みごたえのあるものを厳選し、さし絵にも力を至した。それだけ時間をかけて、いいものにしたいという念願からである。ご叱正を待つ。

風俗奇譚 十一月号

定価二〇〇円

昭和三十六年十月二十日印刷
昭和三十六年十一月一日発行

編集人 高倉 一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一ノ三五

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番

電話東京(291)二四三〇番